めくれぬあとがき

舞夜じょんぬ

その一　班ノートのひみつ　１

――遅いなあ、社会の先生まだ来ないよ。

二時間目が自習だと最初からわかっているんだったらそれでいい。ちゃんと自習用のプリントだって用意されているだろうし、適当にうっちゃっておけばあと はおしゃべりしてたっていいんだから。けど、十分くらい経つというのに全然連絡が来る気配もないなんて、絶対おかしい。

しかたない。これでも私は一年Ｄ組・女子評議委員。クラスの代表として職員室で「先生どうしてこないんですか」って聞きに行ってみようかな。いい時間つぶしにもなるし。

男子三人、女子三人、横二列にひとつの班がまとまっていて、私の席は女子側の真ん中に位置している。クラスはもう、休み時間と同じ乗りで盛り上がってい る。席に着いたまま私は振り返った。真後ろの席にいるはずの相棒くんに声をかけようと思ったんだけど、いなかった。

一年Ｄ組男子評議委員・立村くんの席が空いていた。

各授業の前に評議委員は職員室へ行って、先生たちの教科書やチョーク入れなどを教室まで運ぶ。分担もすでになされている。私は数学・理科・音楽を、立村 くんは英語・国語・社会をそれぞれ担当していた。教科書とチョーク入れ程度だったらそれほどでもないけど、社会の時なんかは大変だった。くるくる丸めると 私の背丈近くもあるような地図とか年表とかも一緒に運ばないといけない。面倒くさいけど、でもいいことだってあるのだ。タイミングよく職員室に行けば、先 生同士のおしゃべりを盗み聞きしてテスト情報を仕入れることだってできちゃう。他のクラスで起こった出来事をいち早く知ることだってできる。私をふくめた 中学生にとって、情報通な奴は人気者。評議委員の面倒なお仕事、そのご褒美、もらったっていいじゃない。

それにしても立村くん、先に様子見に行ってくれたのかな。

せっかくだったら私に、一声かけてくれたってよかったのにな。

だってもうずっと一緒に評議委員やってるのにな。

「美里、誰探してるんだあ？」

あんたには用なんてないわよ。私は立村くんの隣に座っていた貴史に答えた。

「立村くんに決まってるでしょ！　だって先生来ないから、どうしたのかなって思ったの！」

「ふうん、あいつな。さっきな、菱本さんに呼ばれてったぜ」

先生を「さん」付けで呼ぶのが青大附中の流儀だった。もっとも私たちが「さん」付けしたくなるような性格のいい先生に限られるけども。

私は貴史の鼻先をはじいてやりたい気持ちを抑えながら尋ね返した。

「菱本先生に、なんでだろね、貴史。なんか用あるのかなあ」

二学期の班換えは、男女四人ずつのリーダーに班員選択権が与えられていて、たまたま私と立村くんが同じ班だった。仲のいい子を優先して選ぶのはリーダーの特権。とっぱじめに立村くんが選んだのは貴史だった。

なんだか、謎な組み合わせだと思うな。

「ねえ、貴史、それじゃさ、立村くん、社会の先生呼びに行ったかなあ」

「さあ、俺は立村のお目付役じゃねえよ。さあてな」

貴史は口端を上げてにやりと笑った。
――もう、貴史、ばっかみたい、絶対誤解しているんだ！
入学してからそれほど経たないうちに、貴史は私に「あのな、美里、お前も相当立村の顔ばっかし見てるようだけどなあ」とか、わざとらしく話のネタに持っ てくるようになった。最初は「あんた、あとで一発蹴りいれるわよ」と脅していたけど、貴史の話は夏休み以降もどんどんエスカレートしてきて、天使の羽を 持った私・清坂美里といえどもだんだん部ちぎれそうになりつつあった。ああ、これがね、一年前だったら、私絶対貴史の急所蹴り一発決めていたはず。なのに、なんか中学に入ってから、貴史とのリズムがずれてきてしまっている。どうしてだろう。
けど、言うことは言う。私は貴史の机を指先でばしっと叩いた。平手打ちしないだけましだと思いな。
「なによ、その言い方ってすっごく、やらしいよね」
「変なこと言ってねえだろ。要するに美里が意識しまくっているから、そう思うだけだろ」
「何に意識しているって言うのよ！」
「わかっているくせに、とぼけちゃってまあ」
ここまで言われたら、やっぱり、蹴りを入れなくちゃ。
さすがに青大附中の校舎内ではしたないことできないけど。校門を一歩出てしまえばよけいなこと考えなくてかまわないツーカーの幼なじみだもんね、貴史とは。明日の太陽を拝めるかどうか、まあ覚悟しといてね。
私の考えていること、気付いているんだかいないんだか。貴史は私の顔をにやけて眺めた後、不意に肩越しに視線を向け、わざとらしく声を挙げた。
「あ、立村来たぞ！」
そんなに叫ばなくたって、わかるわよ。
立村くんの机にもう片っ方の手を置いていた。なんか変な感じ、指先を引っ込めた。自分の机と同じ材質なのに、違った冷たさが指先に残っている。指先をもみながら振り返ろうとすると、貴史が立ち上がってわざわざ私の耳元に擦り寄って来て、
「お待ちかねだろ」
意味不明な言葉をささやいた。お互いのほっぺたがくっつきそうな距離で私はにらみつけた。
とりあえず立村くんが席に着くのを待つことにした。
教室の扉は開いたまま。立村くんの姿が垣間見えていた。

立村くんは班ノートを四冊小脇に抱えて戻ってきた。社会科プリントではなかった。教室の扉をゆっくり閉め、班ノートをそれぞれの班に配った。手元に残っ た一冊を立村くん本人の机に置いた。なんで班ノートだとわかったかというと、三日前、私が描いたイラストが見えていたからだった。二本足で突っ立ってい て、耳に大きなリボンをつけた猫の絵を、いろんな色のマジックペンで色つけしたのだ。可愛い感じの絵が私は大好き、自信作だった。絵に隠れて、「一年Ｄ組　三班　班名：エグザンブル」と、習字のお手本みたいな文字が横書きに書かれていた。立村くんの文字だった。班名は英語の得意な立村くんが、「受けの良さ そうなものにすれば」と提

案したものだった。私たちの班には、そんなことにこだわる人なんていなかった。
「立村くん、社会の先生のとこに行ってきたの？」
　ノートをはじき、つまみ上げ立村くんはかすかに頷いた。小さな声で、
「特別、自習用に用意されたものはないらしいんだ。先生たちも困っていたみたいでさ。評議委員同士で相談して好きなことやれってさ」
「ふうん、じゃあ、何やってもいいよね？」
「何もしなくてもいいんだろうな、あの調子だと」
　教科書を申し訳程度に机の上に並べ、立村くんは貴史に「だろ？」と言いたげな視線を投げた。私に確認すればいいのに。
「もちろん、そっちに賛成。な、美里もそういうところだろ」
「うん、やることないんだもん、しょうがないよね」
　立村くんは私に、一応って感じで合図した後、すぐに黒板に向かい、
「社会自習。自分たちで好きなことを自習すること」
　とだけ書いた。一気にクラスの歓声がいっぱいにあふれた。みんなそれを期待してたんだよね。こういう奴らのどこが「優等生」だっていうんだろう？　ほ ら、だあれも自分らで勉強しようなんてまじめな人なんていやしないんだから。みんな、大喜びで自分の仲いい友だちの席に集まっておしゃべりしているじゃな い。男子も女子も、こういうのって公立中学も私立中学も関係ないに決まってる。青大附中が優等生集団の学校だなんて、大嘘だ。
　――附中って、ガリ勉ばかりでつまんないでしょ。制服は確かにかっこいいよ。ブレザーだもんね。でも灰色の青春だって噂をいとこの兄ちゃんから聞いたよ。ものすごく難しい宿題が毎日出るんでしょ。遊ぶ暇ないんでしょ。美里には合わないよ。そんな学校は。
　よく小学校時代の友だちにもそう言われた。周囲の大人にも「美里ちゃん、優秀よねえ」なんて勘違いしたお世辞言われて､背中が痒くなってしまったことも いっぱいある。第一、小学校時代、大嫌いな担任を叩きのめすために、貴史と一緒に走り回り蹴りをいれまくっていた私のどこが「優等生」だっていうんだろ う？
　私だって、受験の時は国語すっごくいい成績取ったから自信持って言ってしまおう。
　「優等生」とは清く正しく、先生の言うことを素直に聞いて、いつもさわやかにっこりしている連中」という意味だって私は解釈している。
　そんな奴、どこにいるの？
　悪いけどそんな奴らとはさっさとさよならしたい。
　ぶりっこしたり先生のめんこになって嘘ばっかり告げ口するような奴らとご機嫌取りしあうくらいなら、ひとりで学校さぼっていたほうがずっといいもん。
　けど、青大附中に清く正しい「優等生」なんていやしなかった。
　もちろん、成績はいい人ばっかりかもしれない。だけどみんなそれぞれ、自習時間の時は仲良したちとおしゃべりするし、勉強する時は先生の眼盗んでお手紙 書くし、授業の時は先生の脱線話に盛り上がる。テスト勉強、授業、休み時間中、どんなささいなことだって、わくわくすることを発見し、どきどきするのがう まい連中の巣だった。

だから私だってこの学校に毎日、気ままに通っていられるのだ。
くだらないこと言いながら盛り上がっていられる貴史もいるし、他にも仲のいい友だちだってたくさんいるし、それに。
――立村くんだって、いるんだから。
私は立村くんが自分の席に戻ってくるのを待ちながら、この前の放課後、評議委員の女子同士で男子品定めをした時の結論を思い出していた。
一年Ｄ組男子の中で一番人気があるのが、後ろの席に座っているあの羽飛貴史だなんてなんかの間違いとしか思えない。もちろん中学に入ってから、貴史と私が幼なじみだという話をしたとたん、知り合う女子たちから争うように、
「すっごくいかしてるよねえ、羽飛って。ねえ、美里、付き合ってるの？　やっぱり？」
毎度毎度の勘違いを訂正してばかりいたし、なんとなく青大附中では人気のあるタイプかもな、とは感じていた。だけどそろそろメッキがはがれる二学期以降も、貴史人気が全く落ちないというのは解せなかった。貴史本人にも聞いちゃったくらいだ。
「あんた、自分がかっこいいと思ったこと、ある？」
「あたりまえだろうが！　やっぱしなあ、俺の魅力を青大附中の女子たちは見逃さなかったってわけかあ、すごいだろ、なあ美里、ちなみにどこらへんにみんな惚れてくれてるのかなあ。その辺もリサーチしろよ」
当然私は、貴史の後頭部に一発平手を食らわせて話を終わらせた。それが二日前のこと。
十年近くも一緒に遊び、つるんでいる相手のこと、もちろんいい奴だとは思うよ。面と向かってそんなこと言わないけど、お互い様よね。
――でも、いいけどね。
私はそっと立村くんの姿を目で追った。
青大附中の制服が、とにかくよく似合っているのだ。遠目で見ると濃茶のブレザー制服なんだけど、よく見ると大きめのチェック模様がすっきりと織り込まれ ている。男子も女子も同じなんだけど、女子が襟元ふんわりと細いリボンを結ぶのに対して、男子は厚みのある共布のネクタイで決めることになっている。大抵 の男子は襟元をぐしゅぐしゅにして、なんか勘違いしたようなきざっぽさを出そうとするんだけど、立村くんだけは違う。いかにも糊付けぴしっとしました、っ て感じのシャツに衿のネクタイを崩さないように結んでいる。
いっつも貴史みたいな、「一歩間違うと不良」っぽい格好に目が慣れているせいか、立村くんの姿を見つめるたび、「あ、もしかしたらここが青大附中のイ メージなのかも」と感じてしまう瞬間がある。立村くんと話をしている時だけ、ここが「優等生」の集まるちょっと気取った学校なのかなと感じてしまい、なん かしゃべるのが早口になってしまう。立村くんはただ、きちんと制服を着こなしているだけなのにね。
――どうして誰も立村くんチェックしないんだろう。話に出るかもって思ってたのに、みんな女子たち、貴史と南雲くんのことばっかり話してて、変！
貴史なんかネクタイなんてまともに締めていないもんね。今日はちょっと寒いのに、あいつ、ワイシャツのボタン二つ開けたまま歩いているんだよ。信じられない、センスないよね。　――

立村くんは貴史よかずっといいもんね、顔も性格も、悪くないと思うんだ。

　立村くんはそっと教科書をどかして、班ノートをめくった。昨日立村くんが書く番だった。一足お先に私は貴史からノートをまわしてもらい、読んでいた。順 番としては立村くんの次に貴史が担当なのだけど、やっぱり立村くんの文章は先に読んでみたいんだもの、しょうがない。
　班ノートはいつもだったら、担任の菱本先生が給食後の昼休みに返してくれるはずだった。今はまだ二時間目。ずいぶん早い。
　私はちらりとのぞき込み、疑問を投げかけてみた。
「先生、なにかコメント、書いてある？」
　立村くんは顔を上げて、違うといいたげな表情を見せた。
「もう一度、俺に書いてこいって」
　貴史も一緒にのぞき込み、ほうと目を見開いた。
「昨日の内容がお気に召さなかったらしい」
　四角張った言い方で、立村くんは呟くと、私にノートを開いたままよこした。あれ、順番、次は貴史じゃなかったのかな。いいのかな、受け取って。思うより先に両手で受け取ってしまい、また貴史ににやにやと言われてしまった。
「立村って、美里には妙に親切だよな」
「そんなことないよ」
「あるわけないじゃない！」
　本当に「そんなことない」って顔で返事した立村くん。
　少しくらい「それが悪いか」みたいに言ってくれたっていいのにな。そんなことより貴史よ、頭に来るのは。
　――うるさいわね。やっぱり二人っきりの時にけりを入れなくちゃだめね。
　放課後の帰り道、しっかり痛い目に遭わせてやらなくっちゃ。取り返される前に私は急いで班ノートのページを開いた。

十月二十日　晴れ　立村　上総

　今日の抜き打ちテストは難しかった。
　涙が出るほど快感だった。因数分解を解くのも楽しかった。二次方程式も感動的だった。三平方の定理にいたっては、頭から火が出るほどうれしかった。
　清坂さんは満点だったらしい。羽飛くんはカンニングしないで九十点を取っていたし、古川さんも杉浦さんも八十点を取っていた。第一この僕でさえ、七十を キープすることができたのだから、奇跡だ……という夢を見た。予知夢だと思っていた僕がおろかだった。一度でいいからこれが現実になってくれたらと、つく づく思う。
　世の中はままならないものだ。

「そんなに問題あること書いてないじゃない」
「つまり、俺がいつも書いている内容だと、あの人には物足りないらしいんだ」
　立村くんは私から視線を逸らしたまま答えた。隣の貴史も首をひねりながら、
「何が物足りないんだよ」
　私の手からノートをひったくり、同じ箇所に目を通した。「ふーん」と鼻を鳴らし、
「立村にしてはおもしろくねえじゃねえか、なあ」
　私に相槌求めて、ノートを閉じ、立村くんに向かって投げて返した。

「立村、お前さ、いつも思うんだけどな、どうしていつも数学の答案、名前だけで出すんだ？」
　立村くんは困った顔していたけど、それなりに言い訳はしていた。
「試験中、覚えていた公式とか計算の約束事とか、みんな忘れてしまうんだ」
「掛け算九九もかよ？」
　実際班ノートに記されていた通り、立村くんが昨日の数学抜き打ちテストで、相当悲惨な点数を取っていたもの。いつも数学の先生は、採点済みのテストを返却する際、立村くんにだけ言い添えるのを、私はいっつも聞いている。
「立村、たのむからいいかげん九九を間違えるようなことはしないでくれ。英語の勉強に使っている脳みそをだな、ほんの少しでいいから数学に回してくれよな」
　そんなにため息たっぷりに言わなくたっていいじゃない。
　立村くんだって青大附中に合格するくらいなんだもの、私や貴史と同等のの計算能力は持っているはずなのに。だけど実際、私は立村くんが数学の授業中に問題をひとりで解いたのを、今の今まで見たことがない。
「そのくせあんな分厚い英語の本、辞書もひかねえでよく読めるよなあ。そうだそうだ、立村、物は相談なんだがな」
　貴史がその後立村くんに持ちかけた提案に、私は思わず拍手喝采したくなった。
「お前が数学全然アウトなのはよっくわかった。これから数学の宿題で出た問題の答えを、俺と美里が一緒に解いてお前に渡す。そいで、代わりに立村、お前は英語リーダーの訳を毎回出す。それでお互い取引とんとんってとこだけどな、どうだ、名案だろ？」
「いや、それなら今すぐ教科書の訳、すべて渡すよ。もう五月の段階で、全部訳できてるし」
　話の流れでなぜか、私と貴史は今年一年分の英語リーダー訳をもらえることになってしまった。「あんちょこ」がないわけじゃないんだけど、でも嬉しい。立村くんの手書きコピーがもらえるなんて、なんてラッキーなんだろう！

　けど、なんで菱本先生、立村くんをいきなり呼びつけたんだろう。
　私にはやっぱりぴんとこなかった。
　立村くんが自分の思ったことをまじめに書く人じゃない。同じ学年で起こった出来事について一言物申すことはまずない。たとえば一学期に一年Ａ組で起きた という女子更衣室内の下着盗難

事件についてだけど、かなり大きな騒ぎになったことだったし、みなシャーロック・ホームズか明智小五郎にでもなったような気 分で思いっきり語っていた。中には班ノートにそのあたりのことを書いた人もいるらしい。でも立村くんはそういう話に入ってこなかった。単純に関心がなかっ ただけだと私は思うんだけど。
「つもり積もった怒りってものだろうな。菱本さんが言うことには」
　立村くんは指先でつんつんと班ノート表紙の猫をつついた、
「俺が本当に書くべきことは、こんなふざけたことではないんだってさ。心の底から叫びたいことあるだろうとかさ、なぜ本当のことを語ろうとしないんだ、とかさ」
　地図帳を取り出し、投げやりに立村くんは呟いた。
「父子家庭の子どもは思い悩まなくてはならないものだと、あの人は信じているらしいね」
　露骨に菱本先生のことを「あの人」と呼ぶ立村くん。
「おい、そんなこと言われたのかよ、もろに」
「暗示してたな」
　立村くんの家はお父さんと二人暮しなんだと、入学式直後に聞いたことがある。なんだかそれって、立村くんのお坊ちゃま然とした雰囲気と重ならなくてもっ と詳しく聞こうと思ったんだけど、貴史にどやされてそれ以上話題にすることがなかった。そのうち、そんなことなんてあっという間に忘れてしまった。明るい ことで話したいことは一杯あったんだから。
　ああ、なんか重たい話題になっちゃったな。こういうの苦手。一抜けた。
　私は右隣に座っている古川こずえに話しかけた。

　けどどうして女子同士の話って、同じものになっちゃうんだろう。
　小学校の頃はこんなに男子のことで盛り上がるなんてこと、ほとんどなかったのにね。
　ま、こずえだからしょうがないか。
「そうだ、前から思ってたんだけどさ。美里って面食いだよね」
「なんでいきなりそんな話になるのよ」
「今まで聞いた話からして、そう判断したんだけどね、ね、加奈子ちゃん？」
　こずえはくせのないショートの髪を指先でくいくいひっぱりながら、私の反対隣にいる加奈子ちゃんへ声をかけた。黙って頷いているだけだった。
　こずえと加奈子ちゃん、そして私。二学期の間は、この三人が同じ班となる。
　別に加奈子ちゃんに話を聞きたいわけじゃないんで、私はすぐに言い返した。
「露骨なスポーツばかは好きじゃないけどね。どちらかいうと文武両道タイプかなあ」
「難しい言葉使っちゃってさ。ふうん、でもさ、なんか美里、かっこいい男子がいっぱいいるのに、どうしてそういうパターンの男子ばっかし選ぶのかなあ」
「そういうパターンって何よ」
「今どきはやらない病弱な王子様タイプにあこがれてるんだもんねえ。絶対それって、趣味じゃないよ、美里に合ってないって！」
　人の好みをとやかく言われたくない。こずえにずっと前、「美里って小学校の頃から彼氏いた

？　で、どこまで行った？　まさか羽飛なんてことないよねえ」 とか変なことを聞かれて、適当に答えたら勝手にいろいろ想像しているらしい。私が答えたことってたいしたことじゃないのにな。貴史とは単なる幼稚園からの 腐れ縁だってことと、私が好きになったことのある男子はみな貴史と正反対の頭いいお坊ちゃまタイプだってことくらい。そして当然、彼氏なんていなかったっ てことも。あたりまえじゃない。小学生だったんだから！
「そっか、でもそう考えると、美里、このクラスには本命なんていないよねえ」
「まだ選んでいる最中！　どうだっていいでしょそんなの！」
　まずい、つい口滑らせてしまいそうになっちゃった。こずえはこういうところ鋭い。見逃さない。さらにぐりぐりやられた。背骨をぎゅうぎゅう親指で押してきた。「感じる？　感じる？」とか言いながら、
「ははん、もしかして、いるんだ、Ｄ組に」
　こんなところで変なこと言ったら大変だ。後ろの男子席には貴史も立村くんもいるのだ。もし貴史に聞かれたりしたら「おい、お前、惚れてる奴、いるのか よ」とかにやにやしながらまた突っ込まれるんだ。話の流れによっては教室で思いっきり平手打ち二発かましちゃうかもしれない。そんなとこ、立村くんに見ら れたくない。かっとなったら何しでかすかわからない自分の性格は、よっく理解しているつもりだった。
　まずは話を逸らすことにした。こずえだって男子に関するアキレス腱、ちゃんとあるんだもの。肘でつんつんつっついて、耳にささやいた。
「それより、こずえの方はどうなのよ」
「やあだ、知っているくせに、ねえ」
　シャープの先をくるくる回しながら、こずえは貴史の机を指し示した。大きなどんぐり眼をくりくりさせて。男子たちに勘付かれないように、声はちっちゃ かった。やっぱりこずえもそういうとこが、女子なんだ。合わせて気遣いするしかなくって、私もこずえだけに目配せしてささやいた。
「どうでもいいけど、あんな奴のどこがいいのよ。人の趣味をとやかく言う権利、こずえにはないと思うよ」
「羽飛かっこいいしさ、それ以上に面白いじゃん。ほら、やっぱし初めての彼氏を選ぶとしたら、顔よりも性格最優先しなくちゃねえ」
「あいつが、性格で選ばれる奴なわけ？」
「でもね、無理だってこと、わかっている」
「あれ、いやに弱気のこずえじゃない」
「だってね、あいつの本命が誰かってわかるもんね」
「まさかと思うけど、私と勘違いしてない？」
　よく誤解されることだった。幼なじみの宿命だった。
「わかってるよねえ、恋のライバルが大親友だなんてねえ、私も悲劇のヒロインよね」
　どう見ても喜劇、って顔でこずえはあっけらかんと答えた。くいっと制服の両胸に手を当てて、きゅっきゅともむしぐさをした。やだな、男子がいるのに。

「うーん、けどさ、ここだったら美里になら勝てるかなあ。よっし、今度なんとかしてバストアップ運動、しなくっちゃ。やっぱし男子って、ボインの女子が好きみたいだって、うちの母さん話してたしね」
　なんかわかんないけど、むかっときた。襟元のリボンを直す振りして、私は手首で胸元に触れた。平べったいわよ、どうせ。どうだっていいじゃない！
　理由を問いつめたいけれど、やめておいた。
　そばで加奈子ちゃんは無言のまま私たちを見つめていた。

　私が入学式直後、一番仰天した言葉。
　――すっごくいかしてるよねえ、羽飛って。ねえ、美里、付き合ってるの？　やっぱり？
　第一声で発してくれたのがこずえだった。私の見たところ、どうやら一目ぼれしちゃったようだった。あいつが全然こずえの名前と顔を一致できない頃から、「ねえねえ、羽飛って小学校の頃、経験したあ？」とか大きな声で話し掛けたのを聞いた時は、さすがに私もこずえから距離を置こうかと思った。貴史もそうと うびびったらしい。あとで私に、
「あの、美里の前に並んでいる女子、あいつ、すげえ怖えな。あいつから俺逃げるからな」
　退避宣言されてしまったじゃないの。ま、貴史も一学期が終わるころにはこずえがなに言ってもねちっこくしない子なんだってわかって、今では他の女子たちよりも話をする回数が多くなったけどね。私の協力もあるんだよ、感謝しなさいよ。

　左隣で加奈子ちゃんは笑っていた。いつもふんふんと話を聞いている子だった。特定のグループに入っているわけでないし、こずえと違って私のことを「清坂さん」と苗字で呼ぶ。「仲良し」と言うにはちょっと距離があった。
　いやな子ではないのだ。同じ班のよしみで、おしゃれな髪ゴムの話とか、ファンシーショップで最近出たばかりのキャラクターグッズとか、そういう情報交換 はしょっちゅうしている。両サイドを編みこみしている髪形は、長かった頃に私がしていたのと同じものだった。悔しいけど、加奈子ちゃんの方がずっとよく似 合う。ほわほわっとした赤ちゃんみたいな顔しているからかもしれない。ショートにしてよかった。
　いや、そんな髪形のことが気になるからじゃない。もともと加奈子ちゃんって子は、クラス女子どのグループにもなじめる感じの子だったのだ。私がどちらか いうと、やっぱり貴史中心とする男子グループとおしゃべりすることが多くて女子の仲良しはこずえが一番、って感じなのに対して、他の女子たちはやはり女子 同士でつるんでいることが多いのだ。たぶん、クラスの女子で一番男子と話しているのは、私だと思う。これは小学校の頃から変わらない傾向だから、そんなに 変なことじゃないと思うんだけど、いつの時代もやっぱり「清坂さんって変」と言う子がいるらしい。結局、色合い的に男子寄りの女子グループと遊ぶことが多 くなるというわけ。加奈子ちゃんはタイプからして、決して男子中心のおしゃべりグループには属していなかった。それでいて私やこずえの話を黙って聞いてい る。
　これはかなり、女子同士の関係としては、危険なことだった。

私も永年、女子同士のバトルで経験しているからよくわかる。
――加奈子ちゃんには聞かれないようにしなくっちゃ。
念には念を入れておかなくちゃ。私だって、もう小学校の時みたいに、無駄な女子同士の小競り合いなんて、したくないわよ。立村くんに私のこと、「暴力女子」だなんて思われたら大変だもん。

　無理やり話を締めくくり、私は手元にあった青い地図帳をかざしこずえを誘った。
「『都市探し』やろうよ！　地図帳あるし」
「私、地図帳忘れてきたんだ。美里、貸して」
「じゃあ、交代で使おうよ。順番決めのじゃんけんしよ」
　自習時間最大の楽しみは、教科書や文房具をフルに生かした遊びで盛り上がること。その中でも「都市探し」と呼ばれるゲームは、地理の授業がある日限定のお楽しみだった。
　じゃんけんでまず、問題を出す人を決める。
　「ローマ」「ニューヨーク」「ロンドン」といった風に、出題者は世界地図の中から都市名を告げ、他のメンバーに探すよう指示する。地図帳の後ろにある 「都市名索引」と勘を頼りにその場所を探り当て、一番最初に「見つけた！」と叫んだ人が勝利者となる。次は勝利者が指名者となる。
　手元に地図帳がないと話にならない。ちなみに歴史の授業の時は、年表を開いて歴史上の出来事を挙げて同じように探すゲームをやる。
　こういうゲームは少人数だと物足りない。いつもは班のメンバー同士、男女仲良く盛り上がる。もちろん今日だってそうしたいところだった。
　立村くんと貴史のふたりだけ、まだ真剣に話をしている。もうひとりの男子班員は別の席にいっちゃった。まあいっか。「地図探し」やるならこのふたりも入 れなくっちゃ。私は肩越しに振り返った全く私たちの会話に興味がないって顔をして、ふたりは歴史のノートにそれぞれ何かを書き込んでいた。
　私は立村くんの机に近づいて、覗き込んだ。
「何やっているの？」
「班ノートのねたを探してるんだ」
　立村くんは視線を合わせず答えた。
　地理用のノートに、単語がいろいろ並んでいる。
　――「家庭」「悲劇」「さみしさ」「涙」「感動」「先生好み」「本音」「建前」「裏」
「キーワードで何か連想しようとしてるのね」
　私はできるだけおとなっぽく聞こえるように言ってみた。
　班ノートかあ。立村くん、そうとう菱本先生に呼ばれたこと、頭にきてるのね。
　菱本先生は私からしたら、すっごくいい先生だと思う。とにかく学校行事命・一Ｄ命・生徒命、もちろん青大附中命。独身、彼女有。とにかく熱く叫ぶのが好きな青春熱血教師だ。　貴史曰く、
「菱本さんひとりいりゃあ、学校行事の応援団、いらねえわな」
　誰かが落ち込んでいたりすると、ホームルームの時にいきなり指名して、
「よお、お前、どうした。元気ねえなあ。ほら、じゃあ俺のパワーで元気だせ！」

とか意味不明の激励と背中に一発ばしっと手型をつけそうな気合の入れ方。
二十八歳と十三歳というジェネレーションギャップはかなりあるし、たまに一昔前のギャグを飛ばして周りの空気を白くすることもある。もちろん、貴史やこずえが、
「先生、あまり白いギャグ飛ばしてると彼女に振られるぞ」
みたいなことを言って、和ませたりするけど。
ただその反面、落ち込み最高の時に菱本先生の気合付けをされると、正直鬱陶しくなってしまうこともあるわけで、
――勝手にしてよ。
そう言いたくなる立村くんの気持ちも、わかる。
たとえばこの班ノート。
班ノートなんか作って、何の役に立つんだろうね。誰だって、先生に読まれていいことしか書かないよ。私だってそう。それこそぞっとするくらい、優等生っ ぽい文章でもってクラス批判なんてしちゃっている。私のくせでなにかあると、ついエキサイトしたこと書いちゃう。すぐにこずえあたりから「いいかげんにし なよ」ってたしなめられ、初めて自分の書いたことのうそ臭さに気付いてしまう。一学期につい、
「評議委員だからといって、なんでも私に押しつけるのはやめてほしい。先生にいいたいことがあるんだったら、自分で聞きに言ってほしい。職員室に行くのがいやなのはわかるけど」
なんて、白々しいこと書いたもんよね。一Ｄ評議委員としてのりっぱなお言葉。ばかみたい。心なんてちっともこもってない、文章の羅列。うんざりだ。
本当のことなんて、みんなの眼に触れるところに書くわけない。
みんなの目に触れるところでこんなこと書くなんて、私には絶対できない。

十月十七日　杉浦　加奈子

私は小学校の時に、いろんな人から「なに考えているかわからない」と言われていました。きっと、今でもそう思っている人がたくさんいると思います。で も、変なことはちっとも考えていません。ここの班に入って、清坂さんや古川さんと友だちになれて本当によかったです。附属に入るために、勉強が大変で辛 かったけど、仲良くできる友だちと出会えて、とってもうれしくなりました。みなさん、これからも私と友だちでいてください。お願いします。

菱本先生の一言が直後に続いている。赤いボールペンで、強い筆圧だった。ページの裏に跡が残っていた。
『杉浦さんは、やさしい人ですね。きっと小学校の人たちはそこのところを理解できなかったのでしょう。でも、このクラスの人たちはそんなことありません。どんどん友だちを増やしていってほしいと思います。何か辛いことがあったら、どんどん先生に話してください』
うそ臭いこと書いちゃって。ほんとにそんなこと思ってるの、加奈子ちゃん。
菱本先生の受けをよくしたいだけなんじゃないの？

　先生に話したいことって、こんなきれいごとばっかりじゃないよね！
　私の正直な感想だった。

　あとの連中はその辺了解済みで、ほとんど冗談を絡めて書くようにしていた。たとえば前の晩に見たテレビアニメの感想文とか、我が家のペットの話とか、文 章書くのが面倒な人は一ページをイラストで埋めたりとか、そんな感じだった。別に本音を隠しているわけではなくて、無理にしゃべる必要がないだけだった。 だって、お姉ちゃんと取っ組み合いの大喧嘩したとかその時髪の毛一束ひっこぬいたとかそんな話、面白くないもの、したくないでしょうに。で、うっかり筆を 滑らせてしまうと、熱血教師菱本節が炸裂する。たとえば今の立村くんみたいに。
　――『さあ、先生に話してごらん』だもん、疲れるよね。。
　そんな鬱陶しい班ノート、廃止すればいいのにという声がないわけではないし、たまにロングホームルームでそんな意見が出ることもある。けど、メリットが 全くないってわけじゃない。たとえば自分が書く番の夜、他の班員たちの筆跡をじーっと眺めることとか。たとえば立村くんの綴る文字が、どうして習字のお手 本みたいに上手なんだろうって考えることも、一人でこっそり読み上げてみたりすることも。やっぱり、紙に残っている文章だから、できることもある。
　最近は立村くんはレポート用紙の切れ端に書き込んで渡してくれるようになった。
　もちろん捨てないで保管しておいて大丈夫。
　私だけの、立村くんの言葉が机の引出しいっぱいに膨らんでいる。これって進歩だ。

「まずだな、最初に立村の悲劇的家庭状況を書く。少しオーバーにだな、シリアスにやってくれ。その後で、クラスの状況についてどまじめに論じる」
「論じるテーマは何にする？」
「このクラスに問題があるってことにしようぜ。たとえば、例の数学抜き打ちテストが、全クラスで最低平均点だったとかさ」
「すべて責任が俺にあると言いたいんだろ。羽飛」
「ちょっと墓穴掘っているよな」
　しばらく男子を無視して私たち女子チームは『都市探し』に熱中したふりをしていた。もちろん二人の会話には聞き耳を立てたままで。さっきこずえが出題者に回ったのだけど、まだ見つけられずじまい、ずっと索引と地図の四角い区切り線を指でなぞりつづけている私に、
「ちょっとストップ、休憩しようよ」
　こずえが飽き飽きしたという顔で地図帳を閉じた。
「美里、ずっと上の空なんだもん。乗ってこないしさあ、集中力足りないよ、ったくもう」
「別にそんなつもりじゃないんだけどな」
　十五分くらい過ぎている。ひとまず切り上げるにはほどよい頃合いだった。なんでもないって顔して後ろの席を振り返ると、いきなり貴史と目が合った。あんたなんかと視線交わして何が面白いって言うのよ。貴史もタイミングが悪かったんだろう。
「ちぇっ」

　と舌打ちし、立村くんと話すのをいったん休止した。
　立村くんも同じように黙ってノートに向かった。
「なによ、こそこそやって」
「うるせえな」
「見ちゃまずいことしているわけ」
「女には関係ねえよ」
　ノートの余白に書かれた漢字の群れはぐっと増えていて、ノート半分くらい埋まっていた。立村くんのノートには文章としてまとめたものも見開きいっぱいに連なっていた。
　いくらなんでも男子ふたり、先生の眼が届かない場所において、まじめに自習をやるような玉じゃないと重々承知している。
　私は立村くんをきゅうっと見つめてみた。
　うっかりしたら見破られそうになりそうで、怖い。たいていは不思議そうに見返されるだけだったけども。
　立村くんはちょっとだけ目をそらした。すぐに戻して、口元を微かにほころばせた。
「別に清坂氏になら知られても困ることじゃないしさ」
「そう。じゃあさ、今日の評議委員会、立村くん出るでしょ。その時に教えてちょうだい」
「覚えていたら」
　貴史は私と立村くんとのやりとりを怪訝そうに眺めて、またまた余計な一言を放った。。
「まったく、立村は抜け目ねえ奴」
　ちろっと私の方をにらんで、自分のノートをぱたりと閉じた。
　こずえのような物好きでもなければ、貴史なんて拾ってもらえないんだからね。
　少しは立村くんの紳士的な態度を見習いな。
　私は心の中で貴史にあかんべえをしてやった。やっぱり今日の放課後は一発、蹴り、だわね。

　中学入学式で、貴史と立村くんは、私よりも一時間だけ出会うのが早かった。
　「は」行の貴史と「ら」行の立村くんと、ちょうど席が前後していた。すぐに周りの男子と溶け込めるタイプの貴史だもの、真後ろに座っている立村くんに 「よう、お前、どこの小学校から来たんだ？」って声を掛けないわけがなかった。立村くんも貴史の挨拶を露骨に無視するような真似はしなかった。
　式典が一段楽して、せっかくなんだからってことで貴史は大学の学生食堂に立村くんを誘い、さっそく友情を語らうつもりだったらしい。私もその日はどっちにせよ貴史と何か食べて帰るつもりでいたので混ぜてもらうことにした。あとから貴史に、
「お前なあ、いくらなんでもなあ、入学早々、男子二人と食事をしていくっつうのは、他の女子からしたらぶっとぶぞ。まあ、最初からそれが普通だって言っときゃあ、面倒でねえかもな」
なんてあきれていたっけ。確かに次の日以降、一部の女子たちが向ける視線にちょっとため息をつくはめになった私だけど、すぐにこずえと仲良くなったからそ んなに鬱陶しい思いはしなかった。私と貴史が、喧嘩友だちとも親友とも言い難い関係だってことを、こずえたちには早い段

階で説明できたからよかったのかも しれない。そういえば、入学式当日も私、立村くんにも歯切れ悪く言い訳したな。あの時、立村くんどう思っていたんだろう。初対面から帰る時まで、穏やかな 表情で話を聞いてくれていたような気がする。口数自体は少なかった。私と貴史との毒舌独壇場だったから、当然だ。

自分がいつも通り振る舞えるような場所をこしらえたかっただけだった。

たとえ青大附属が「エリートの巣窟」と思われていようとも、私は私、清坂美里。言いたいことは言うし納得いかなかったら蹴りを入れる、そんな私でいた かった。優等生気取りなんてしたくない。仲良しになりたい奴には、男子女子関係なくおしゃべりしたかっただけだった。その後一部の女子たちから「清坂さ んって、なんか、男子たちといちゃいちゃしてない？」なんてささやく陰口にも最初から引く気なんてない。そんなに私が目立つんだったら、あんたたちも好き な男子たちにどんどん話し掛けなさいよ。みんな、楽しくしゃべってくれる相手には、男子女子関係なくにっこりしたいって思っているんだよ。

立村くんはクラスの女子から全く男子として評価されていなかった。

これは本当にびっくりした。

背丈だろうか、顔だろうか、それとも性格だろうか？

どうしても私にはそう思えなかった。そりゃあ女子は、背の高い男子をかっこよく感じる傾向があると思うけど、それいうならクラス人気ナンバーワンの貴史 はどうなるんだろう。悪いけど貴史は、立村くんよりも前にいつも並んでいるんだけどな。二学期の段階で言うなら、立村くん、背の順番で並んだ時はいつも貴 史のすぐ後ろに付けていた。真ん中よりちょっと後ろ寄りだった。貴史が怒っていたっけ。

「なんで立村より俺の背が低いんだ！」

って。男子って背の高さ、異常なほど気にするんだもん、ばっかみたい。

顔もどうなんだろう？　ま、うちのクラス、男子って芸能人ばりにメリハリくっきりしたタイプのお顔持ち主が多いし、どうしても立村くんが地味に見えるのはあるかもしれない。

瞼が一重のようで二重に見える。唇も薄く桜色。にきびなんてひとつもない。

それに普段のしぐさだって、下手したら女子よりも礼儀正しいかもしれないっていつも思っていた。きちんと背筋を伸ばして、上手に箸を使い、口の中のもの を見せないで食べる仕草が、見ていて気持ちよい。私は下品にものを食べる人がどうも好きになれない。別に貴史のように犬食いするからって言って嫌いになる わけじゃないけど、やはり立村くんと並ぶと見劣りしてしまうとこは、絶対あると思う。どうしても立村くんが、他の男子たちよりも「王子さま」に見えてしま うのは、私の目の錯覚じゃないって、すっごく思う。

私は一度も立村くんのよさを他の女子たちに訴えたことなんてない。

だって変な誤解されて、噂が立ったらまた面倒じゃないの。

だけど、入学式以降ずっと続いている立村くんの低評価を聞かされるのに、私は少しうんざりしていた。皆口をそろえてそういうんだもの、そりゃ私は貴史を 通じて、他の女子たちよりも少し立村くんと話す機会が多い。だからいいところが目についてしまうのかもしれない。だけど、

「顔はお坊ちゃまだけどねえ、立村くんは。けどさ、陰気だよね、女子にもあまり話し掛けないし。人の顔色見て話しているみたいでつまんなさそう」
　これはないんじゃないのって言いたい。あんたたち、立村くんを判断することできるくらい話したんだろうか。クラス女子たちが出した、二学期以降立村くんに下された評価に、私は心の中で真っ黒くバッテンを付けていた。

　もっとも我が親友・古川こずえは別の切り口から、立村くんを観察していた。
「立村？　ああ、あいつはね、まだガキなのよ。うちの弟と同じ」
　たぶん私よりも直接立村くんに話し掛けているのは、こずえだと思う。
　本人曰く、「まず馬を射よ、ってとこよ」。
　つまり、貴史を射落とすきっかけとして立村くんに声を掛けたらしい。そして私とは全く違う視点から立村くんの「よさ」を見つけたらしく毎日、
「立村、それにしてもあんた、欲求不満溜まった顔してるんじゃないの、ったく少しはスケベ話でもして男子としての持久力付けなさいって！」
　って声を掛けている。
　この前は黙って項垂れている立村くんに、とうとうとお説教までする始末だった。
「あんたさ、女子に対しておびえているでしょが。羽飛を少しは見習いなよ。あいつだったら教科書忘れたときとかさ、しょうもないギャグを思いついた時とか さ、気軽に話し掛けるじゃないのさ。立村はいっつも、他の奴が声掛けるまで黙って待ってるだけじゃないの。この前だってそうだよ、あんたに先週英語の訳を 写させてもらうつもりで、ノート借りたことあったじゃん。勝手に持ってったのは悪かったと思うよ。けど机に置いていたし、毎週貸してもらってたから事後承 諾でＯＫかなって思ってやったことじゃん。美里にだってそうさせてるしさ。まあ一言言えばよかったよ。でもなんで、私にノート返せって言わないで、羽飛に ノート、貸してもらおうとするわけ？　知らなかったわけじゃないでしょうにねえ。。一声、かけてくれればいいのに。ごめんねと会ってあやまるのに。私が怖 かったわけ？　羽飛が気付いて、私からノート奪い返しにくるまでじいっと他力本願してるのって、悪いけど女子からしたら、恋愛対象には絶対ならないんだ よ、よっく覚えておきな。ほんと立村、あんた見てるとさ、うちの弟思い出してさ」

　これをこずえの側で聞いていた時、かあっと顔が熱くなった。だって、こずえの言うことをそのままうのみにしていいんだったら、立村くん。
　――私以外の女子には人見知りしているってこと？　私だけ？
　もちろん、私の思い込みかもしれない。単純に私が貴史の幼なじみだから、男子同士の付き合いもあって心を許してくれているのかもしれない。くやしいけど 認める。それに貴史ときたら、入学式当日から今日にいたるまでずうっと、私がやらかしてきた事件の数々を立村くんに吹き込んでいるらしいのだ。もちろん私 のしたことには貴史もからんでいて、小学校時代はほんと爪あとを残す戦いを先生およびむかつく同級生や先輩たち相手にやらかしてきた。嘘じゃないから、しゃべるのを止めることはできなかった。だけどほんとに悔しい。貴史と冗談でやりあっている

ことを立村くんにもするかもしれないなんて、勘違いされたらど うしよう。けど、こずえの言うことによれば、貴史の言葉になんて特段影響されることなく立村くんは私を「話しかけられる数少ない女子のひとり」として選ん でくれたということになる。

　貴史に頭を下げるのは少し悔しい。けど、立村くんとコンビを組む形で評議委員になるきっかけをこしらえてくれたのは、感謝しなくちゃって思っている。
　貴史の場合決して優等生ではないんだけど、クラスのお祭り騒ぎを守り立てたりするのは得意な奴だった。いやな担任がいない限り、いつも私と一緒に貴史が リーダーとなって動いていた。これが六年間続いていたし、たぶんあいつが立候補してくれるだろうと思っていた。あいつが評議委員になるんだったら、私が一 緒にやるのも面白いかなあなんて考えていたから、知らない子が私を推薦した時あっさり「わかりました、私やります」って答えたのだ。たぶん私が入学式から 妙に目立ってしまったから、勝手に目をつけられてしまっただけなのかもしれない。
　ところがびっくり、男子がみなもそもそしていて誰も立候補しようとしないじゃないの。
　貴史の顔を見たら、あいつまたにやにやして見返すし、いったい何考えてるんだろうって思ったら、いきなり、
「あの一、俺の個人的意見で、立村くんを評議委員に推薦しまっす！　俺が推薦するんだから、間違いないって」
　全く説得力のない理由で、貴史が立村くんを推薦したのだ！
　周りが信じられないムードに包まれた。結局誰も自分から手を挙げる人がいなかったのと、立村くんが困った顔しながらも辞退をしなかったので、いつのまにか私と一緒に評議委員に決まってしまったわけだった。
　ちなみに青大附中の場合、委員会活動が部活動よりも最優先されるしくみになっていて、一度決まった委員は三年間、よほどのことがない限り変更されないの だという。形式上、委員の前期後期選出は行うけれども、ほとんどが前期からスライドする。委員会というよりも、「評議委員部」に入ってしまった、って感じ だった。
　つまり、三年間、私と立村くんはＤ組の中で評議委員としてコンビを組み続けることになる。これって、立村くんがどう考えているかわからないけど、私はそれでいいと思っている。もちろん、今だって。

　まいどのことだけど、いつも周りの人たちに誤解される問題はひとつ。
　――清坂さん、羽飛と付き合ってるんでしょ？　でなかったらあんなに仲良くしゃべれないよね。
　もう、入学式から同じ質問を何度投げかけられてきたことか。
　貴史も同じような感じらしいけど、やっぱり男子と女子との温度差はあってあまり面倒なことはないらしい。「ちゃうって、単に気が合うだけ、一緒につるむ のが多いからなあ、ま、お前も試してみろよ、美里、結構そういうとこさばけてるからなあ」とか意味不明なこと言って煙に巻いているらしい。

　男子はいい、ほんとに楽。
　どうして女子ってこうも面倒なんだろう。
　貴史にお熱のこずえにも、
「あーあ、羽飛をどうやって落とすか、だよねえ。美里が早く誰かの彼女になっちゃえば、私も安心してアプローチできるんだけどねえ」
　今だってやりすぎるくらい下ネタでアプローチしているくせに、ため息つきながら嘆かれる。いいじゃない、私だってそんなの気にするつもりないんだから、 さっさと付き合ってもらえばいいのに。こずえはああ見えて地は女の子らしいとこあるから、貴史ももう少し色めがねをはずして見ればいいのにな、とか思う。
　まあ、貴史ファンの女子が鈴なりになっている現状を考えると、私の立場もかなり難しいものがあるのだろう。私がいつもののりで貴史に冗談かましたり頭を ぼこっと叩いたりするたび、視線が突き刺さってくる。女子だけしかいない……たとえば女子更衣室とか……ではいやみったらしく、「羽飛って元気なタイプの 女子が好きなんだよね」「でもあいつアイドル好きなんだよねえ、だったらもっと可愛い感じの方がいいかも」とか、聞こえよがしにさえずるのはやめてほし い。そんなに好きならどうしてさっさと、それこそこずえみたく「好きです」って言わないんだろう。貴史の好みは私も正直、理解不能なので受け入れてもらえ るかどうかはわからないけども、それでも何にも口にしないでため息つきあってるよりはずっと健康にいいと私は思う。
　けど、今のところ、私と貴史が一緒に帰る時、割り込んで来て、
「羽飛くん、一緒に帰ろうよ！」
　って誘おうとするのは、私の知る限り、こずえだけだ。
　小学校の頃からこの問題にはうんざりしてきたけども、青大附中にきても全く解決されていないなんて、やっぱり女子、私立公立関係なく、共通するものがあるのね。うんざりだ。
　ただひとつだけひっかかるのは、立村くんに貴史、どんな風に説明しているんだろうってこと。こずえに対して私がしたように、貴史がわかりやすく「あれは誤解だっての」って言っているかどうか。非常にあやういところだ。
　もしかして、立村くんも私と貴史のことを、そういう風に考えているのかな。

　あまり付き合いのない女子たちに下手に言い訳して、かえって誤解されるのもなんかいやなので、今のところはなあなあにしている。だって、
「私は貴史とつきあってなんていないよ」
とつっぱねた場合に次の段階、
「じゃあ、誰が好きなの？　だって清坂さん、羽飛みたいに仲いい男子いないじゃない」
って問い詰められる可能性がある。女子って鋭い子が多いから、
「まさかあの、あの陰気な、評議の立村くんなの？」
ぴんときてしまうかもしれない。
　時が満ちるまで、勘付かれたくない。
　誰にも。もちろん、立村くんにも。

「美里、あとで覚えていろよ」
「そっちのほうこそ」
　立村くんは掛け合いをする私と貴史を交互に見た後、再びノートの隅に語彙を書き写し、増やし始めた。
　日本語だけでは足りなくなったのだろう、英語の辞書も取り出し和英索引の部分で単語を探していた。
　隣でなんとなく、視線を感じる。
　横を向くと、加奈子ちゃんがさっきと同じように黙って笑みを浮かべていた。

　――加奈子ちゃんに気付かれてる？
　いやだ、そんなの。

　評議委員会中は他の一年女子こっそりおしゃべりしているかのどちらか。結城評議委員長が甲高い声を張り上げているのをまじめに聞いているのは、一部の上級生だけだと言ってよい。
「えーと、みなさん。本日のテーマは、十一月に行われる学年お楽しみ会なんだが。担当は、一年生に担当、よろしいですかい、ほら、そこ、聞いてるんかいな」
　毎月最後の週、水曜日の放課後に担当学年の有志を募って、劇や合唱などを発表する会についてだった。四月から始まり、今回で四回目だった。七、八月が抜 けているのは夏休みに絡んでしまうから。すでに六月の段階で私たちは一年生は、お楽しみ会の仕切りを経験していた。学芸会の延長みたいな感じかと甘く見て いたら、とんでもない毎日授業が終わった後は夜七時くらいまで残って準備や台本をこしらえなくてはならなかった。もちろん先輩たちも手伝ってくれたし、『テレビＣＭ物まねショー』という企画も各クラスの有志たちがばりばり参加してくれたおかげで、無事乗り切ることができた。確かその時、立村くんは二年の 先輩の手元に置かれて他の男子たちの二倍、三倍くらい仕事を押し付けられたはずだ。
　幕切れ直後に舞台の袖で、貧血起こして倒れてしまうくらいだもの、きっと最後の一週間くらいはほとんど寝ていなかったんじゃないだろうか。
「まあよいわ、お前ら、一年生評議同士で鞍をまとめて、来週の委員会までに提出してちょうだいな。困った時はいつでも三年もしくは二年の力強い腕にしがみ つくが良かろう。とにかくやれるところまで、まずはやってみるんだな。おい、天羽、難波、立村、更科、わかったのか？」
　一年男子評議の名前をずらっと並べて、全員がはっと顔を挙げたのを確認し、結城委員長はにっと笑った。私の隣で立村くんは表情を変えず、背をぴっと伸ば しノートを取っていた。他の男子たちは頭を掻いたりなにやらわけのわからない言い訳したりしている。それぞれのクラス女子評議たちが男子たちに話し掛けて くすくす笑っている。私たち一年評議委員は男女とも仲良しだった。またあとでみんなでおしゃべりすることになるんだろう。
　議題が多いせいか、学年お楽しみ会の話はそこで終わった。

ま、なんとかなるだろう。一年が担当とはいえ、結城委員長が言うように「三年もしくは二年の力強い腕」にしがみつかせてもらえばいいんだから。それに、 一年には男子を中心に目だちたがりや小僧がたくさんいる。六月の時と同じように、そいつらに一声かけて、協力を仰げばきっと面白いことになると思う。あま り心配していなかった。

隣の席で立村くんの書いているノートを覗いてみた。習字の教科書みたいな上品な文字で、「一年お楽しみ会企画について」ときれいに綴っていた。背をピン と伸ばして筆を持つような要領で書いている姿がほんと、絵になる。貴史のようにいつも机に上半身つっぷして落書きしているのとは大違いだ。

「それでは、今日の審議終了！　お疲れ様っした！　さ、本条、ちょっと来い」

「何の御用で」

結城委員長は机をとんと叩いた後、二年の先輩を呼びつけてさっさと教室から出て行った。委員長のくせに終わったら即、退室するんだもの。なんだか委員長っぽくない。

所要時間は一時間。思ったより短かった。

公立に通っている友達から聞いたところによると、委員会というものはぼーっとしていればあっさり終わるのだそうだ。なぜ附中だけ、こんなに時間がかかるのだろう。

評議委員に限らず青大附属の委員会活動は、三年間顔ぶれが変わることなく連続で勤めるのが慣例だった。部活に近いのり、と言えばいいのだろうか。

もちろん吹奏楽部とかテニス部とか野球部とか、それなり部活動がないわけではない。実際入っている人もたくさんいるはずだ。ただ、運動部文化部問わず、 どの部もみな学外ではぼろぼろ、弱いったらない。この十年近く、一回戦敗退以外の文字が青大附中の運動部歴史上に残ったことはないらしい。とにかく、部活 動が弱すぎるのだ。

弱いから部活動に参加しない、というわけではない。私だって青大附中に入ったらテニス部で可愛いスコートはいてプレーしてみたいって夢を持っていた。評 議委員になった段階で先輩たちに「もし評議続けるなら、部活はあきらめな」って助言された時も言われた意味がわからなかった。けど六月のお楽しみ会を企画 し参加した段階で、先輩たちのアドバイスが正しいんだってよっくわかった、とってもじゃないけれどかけもちなんてできやしない。「委員会」ではない。私が 参加しているのは「評議委員会部」なんだもの。

第一、信じられる？　評議委員会では夏休み、ホテルでの合宿旅行まであるんだもん！

その時のテーマはもちろん、評議委員同士が仲良くなるためのディスカッションが中心だけど、先輩たちの指導でなぜか「発声練習」とか「合唱練習」とか 「ホームビデオの使い方」とか「パントマイムの練習」とか、はては「茶道・和服の着付け」などといった全く必要性を感じないものまで含まれていた。しかも それは、先輩たちが自主的にカリキュラムとして組み込むものであって、顧問の先生はいっさいノータッチ。もちろん私はそういうの好きだし、楽しかったし、 絶対三年間評議委員でいるって決めるきっかけになったけど、立村くんのようにおとなしい人にはかわいそう。後期、評議委員をやめるなんて言い出さないか なって、もう気が気じゃなかった。もっとも委員会の場合は、前期と後期の切れ目以外で交代することが難しいとされて

いた。一年生の春にわけのわからない中 放り込まれ、その後は強制的に参加させられるなんて、きっと相性の合わない人には地獄だろう。
　まあ、私は、それでいいと思っていた。立村くんがどう思おうが、三年間一緒なんだもの。立村くんの書いたノートの筆跡も何時だって見ることができるんだもの。そして、きっと来年の夏合宿も、一緒に行けるんだってことも。

　委員会が終わるとたいてい学年ごとに空いている教室へ移動しだべるのがいつもの流れだった。一年女子評議の子に声を掛け合い、男子たちにしたがって別の教室を探す。
「美里、どうする？」
　Ｃ組女子評議のゆいちゃんが振り返り尋ねてきた。私は首を振った。
「今日はやめとく。ごめん、用事があるんだ、また明日続きしようね」
「めずらしいね」
　自慢じゃないけど、私は記憶力にちょっとばかり自信があるつもりだ。
　――立村くん、二時間目、言ってたよね。覚えてないなんていわせないからね！　男子たるもの、口約束たって約束は約束なんだからね！　絶対聞き出すんだからね！
　私はゆいちゃんたちが他の評議連中たちに囲まれて教室を出て行くのを見送った。男子連中もいつもの流れって感じで動こうとしている。立村くんも続こうとした。まずい、慌てて引き止めた。
「立村くん、二時間目のこと、覚えてなあい？」
「え？」
「約束したでしょうが。班ノートのこと。私に知られてもかまわないんだって言ってたじゃない。そのこと、覚えていたら教えてくれるって。ちゃんと覚えていたから、約束通り、教えてよ」
　いきなり問われて思いっきり戸惑っている様子の立村くん。口を半開きにしてしばらく目をきょときょとさせていた。やがて「ああ、そうか」と呟きため息を 吐いていた。その間に他の一年男子評議委員たちはさっさと出ていってしまい、取り残されたのは立村くんだけ。きっとすっかり忘れていたんだろうな。まった く、男子たるもの、言葉の重みを意識してもらわなくっちゃ困るって言いたい。
「そんなこと、よく覚えていたな」
「私は記憶力がいいほうなのよ」
「確かに、まあ、言ったよな」
　立村くんは自問自答しながら、かばんにノートをしまいこんだ。
「それなら、帰り道で」
　言っとくけど、私は決して狙っていたわけじゃない。
　これまでも、貴史とか他の子たちと群れて帰ったことは何度もあるし、一緒に帰るのはそんなに珍しいことじゃなかった。入学式以来、しょっちゅうだ。周囲 の女子たちから変な目で見られるようになっても、三人だったら別に問題ないじゃない。だけどふたりっきりというのは、初めてだった。別にやましいことなん て、なにもない。ないんだけど。

――なに、ひとりでどきどきしているんだろう。ばっかみたい。
――たまたま貴史が今、いないだけじゃない。評議委員会だし。
――立村くんと二人っきりなんて、そんな、変なことじゃないじゃない！
奥歯をしっかりかみ締めて息を止め、答える準備をした。
「ちゃんと答えてよ。立村くん」
少しだけ先輩っぽい顔して、クールに返事した。

ためらうことなく一緒に教室を出ると、廊下で待ち受けていた一年男子評議たちが「ほお」とか「へえ」とかわけのわかんないことを言いながら、立村くんに近づいた。
「立村、お前どうすんの、今日、これから、残らねえの」
Ａ組評議の天羽くんがとぼけた言い方で首筋をかりかり掻きながら尋ねてきた。立村くんどう答えるだろう。またどきどきしてきた。
「ああ、悪いけど先帰る」
「本条先輩が後から来るらしいが、それでもか」
Ｂ組評議の難波くんが、黒縁眼鏡を指先できざっぽく持ち上げながら、畳み掛けた。立村くんの痛いところを突いている。そう、立村くんは二年の本条先輩に なついていて、いつも一緒に行動している。同学年よりも本条先輩と一緒にくっついている方が多い。私よりも本条先輩選んだらやだな。ちなみに本条先輩は れっきとした男子である。
「うちに帰ってから本条先輩には電話するから」
「へえ、そうなんだあ、立村って本条先輩と毎日電話かけあってるのかあ。ふうん、なんかそれってやたらと女子っぽくないかなあ。清坂さん」
今度は私に、子犬のくんくん言うような声で語りかけてきたＣ組評議の更科くん。私にいったい何言えっていうんだろう？　そりゃ、女子同士、こずえなんか とは長電話するけど。でも、立村くんと本条先輩がそうだったとしても、私には関係ないじゃない。だって男子同士なんだから！
「うむ、やはりあの説は本当だったのか」
最後に天羽くんが意味ありげな一言で締めると、一年男子評議三人衆は立村くんに片手を振りながら、
「それじゃーＡの教室に行ってっから、来るならこいよ！」
ささっと勢いよく階段を駆け下りていった。どうでもいいけど「あの説」ってなんだろう？
「立村くん、なんで本条先輩に電話かけるの？」
「向こうからかかってくるから」
なあんだ、立村くんの方から毎日電話攻撃しているわけじゃないんじゃないの。この時ほんと、本条先輩が女子じゃなくてよかったって思った。何変なこと、考えてるんだろう。私。

緊張して言葉が出ないなんてこと、ないと思っていた。
けど、立村くんの冷静な振る舞いを目の当たりにしていると、あれこれ考えている私がなんだ

かまぬけっぽくみえてならなかった。
　音楽のことやテレビアニメのこと、思いつくままに会話へ継ぎ足していく。時間はそれなりに埋まり、やがて駅前まで出た。いつもは私と貴史が一緒にここで さよならを言う。話にに聞いただけだけど、立村くんの家は駅からさらに二駅先の品山町だった。汽車だと本数が少ないのでいつもは自転車、でなかったらバス を使うんだと言っていたっけ。

　立村くんは本日の議題について話を持ち出した。なんだか会話がなくなるのが怖いみたいだった。別に私、怖いことしてないのに。
「今度の学年会は、他の組の連中に任せておこうと思うんだ」
「え、どうして？　私も楽なほうが嬉しいけど」
「ほら、六月の会では、九十九パーセントＤ組で人を集めたんだろ。本条先輩とも話をしていたんだけどさ、あの時はＤ組だけががんばりすぎたところがあるし、今回は他の組に協力を仰いだほうがいいんじゃないかって言ってくれたんだ」
　ああ、やっぱり本条先輩か。本当に懐いているんだ。ほんの少し、楽しそうに聞こえた。むっとした。でも隠さなくちゃ。私は頷いた。
「あれ以上貴史たちだって、恥ずかしい真似したくない……かなあ？　あいつ、ああいうアホな乗り大好きなんだもん、かえって淋しがるかな。どうして俺の出番がないんだって！」
「それは言えてる。それなら羽飛だけ特別出演してもらうか
　テレビＣＭの物まねをオリジナルな形に組み込んで、全学年の拍手喝采を浴びた張本人だった。あれできっと羽飛貴史ファンクラブ会員は増えただろう。もっ とも貴史だけではない。Ｄ組は妙に貴史に近い感覚の奴が男女問わず揃っている。無理に他の組から援軍をもらわなくてもいいくらいのスターが勢ぞろいしてい るわけだ。
　私からすれば、貴史は今後アホ扱いされるだろうと読んでいたのだけど、お笑いのスターはやっぱり女子にもてもてらしい。マイナスイメージを受けたためしなし。
「一応、俺も話に加わるけどさ、清坂氏が気にすることないよ」
　目をそらせて、自転車のハンドルに頭を傾け、立村くんは答えた。
　自転車全体にまぶされた銀色の光が、跳ね返るように見えた。飾りひとつないシンプルなタイプだった。派手な光だけが目にまぶしかった。金ではなくて、銀 の輝きがどことなく立村くんらしくてしっくりなじんでいた。遅刻しそうな顔であくせく漕ぐ姿を、私はまだ見たことがない。立村くんを直視できない。好都合 だった。あがらないで話せるから。
　――なんでこう意識しているんだろう。また貴史にからかわれるよ、もうばっかみたい。
　トーンを少し上げた声で私は、「ありがとう」とあっさり答えた。自分の声が耳に、軽く響いた。
「でも、何か手伝うことあったら私もする。それより、さっきのこと約束でしょ。教えてちょうだいって」
　困り顔で首をひねった。立ち止まり立村くんはうつむいた。足になにかがぶつかったかのように、さりげなく目線を下げた。その状態で、車通りの少ないレンガ散歩道の真中へ進んだ。後

ろから車も自転車も走ってこなかった。
「ね、誰にも言わないから」
　私も声を落としてささやいた。
「たいしたことじゃない、ほんとに、たいしたことじゃない」
　立村くんはかすれた声で繰り返した。早口に語尾を消すような感じで呟き、かばんから取り出し、私に渡してくれた。、
「これ、読めばわかると思うよ」
　おろしたてのノート一冊だった。
　表紙の右下に、青大附中の校章が浮き出ていた。私はすぐにめくって読んだ。

　裏・ノート宣言

　青潟大学附属中学一年Ｄ組において、最も意味のないものは『居残りの罰』と『意味不明の個人面談』そして『班ノート』の存在である。
　教師Ｈ氏は情熱過多のためか、生徒ひとりひとりのプライバシーに深入りし、
「おい、〇〇！（お好きな名前をどうぞ）俺の胸にドーンとぶつかって来い！ボコボコボコ、ああ、さあ、殴り合った後は抱き合おうぜ。お前って本当にいい奴だったんだなあ」
と振る舞うのである。生徒側からしたらいい迷惑である。
　最近では、生徒Ｌに対し、班ノートの内容があまりにも冗談行き過ぎであることをなじり、彼の暗い過去についてながながと語ることを要求しはじめた。
　これはファシズムだ。プライバシーの侵害である。
　生徒Ｌ、Ｔの二名はクラスを侵食する愛情これらのウイルスを自らの体内で撲滅するために、この『裏・ノート』を発行することにした。

「裏・ノート？」
「だから、裏、なんだ」
　見られるとまずいんだろう。よくわからない。次のページをめくってみた。

『裏・ノート』の目的

一　このノートには班ノートに書くための情報を主に記す。
二　このノートは原則としてＬとＨのみが使う。
三　このノートに書いた内容を第三者に漏らさないこと。
四　このノートの内容は十二月の期末テスト後、しかるべき手段によりコピー誌として数部刷り、誤解を受けることを欲しない数名のものに配ること。

「やたらと難しい言い回しが多いね」

「大学の構内で、こういう紙をもらったんだ。それを真似たからかもしれない」
　立村くんはチラシらしきものを取り出し、私にひろげて見せた。
　手書き文字で大きく『学内の監視カメラ撤去を要求！！』と書かれていた。ところどころ読みづらいカタカナが混じっていた。
「『Ｌ』、が立村くんのことでよね・じゃあ、『Ｈ』って、まさか貴史？」
　小学校の頃友だちとやっていた交換日記みたい。
　読み直し、私は念押しした。
「つまり、立村くんは、菱本に勝負したいというわけなんだ」
「陰険なやり方だけどな」
　立村くんにつられて、私も自転車を留めた。日が翳っている。太陽が雲をかぶったままっつやつや光っていた。立村くんはその雲を見つめ、やわらいだまなざしを私に向けた。そのまま説明を始めた。

「今日の班ノートの一件、聞いたよな。菱本さん、あの時かなり怒り心頭にきていたみたいなんだ。どうやら、俺の家庭環境が想像を絶する悲惨なものだと思い込んでいたらしい」
　うん、と頷いた。
「もっと心の奥には『言い出せない切なさが溢れている』と思い込んでいたんだってさ。そんなことあるわけないのにさ」
　本当かどうか、私にはわからない。
「今日のところはおとなしく頭を下げて帰ったけど、だんだん腹が立ってきたんだ。それこそ『教師の過剰な干渉による生徒のストレスについて』って本音を書 き散らしてやろうかと思ったけどさ。それだとあいつの思うつぼだろう。それより菱本さんのリクエストにとことん沿うように答えてやって、おちょくってやろ うと。そんなわけなんだ」
　とうとう、立村くん、菱本先生を「あいつ」と言い放った。
「おちょくるって？」
「表の班ノートには、それなりの感動めいたものを書くんだ。もちろん本音なわけ、さらさらないさ。それから『裏・ノート』には感動ネタの暴露話を書き上 げ、十二月に班の連中に発表するというわけなんだ。清坂氏をはじめとする一班の人に配る分、コピーしておくんだ。これから書く班ノートの内容が本音だとは 死んでも思われたくないから」
「これから書くって？」
　表情を変えず、穏やかに立村くんは続けた。
「たぶん今、俺が何も言わなかったら、明日から清坂氏は俺の気が変になったんじゃないかって大笑いしてたと思うよ。それは保証する」

　他の男子からそんなこと言われたら、それこそ指差してばか笑いしていただろう。
　がきっぽすぎる、こと、ばかみたいって。
　だけど、相手は立村くんだ。そんなこと、絶対言えない。言うもんか。

――他の女子、きっと知らないんだ！　立村くんってこんなにおちゃめなとこあるんだって、だあれも知らないんだ！　知ってるのは私だけ！

「立村くんって、意外といたずらっぽいとこ、あるんだね」
　にっこり笑顔で答えるだけにした。
　立村くんはほっとした顔でノートを受け取り微笑んだ。
「約束通り、そのノート、清坂氏にだけ見せるよ」

　立村くんと分かれた帰り道、私は高鳴りが止まらない心臓を両手できゅっと抑えてみた。そのままほっぺたを抑えた。そのままぎゅうっと包み込み、しばらく立ち止まったままそうしていた。

その二　裏・班ノートのはじまり

『裏・ノート』企画が始まった。私は表の班ノートと『裏・ノート』を立村くんから見せてもらい、こっそり読み比べていた。
　立村くんと貴史、ふたりが見せる表と裏の顔。
　仲間に入れてもらえないのが悔しかった。

「班ノート」十月二十一日　立村上総

　この学校に合格できてうれしいと思うのは、やはり友達といっしょに話をしている時だろう。今まではひとりでいることが多かったせいだろうか。あまり話の合う人がいなかった。たぶん、僕の家庭環境のせいだと思う。小学校の頃はいろいろあって同級生をうらやんだりしたこともある。またそう思っていることを見抜かれていじめられたこともある。でも、青大附中にはそういうことをする奴は一人もいない。なんでかわからないけれど、居心地がいい。人の弱みをあげつらってばかにする奴はいない。

「裏・ノート」　十月二十一日　立村上総

　記念すべき第一日目。むしずが走る。「班ノート」に書いたことは九十九パーセント、フィクションだ。第一、俺は小学校の頃いじめられたことなんてない。「人の弱みをあげつらう奴」なんて、この組には結構いるしな。羽飛、悪かったな。数学の平均点を落とした張本人だと認めてやるよ。

「裏・ノート」十月二十一日　羽飛貴史

　まだエンジンかかってないんじゃないか。第一日目だから恥ずかしい気持があるのもわからなくもないけど、もっとパワーアップしなくてはならないんじゃないか。もっと不幸と涙が必要だぞ。

では、俺がお手本を書いてやる。

「班ノート」十月二十二日　羽飛貴史

　俺もそれ、すごく思う。立村くんが暗い過去を背負っていること、昨日のノートを読むまでぜんぜん知らなかったし、それに、立村くんがこんなに暮らすのことを思っていてくれるなんて想像しなかった。うまく書けないんだけど、立村くんがうらやましいと思う。誰よりもいやなめに合ってきているのに、強くいられるんだから、俺は本当に、立村くんが好きだなって思う。

「裏・ノート」十月二十二日　羽飛貴史

　どーだ、立村まいったか！

「裏・ノート」十月二十二日　立村上総

　どうも誤解しているんじゃないのか。こういった文面が残るのかと思うと、俺は瞬時に焼き捨ててしまいたくなる。第一、お前に愛の告白されたってちっともうれしかないって。

「班ノート」十月二十三日　杉浦加奈子

　羽飛くんの言うとおりだと思います。立村くんは辛いとか悲しいとか言いません。私が立村くんのような立場だったら毎日ないていたと思います。
　羽飛くんもやさしい人ですね。私はこのクラスにいてよかったと思います。

「班ノート」十月二十四日　古川こずえ

　いったいこの班ノートは何が起こったって言うのよっ！立村くんも羽飛くんも、二十一日を境にくそまじめ人間に変身してしまったじゃないのよっ！　いったい何考えているのよっ！　とにかく、私は今までどおり、マイペースで行くから、先生そこんとこ、よろしくね。もちろん清坂さんだって、そうでしょ。
　ああ、来週は国語の書き取りと英語の追試と、理科の星座調べ宿題が山積みなのよっ！そのあとで実力試験ですってえ？　冗談じゃないわよ！

「班ノート」　十月二十五日　清坂美里

　私はどうだっていいんだけど、今日学校に来る途中である人の噂話を聞いてしまいました。
　雨が降っていたんで、バスで来たのね。そしたら、学生服の男子（当然、公立）が数人、後ろでぎゃあぎゃあわめいているのね。
「おい、●●（あえて伏せ字にします）が附属行っているんだってな」
「あいつらなら、いじめられて当然だぜ」

「でも、うまくいっているみたいだって、△△が言っていたぜ」
「あいつのことだから、猫かぶっているんだろ。それに、附属の奴ってぼっちゃんぼっちゃんした奴が多いから、あいつの同類ばかりうじゃうじゃしているんでないの」
「学校際の時、乗り込んでばらしてやっかな」
　とかなんとか。まあ私はいいんですけど。
　ちなみに●●とは、我がクラスの男子であることを告白しておきましょう。武士の情けで、こればかりは私の胸にしまっておきますわ。
　ということで、私はやっぱり不真面目に書きました。
　先生、ごめんあそばせ。

「裏・ノート」　十月二十五日　立村上総

　まだ菱本さんの反応はない。悩んでいるのか、感動しているのか、それとも単に忙しいだけなのか。文句がこないだけいいか。
　それはともかく、明日のネタ探し、頼む！

「裏・ノート」　十月二十五日　羽飛貴史

　俺たちが突然まともな書き方しはじめたことを怪しまれているような気がするんだ。そう思わないか？　だいたい、今までが今までだったから、いきなりお涙ちょうだいい路線に切り替えたって、すぐには信じてもらえないって。
　時間が解決してくれるよな。
　どうでもいいけど、立村よ。このこと誰かに話したのか。
　あえて、『武士の情け』で、そいつの名前は書かないが。

「班ノート」十月二十六日　立村上総

　明日の日曜は、小学校の頃担任だった先生のところへ遊びに行く予定だ。
　別に用はないのだけど、友達に誘われてしょうがない。きっと先生も寂しがっているからと、わけのわからないことを言っている。
　僕自身も久々に小学校の友達と遊びたいと思う。もちろん多少つらいこともあったけれど、自分を強くしてくれたきっかけならば、かまわない。僕は今の生活が充実していることと同時に、あの頃のひねくれた自分をさとしてくれた先生にお礼を言ってくるつもりだ。

「裏・ノート」　十月二十六日　立村上総

　さて、真相はこれだ。

　誰が小学校の担任なんかに会いに行きたいと思うかよ！　月曜には空間図形の追試があるんだぞ！　たとえ数学で満点取っていたとしても、誰がそんな時間の浪費するかって！
　思い出すだけで腹が立つ。
　なんだかんだ言っては、授業中に言うんだからな。
「強くなるのよ。お母さんがいなくなっても負けないでね」とか。
　あの時は一瞬、殺してやろうかと思った。
　もし、俺が附中入試にこけていたら、絶対あの先生のせいだ！　書いているうちに腹が立ってきた。永久保存版でここは資料として残しておくべし。以上。

『裏・ノート』企画から一週間が経過した。

　土曜日、四時間目、美術の授業が終了し、私はパレットを荒いに席を立った。おなかもすいたことだし、早く片付けたかった。絵の具を筆でこすり落とし、腹の虫がきゅるきゅる鳴くのをなだめていた。
　後ろからぎゅっと腰に手を回す人ひとり。
　いきなりおへそのあたりに触れられ硬直してしまった。
「やだ、何するのよ！　こずえでしょが！」
「やっぱり、感じた？」
　こずえはすでにパレットの始末を終わらせ、手を洗おうとしている。隣の蛇口をひねり、水石鹸をあわ立て、指と指の間をこすっていた。
「美里って、痩せているように見えるけど、おなかはそうでもないみたいね」
「いいじゃない、見えないんだから！」
「そのくせ、胸のお肉はついてないみたい。すっごくつるつるよね」
「こずえよりはやせているわよ」
　気にしていることを言わないでほしかった。幼児体型がちょっぴり残っているから毎日、贅肉解消のために腹筋背筋三十回ずつやっているのだ。
　こずえはブレザーのポケットを探りながら、つんつんと肩をつついた。
「ハンカチ貸したげようか」
「持っている、それよりいいかな。お願いしたいことあるんだ。美里にしか聞けないこと」
「なによ、貴史に関することなら、私詳しくないからね」
「班ノートのことだってば。美里も気付いているでしょ。最近、立村と一緒に羽飛も、妙に友情をほのめかすようなこと、書いているよね。今まではぜんぜん、そんなこと匂わせることもなかったのに」
「あの二人は、なんだか気が合うみたいだからしょうがないんじゃない？」
　こずえは鋭い。驚いたところを顔に出さないよう私は言い返した。
「でも、羽飛には似合わないよ。あんな書き方ってさ。羽飛はやっぱり、しょうもないネタを軽く流す方が似合っているもの。なんか、立村の泣き言を聞いて、羽途が調子を合わせているって

気がするんだ。立村ならわかるよ。何考えているかわからないところあるから。たまにはぐたぐた書きたいんだろうね。でも、羽飛って、そういうこと嫌いそうなタイプじゃない？　私、『俺は本当に、立村くんが好きだなって思う』なんて書く奴だったら、好きにならないよ。たぶん」
「私にそんなこと言ってどうするのよ。答えられるわけないじゃない。そんなに気になるなら、自分で聞けばいいのに」
「それができれば苦労しないよ。第一、羽飛は私になんか本当のこと話すわけないもん。付き合い短いからさ」
　こずえも表面は明るく貴史に好意のアプローチをかけている。
　けど友達以上。それ以上ではない。嫌いじゃないけどおもしろい女子のひとりでしかないと、夏休み貴史は私に話していた。こずえには言えない。
　貴史も考えるところがあったのだろう。二学期に入ってからこずえを意識して遠ざけようとしている節があった。こずえが話しかけると、無理やり立村くんや私を引きずり込み、ふたりっきりにならないよう気を遣っていた。第三者の私ですら露骨だと感じたのだから、こずえが気付かないわけがない。
　追いかけられるのが苦手なタイプなのだ。貴史は。
　自分の感情が動かないと、絶対行動しない。
「私だって、一緒につるんでいた時期が長いだけだよ」
「お願い、何でもするからさ！　美里、頼みます！」
　なかなか取れない緑色の硬い絵の具かす。私は筆の付け根で強く擦り取ろうとした。こずえはいきなりパレットをひったくり、水気をふき取った跡後の指でこすり落とした。あっというまにこずえの人差し指が緑色に染まった。
「そんなに知りたいの？」
「あたりまえだってば。ひとつでも、ふたつでも。羽飛の秘密を知りたいんだ。美里にはかなわないかもしれないけど、羽飛が何を考えているか、少しずつでも私の頭に残しておきたいんだ」
　――たぶん、無駄だと思うよ。私『裏・ノート』のこと、立村くんから聞いているけど、貴史は今の段階じゃ、私にだって教えてくれないよ。立村くんと貴史の間での秘密なんだもの。立村くんは内緒で教えてくれたんだもの。
　断りきれず、私はうなずいた。
「でも、あてにしないでよ。本当に、聞くだけだからね」

　ここ一ヶ月くらいの間、貴史の家から足が遠のいていた。貴史のお母さんがお茶やらお菓子やらもって、部屋に出入りしすぎて落ち着かないし、話にまで割り込まれてしまい、尻切れトンボに終わることが多いからだった。私の母とも仲がよく、青大附中入試の時はお互い情報を交換していたらしい。私のことを『みさっちゃん』と呼んでくれて、大歓迎してくれるのは嬉しかったけれども。
　私が貴史の家へ行く時は秘密の相談を持ちかけることがほとんどだった。他の人に見られたら誤解されてしまうだろう。ただでさえ、仲が良すぎると思われているのに。

　これ以上、立村くんに誤解されたら、たまったものではない。
　他の人の美術用品片付けが手間取ったため、帰りの会は行われず、手の空いた人からさっさと教室を出て行った。立村くんも貴史に二言三言ささやいた後、急ぎ足で姿を消していた。
　私は貴史が道具をしまうのをいらいらしながら待っていた。
　絵の具箱が片付いた後、私の顔を見て、
「俺に用でもあるのかよ」
　教室の片隅を指差し、貴史のかばんをひったくって窓辺に歩いていった。磨いたばかりの窓ガラスが白っぽい光を跳ね返していた。私と貴史の顔も、油をふき取ったようなさっぱりした感じでガラスの中に映っていた。
　下手な言い訳はしなかった。単刀直入に言った。
「ちょっと、突然どまじめになった班ノートについて聞きたいんだけど、私に話せないようなこと、なんてないよね」
　あくまでも『裏・ノート』のことは知らないことにして、私は尋ねた。
「なんで美里がそんなこと聞くんだよ」
「あんたがああいうばかなこと書くのは、大抵何かたくらんでいる時よ。私が気付かないと思っていた？」
「さあね、知らねえ」
　貴史はさらにとぼけた口調で答えた。言葉の雰囲気に、どこかからかい調子が漂っていた。語尾が軽かった。
「別に今、言えとは言ってないよ。明日の一時、あんたのとこに遊びに行くから、その時に白状してくれればそれでいいよ」
「俺の都合も確認しないで、勝手に決めるなよ」
「あ、予定なんであるんだ、もしかして誰かとデート？」
「お前、そんなことしか考えてねえだろ。自分でやりたいことを俺にさせようっていうのはやめろよな」
「話そらさないでよ。私に来られたらまずいこと、何かあるんでしょ」
「美里が想像しているようなものは置いてねえよ。そんなんじゃなくて立村との約束があるんだよ」
　貴史はもごもごと、歯切れ悪く答えた。
「立村くんとデート？」
「俺にそっちの趣味があると思ったか？　ただ、向こうが俺の家に来たいようなこと、言っていたから」
　私にしか聞き取れない情けない声だ。立村くんと仲がいいのはわかるけど、遊びに行きたがるほど付き合いが深まっているとは初耳だった。貴史の友達がいるときに割り込もうなんて思っていない。
　――それに立村くんだったら。
　貴史ひとりだったら有無を言わさず押しかけていっても平気だ。でも立村くんが私と貴史のこ

とを誤解するのだけはいやだった。
　一学期半ばに『清坂さんは結構男出入りがはげしいよね』と噂されて傷ついた経験もある。立村くんにこれ以上変なイメージを植え付けたくなかった。
　第一、こずえのためにそこまでする必要があるのかとも。
「いいわよ。別の日で。あとで電話するから」。
　背を向けたとたん、貴史が呼び止めた。
「美里、お前、もしかして立村にやきもち妬いているのかよ」
「誰が誰によ！　私がなんであんたに妬かなくちゃ」
「勘違いするなよ。立村にって、言っているだろ」
　――勝手にうぬぼれるんじゃないわよ。
　ついかっとなってしまった。貴史は私の顔をじっと見つめ返した。嘘をつくなと言いたげに。
　――こいつにだけは、何も言い返せないよ。
「男に妬いて、どうするっていうのよ」
　言い捨てて、教室を出た。廊下に人影がないのは、その日が土曜の昼下がりだったからだろう。廊下側の窓辺にはななかまどの実が、まだ青いまま揺れていた。
　いきなり立村くんのことを持ち出し問い詰めるようなことは、今までなかった。
　あんなまじめな視線で見つめられたこともなかった。
　いつもこずえに言い放っていることを、胸の奥で確かめた。
　――私は、貴史と付き合っているわけじゃないって。

　他の女子からすれば、私と貴史は『付き合う』ように見えたのだろう。気兼ねなくおしゃべりし、登下校も一緒、途切れぬ会話を交わしている姿。『付き合って』いないとできないことだと思われていた。私にとっては、子どもの頃からしていること、そのまんまなのに。
　もしも女子の友達とふざけあうだけで満足できたならば。貴史との距離を少しずつ置いていっただろう。貴史とべったりしていたのは、女子との会話がだんだんつまらなくなったからだった。好きな男子のことや、アイドル歌手のこと、不自然なほど男子を嫌っている風に見せかけて、実は気にしている態度。観るたびにむかむかした。私と貴史との間を、にやつきながら詮索するくせに、自分の好きな男子に対してはくねくねしながら、思わすぶりな態度を取る。それが許せなかった。

　確かあれは五年の秋のことだった。
　同じ組の女子が児童会選挙の立会演説会中に、おもらしをしてしまったことがあった。たまたま私は選挙管理委員会の仕事をしていたのでその場を離れていた。まる一日、知らずにいた。担任が事後、口止めをしたからだった。次の日まで守られていた。
　ところが次の日、隣組の男子が露骨にからかい始めた。
「おめえ、昨日、体育館でしょんべんもらしただろ！」
　私はそいつらの言うことがすべて嘘だと思い込んだ。やり返すつもりで本人に事実かどうか真

っ正面から尋ねてしまった。
「五年生なのに、おもらしすることなんて、あるわけないよね」と。
　当時、すでに生理が始まっていると噂されているような女子だった。好きな男子の話ばかりしているグループに入っている子だった。私よりはるかに、大人だと思っていた子だった。なのに、『トイレに行ってもいいですか』がいえなくて……がどうしてもつながらなかったのだ。
　彼女は泣き出してしまい、私は彼女たちのグループから、露骨に無視された。
　幸い私にも別の友達がたくさんいたから孤立はしなかったが。
　決して彼女をばかにしようとしたわけではなかった。『おもらし女』とばかにされた子の汚名を晴らしてあげよう、そんな善意からきたつもりだった。でも私のしたことは、彼女のちょっとした失敗を再確認させるはめになってしまった。
　落ち込む私を見かねたのだろう。貴史は私の家に電話をかけてきた。
　事が起こった時の詳しい状況を説明してくれた。
「なあ、美里。たしかにしょんべんもらしたことでからかうのは最低なことだと思うんだ。でも、それをなかったことにしろ、忘れろというのは、できないと思うぞ。美里は知らなかったんだろ。それならああいうことを言ってしまったとしても、仕方が無いんじゃないか」
　電話を切ってから、ベッドの上でしばらく顔をうずめていたことを覚えている。
　私なりの正義で行動したのは、間違っていない。ただ勘違いしてしまっただけなんだ。ということ。
　他の女子とは、ことばのやりとりひとつに気を遣いながら伝えなくてはならないのに。
　楽に言いたいことを伝えられるのは、貴史だけだった。代わる相手は、今のところどこにもいなかった。
　『好き』ということばだけで男子と女子との間を結びつけようとする、くねくねした女子たち。なにかあると私と貴史を恋愛という色眼鏡で見ようとする態度ががまんできず、気持の通じる友達のいるところへ逃げ出したかった。附中だったら、小学校時代の女子とは違って、もっと気軽におしゃべりできる友達と会えるのでは。私はなんとなく感じていた。

　貴史の家へ遊びに行った時、私は附中受験することを打ち明けた。
　クラスのお楽しみ会計画に関する用事のついでだったと思う。
「貴史、私ね、附中受けることにしたんだ」
「え？」
　絶句していた。そりゃおどろいただろう。私が塾に通いはじめたことすら、知らなかったのだから。十一月から自分の意志で週二回だけ通っていた。貴史には一言も言わなかった。
「ふうん、なんでだよ。美里はまじめぶった連中が嫌いだってしょっちゅう言っていたくせに。附中ってまじめ人間の巣窟だって話だぞ」
「受かるなんて思ってないよ。たださ、一回、附属の雰囲気って覗いてみたいんだ。学校がきれいでしょ。全部暖房冷房が入っているんだって。学校のなかにはレストランもあるんだって。こういうチャンス、なければ中を覗くことなんてできないよ。記念。記念受験よ」

「落ちたらいいけどさ、受かったらそっちに行くのかよ」
　ぶっきらぼうなことばが飛んで来た。
「もちろん！　でも十中八九ありえないよ。だって私の内申書って、そうとうひどいもん。受け悪いもん。『もっと協調性をもった生活を心がけましょう』だってさ。『協調性』って、どういう意味よ」
「クラスの連中に合わせて、おとなしくしろってことだろ」
「でしょ？　たまったもんじゃないよね。私、おかしいと思ったことをおかしいとはっきり言っているだけだよ。それで私の言うことは、他の連中と意見が違うから、改めなさいって言われるんだよ。冗談じゃないよね。六年になって好きな男子がいないのがおかしいとか、そのくせ貴史としゃべっているのが変だとか言うんだもの。ひとりで意識してきゃあきゃあ言っているあんたらがばかだっていいたくなるよね。疲れちゃう」
「おまえ、相当このクラス、嫌っているよな」
貴史は私のしゃべるスピードを無視して、ゆっくりと相槌を打った。
「大嫌い！　つまんないんだもん。最近は遊んでなんかいないよ。塾に行っていることにしているから、断りやすいけどね」
「塾じゃねえの？」
「もちろん、塾にも行っているけど、週に二回くらいだよ。貴史に言ってなかったっけ。私、この前まで、線路を越えたところにある児童館で遊んでいたんだよ」
「あんな遠くまで何が楽しくて行くんだよ！物好きが！」
「他の学校に行っている奴とバトミントンしたり、オセロやったりするためだよ。おもちゃがたくさんあってね、漫画も置いてあるんだ。他の小学校の子もたくさん来ていて」
「で、今も行っているのかよ」
「もう、行かない。決めた。塾もそろそろやめる。ひとりでやるんだ」
　たぶん、私の目は笑っていなかったのだろう。貴史はそれ以上尋ねてこなかった。ふうん、ふうんと続けて。
「どうせだったら、俺も青大附中探検しに行ってみようか」
　つぶやいたのを、聞いた。

　結局、同じ小学受験者の中で私と貴史だけが合格し、受かった以上入学しなくてはならないはめとなり、現在にいたる。『優等生』というイメージはあとかたもなくなり、男女関係なくおしゃべりすることが普通となり、私にとっては居心地いい生活が始まった。たまに『一年のくせに付き合っているのかよ』と冷やかす奴はいる。向きになって打ち消そうとしなくても自然と噂は収まった。こういう関係もあるのかと、納得してくれるのは早かった。『恋愛』ということばだけでくくれない私と貴史とのつながり。それを素直に受けとめてくれる友達が青大附中には揃っていた。音楽の趣味が合う合わないという程度の問題に過ぎない。人それぞれと割り切ってくれたようだった。

なのに、肝心の貴史が、ふと違うまなざしを投げかけた。わけがわからない。ひそかに育てていた、立村くんへの思いに気付かれてしまったのだろうか。

――まさか。

私は慌てて、浮かんだことばを打ち消した。

――あいつが私に妬くわけないもん。

――よけいなこと考えないで付き合える、たったひとりの相手なんだから。

その三　あの頃との再会

　その帰り道だった。
　久しぶりに遠回りして、本品山町の方に自転車を向けた。お昼休みなのに、まだ学生服姿の集団が黒っぽく歩道を埋めるように歩いていた。みな徒歩通学者だった。青潟市の公立中学では、自転車通学を全面禁止にしていたと聞く。歩いて十五分程度のところに住んでいる生徒ばかりなのだから。その点、青大附中とは条件が違っていたのだろう。自転車で十五分程度といえば、すぐ近くのように思われるけれども、歩くと四十五分はかかるのだ。自転車のない生活なんて考えられなかった。
　通学路を歩いている公立中学の生徒達は、歩き方がとろとろしていた。自転車用道路にも人がはみ出して。あぶないことといったらない。仕方なく徐行して片足をペダルから離し、人にぶつかりそうになりながら進んだ。
　どこからともなく聞き覚えのある声がした。
「清坂じゃないのか、あれ」
　男子の、ざらついた手触りの声だった。どこか甘ったるい響きも残っていた。誰なのかわかりそうで、わからなかった。斜め後ろから聞こえてきた。
「お前、附中だろ。どうしてこんなところ通るんだよ」
　だんだん近づいてきた。私は自転車を止めるかどうかで躊躇した。いったん停めると後ろから来る人に迷惑をかけてしまいそう。
「附中行ったからって、お高くなったわけじゃないだｒ」
　左側にその声が接近した。ようやく背中、肩に当人のけはいを感じた。私はぎょっとして身を引いた。
　無理やり、私の隣へ自分の自転車をつっこんできたらしかった。
　真っ黒い詰襟の学生服だった。
「なあんだ、榎本じゃない」」
　お久しぶり、と続けられる相手だった。無視したい奴とか嫌いな相手だったら逃げるけど榎本だったらかまわなかった。
　懐かしくて榎本の額にかかる長めの前髪に向かい、誘った。
「とりあえず、どっか空いているとこにいこうよ。あんた、別に今日、彼女とか待っているわけじゃないでしょ」
　榎本はゆるゆると私に合わせた速度でペダルを漕ぎ、片手を離して親指を立てた。
「さあな、でも、その誘い、受けて立とう」

　そう簡単に縁の切れる相手でない男子が、私には貴史以外にも何人かいた。
　六年の秋、私の遊び場はほとんどが児童館だった。自分のいる学区からは自転車で二十分くら

いと、かなり離れていた。本品山と言われる地区で、立村くんの住んでいる品山地区よりは開けた雰囲気のある場所だった。児童館も、ファーストフード店も、ゲームセンターも、それなりに揃っていた。もちろん私の住んでいる町にもあったけれど。当時の私は学校の女子と顔を合わせたくなかったから、あえて足を向けなかった。
　あの頃は、クラスの女子と遊ぶのが苦痛だった。でも誰かと一緒にいたい。足を向けた先が、本品山の児童館だった。二階建ての白っぽい小さな建物で、遊び道具は大抵のものがそろっていた。入り口の『来館者ノート』に名前、学年、小学校名を記入し、ついでに常連の友達名も探したものだった。知り合いがいればすぐに探し、いなければ着ている子に適当に声をかけ、バトミントンに誘ったりもした。
　同級生と違って、児童館の友達とは毎日顔を合わせるわけではない。学校で嫌なことがあった時などは、児童館の友達に思い切りぶちまけ、悪口を言い合ったものだった。顔も名前も一致しないのだから、あとくされがなくて安心できるし、告げ口される心配もない。離れた場所のせいか同じ小学校の子を見かけたことはなかった。
　児童館の常連に、榎本晶がいた。
　貴史に話したことのない野郎友達は、榎本だけだった。
　榎本に誘われて、九月のはじめから『青大附中模擬試験』を受けに行ったりし、児童館が五時で閉館した後、遊び足りない気持ちで榎本の家に向かったりもした。
　他の友達には決して話していない相手だった。
　たぶん榎本もそうだろう。

「あんたって、本品山中に行っていたんだね。知らなかったよ」
「悪いな。どうせ俺は附中にすべったぜ」
　三月を境に、私は榎本と連絡を断った。電話番号は知っていた。でも一度もかけたことがなかった。私の方の電話番号は教えなかったから、向こうから連絡をしてもらうということもなかった。
　あの頃の思い出がふつふつとよみがえり、家に帰りたくなくなる。好き勝手な普段着を着ていた一年前と違い、今はかっちり決まった制服だけれども。
「児童館に行かないか。もう入れないと思うけど、バトミントンのラケットくらいは貸してくれると思うんだ」
「いいね、それ」
　児童館はここから五分くらい漕いでいけばすぐだった。榎本はポケットから白い小箱を取り出し、私に差し出した。よく見るとタバコの包装に似ていた。
「やだ、あんたたばこなんか吸っているの」
「よく中を見ろよ。本物がこんな甘ったるい匂いさせるか？」
　片手で器用に蓋を開け、私の鼻先に突きつけた。
「あ、ほんと。シガレットチョコだ」
「何も食ってないだろ。これで少し腹の足しにしろ」

「おなか空いてきちゃったよ。匂いかいだらなおさら。でもよく学校で取り上げられないね」
「そんなまぬけな真似しねえよ」
　口調が少しだけ悪ぶっているように聞こえる。榎本が私に気持を示すやり方は全く変わっていなかった。去年も榎本は、会うたびにちょっとしたおやつを持ってきて、私に握らせてくれた。私好みのものばかりだった。小さく包まれたスポンジタイプのチョコケーキ、みかんのぐみキャンディ、細かく切り落とした金太郎飴、私はいつもありがたく受け取っていた。
　学生服の群れから離れてしばらく何も言わずに漕ぎつづけた。私は榎本の前に立っていきおいよくペダルを踏み、ななかまど並木をくぐりぬけた。陽が遮られているせいか、学校のななかまどの実にくらべて色濃く見えた。少し赤みがさしているというのだろうか。らんらんと実をつけ、揺れていた。
　――ななかまどか。
　――榎本と最後に会った時、初めておかし以外のものをくれたっけ。
　――黄色い、やたらとすっぱいジャム。
　――ななかまどの実をつぶしたジャムだって。
　――小さい瓶に詰めてあったっけ。
　忘れていたかったものに触れてしまった。振り切るように漕いだ。
　児童館は、あとひとつ小路を左に曲がるとすぐだ。
　榎本は、車道から車が来ないのを確かめて、一気に私を抜き去った。目の前を、尻突き出して走っていた。

　予想どおりというか、なんと言おうか。
　児童館は私たちを受け入れてくれなかった。
　児童館を使うことができるのは、小学生以下の「児童」のみ。中学生になると「生徒」と呼び名が変わるという理由でだった。遊び道具の貸し出しなどもあっさりと断られた。
「私たちも年食ったのね」
　自転車の鍵をはずした。出発準備をしながら私は榎本を見上げ、ため息をついた。
「制服着ていたから、なおさらだろ」
「さて、これからどこへ行こうか」
　すぐに代わりになりそうな場所が思い浮かばなかった。榎本からもらったシガレットチョコを口にしても、かえって空腹が刺激されるだけだった。今だったらきっと、ファーストフード店に入って、一番安いセットメニューを選んだだろう。当時の私にとって、三百円以上の出費は、『贅沢』だった。赤字である。
　榎本はそれ以上言わずに私を見下ろしていた。穏やかに、でも帰りたくないといった風に。何か物足りないことだけだった。
「どこでもいいよ」
「じゃあ、俺の家に来ないか」
「それもそうね」

　私はうなずいた。何度も通った道だった。
「そうだね、私も暇だし」
　榎本の家は両親ともに夜遅くまで帰ってこなかった。共働きしていたらしい。その点気楽に遊びにいける場所だった。

　児童館で初めて榎本に話しかけたとき、あいつは戸惑いながらも二言三言ことばを返してくれた。
　本ばかり読んでいて、あまりからだを動かすようなことはしたがらなかった。それでも無理やりさそって、私は卓球のペアを組んだ。相手が足りなかったせいだった。
　六年になってから青潟市外より転入してきたこと。この辺の友達とは話が合わないこと。教科書の進度が異なるため、とまどっていたこと。そして塾に通って友達を作っていたこと。塾に行くのは、青大附中に合格したいがためだということ。
　私の学校に転校してきたならば、虫の好かない陰気な『優等生』として、相手にしていなかっただろう。どうして児童館の中だとこういう奴を平気で受け入れてしまえるのかよくわからなかった。あまり深いことは考えなかった。私は自分のことを榎本に話すことだけで精一杯だった。
　青大附中という単語が頭の中にこびりつき始めたのは、たぶんこの頃だ。
　親からはやんわりと、「行きたいのなら」と水を向けられていた。今の学校以外の友達と出会いたいと思っていたから、問題集を読む程度の準備はしていた。でも本気で、『青大附中に行きたい！』と考えるようになったのは、榎本のことばが染み込んできたからだった。
「青大附中ってさ、すごいんだぞ。この辺の学校みたく、石炭ストーブじゃないんだって。みんな電気であったまるようになっているんだってさ。授業の途中では映画も見られるし、理科の実験用にサルも飼っているんだぞ」
「サルって、何のために？解剖するの？」
「知らないけど、いるんだってさ」
　榎本と話すたび、青大附中でブレザー制服を着て走り回っている自分の姿がくっきりと浮かび上がってきた。もっと気の合う友達と授業中手紙書きしているような、毎日笑いが止まらないような。そんな楽しい日々。附中に入学した暁には、まず理科の実験用サルが本当に飼育されているかどうかを確認しようと決めていた。

　一月のある日、榎本の紹介で参加した『青大附中模擬試験』の帰り道、また児童館へ立ち寄った。いつものように卓球をして遊んだ後、榎本はめずらしく私を、学区境界線である踏切まで送ってくれた。踏み切りが上がる直前に、小さなビンをかばんに滑り込ませ、何も言わずに背を向けた。
　薄黄色で、つぶつぶしているジャムらしきものだった。
　前に榎本が『スコーン』というケーキの硬くなったような丸いお菓子を持ってきてくれた。その時私は「こんな味のないお菓子って、まずくていやよ」とむくれてしまった。。
　手作りジャムのラベルには小さく、『ななかまど』と書いてあった。

七回かまどに入れても煮えなかったという言い伝えのある樹木で、青潟の街ではしょっちゅう見受けられるものだった。小豆大の橙がかった赤い実がにぎりこぶしひとつの大きさに固まってぶら下がり、細かく揺れていた。あれは観賞用の実と聞いていた。
すっぱさの方が強かったけれど、私は誰にも見せず、少しずつなめた。自分用のスプーンをこっそり用意し、姉、妹の目を盗んでなめた。誰にも見せたくなかった。
榎本への答えだった。
榎本が同じ小学校だったら。
何度もそれを考えた。多分付き合っていたかも知れなかった。
同時に、私は榎本に会うのを避け始めた。
どうしてだろう。好きだったら好きといって付き合えばよかったのに。私はあの頃の気持がまだわからなかった。
別に貴史になら話してもかまわないはずだった。貴史は難しいことを考えないで友達でいられる大切な相手だった。きっと、悩んでいた私に鋭い答えを出してくれただろう。でも、私は最後まで、榎本の存在を気取らせないように心がけた。貴史に何気なく、青大附中入試を受けると告げた。

榎本の部屋は小学校時代に比べると少し、黒っぽい色調が増えていた。おもちゃなどは少なかった。前よりも車雑誌などが多くなっていた。写真集のようにつるつるした、紙質のカタログ。高校生が読むような週刊誌。表紙がショートカットのアイドル歌手。実にスカート姿のまま、チアガールファッションでぼんぼんを振り上げている。
本ばかり読んでいた榎本なのに、なぜか、難い本が一冊も見当たらなかった。みんな雑誌に埋め尽くされていた。
チャーハンをたっぷり盛り付け、電子レンジで暖め、二人分の取り皿とちりれんげを用意してくれた。自分の机の上にどすんと置いた。お茶はウーロンだった。
中華風のもてなしを意識しているのかもしれなかった。
矢も立てもたまらず、私は立ったままちりれんげと取り皿を手にした。机を見下ろす格好で、チャーハンを移しかえては食べ、食べてはすくい、を繰り返した。
「本当に腹へっていたんだな、清坂」
「附中まで自転車で通っているんだもん。大変なんだから」
すべて食べ終えた後、ようやく床に座り込んだ。胃袋が満足すると、だんだん眠くなってきた。榎本の本棚にもたれ、脚を伸ばしてふうっと息をついた。お盆にウーロン茶を載せ、榎本は私の隣にセットしてくれた。
「あのさ、清坂」
しばらく無言で満腹感に浸っていた私は、榎本のことばを何気なく聴いていた。
「附属って面白いか？」
「そりゃあ、いいよ。私なりに『青春を謳歌』しているつもりだけど」
「あ、そういえば入試の時、『謳歌』って出たよな」

「私、しっかり書いたよ」
「俺さあ、『謳歌』と書けなくて『欧化』って書いてさあ。たぶん、あれで落ちたと思うんだ」
「社会の『欧化政策』と間違えたんだ！　思いっきりまぬけよね」
　机の上にメモ代わりにしているレポート用紙に大きく『欧化』と書き、榎本はシャープペンシルを取り出した。
「でも、もし受かっていたら、清坂と一緒だったんだろうなって」
　いまさら聞かなくても、何度も考えたことだった。
「不運だよな」
「そう？」
　なんどか、そう思ったこともあった。でもずっと前のことだ。かえってよかったのかもしれないと。
　もしあの時、榎本と付き合っていたら、そして同じ附中に通っていたら。
　たぶん私は立村くんを意識しないでいられただろう。
　時と場所の差は、簡単に越えられるものではない。
「あんたは、今、誰か付き合っている人とかいないの」
「お前の方こそいるのか」
「いないとしか言いようないけどね。それより、あんたに聞いているのよ」
「さあ、な」
　口篭もる榎本。この調子だといそうなけはいあり。ことばが途切れるわずかの間、私はちょっとだけ落胆した。
　――一度は私のことを好きだと思ってくれたのに、あっさりと他の子に乗り替えているのかな。ちょっとしゃく。

「清坂がもし、一緒だったらな、俺な、どうなっていただろう」
「どうもなっていないに決まっているでしょうが」
「すること、していたかなあ」
　隣で足を伸ばす榎本は何も言わずにうつむいた。
　まなざしが、長い前髪で少し隠れた。
　ちっ、ちっ、とことばをまさぐるかのように舌先で音を立てていた。うつむいたまま、さっき書いた『欧化』の文字を指先ではじいていた。鉛筆書きのそれを数回なぞり、歯を食いしばっていた。硬くなったパンをかみ締めているようだった。
　心臓が勝手にがんがんなり始めた。身体の中は熱くほてってくるのに、なぜか寒気が走った。
　――これって、前の榎本と違うよ。
　――こんな顔して私の方を見なかったよね。

「清坂って、今見て思ったけど、『榛名七草（はるのななくさ）』に似ているって言われないか」

　もう一度、榎本は私の方を見て、アイドル歌手の名前を出した。
　表情を読み取るのが難しい。
「たまに言われるよ。髪を切ってから特にね。もしかして榎本って、ファンなの？」
　そこまで言って、さっき見た高校生雑誌を探した。確かあの表紙は『榛名七草』だったはずだ。私に似ているといわれているけれども、売り出しイメージはセクシー路線で決めている『グラビアアイドル』系だった。
「でも、あまり、好きじゃないな。雰囲気が正反対だもん」
「そうかなあ、そっくりだと思うけどな」
　雑誌を手にしてみた。見出しだけをさらっと流し読みした。
『セクシーショット・榛名七草・君は僕の女神様』
　すぐに閉じて、榎本の手に押し付けた。
「なんか、こういう本に載っているのがいや。それよりも、ちょっと窓開けない？　暑くなっちゃった」
　私は窓枠に手をかけた。手が自然と震えた。
「あ、ああ、もう少しなにか食べ物持ってくる」
　あわてて榎本も立ち上がった。生ぬるい空気が私の前を通り過ぎ、戸口で消えていった。
　開けっ放しにしていやに寒かった。でも榎本も閉めなかった。私もあえてなにもしなかった。

　榎本の戻ってくる前に、私はもう一度例の雑誌を開き、榛名七草のセクシーショットを再確認した。
　体育座りでお尻が痛くなった時の格好。膝と膝との間を緩め、若草色の水着姿で疲れたように口を半開きにしている。
　――こんな格好、私は絶対にするもんか。
　私に『榛名七草』のなまめかしいポーズを重ねているのだとしたら。決して榎本を許さない。聞きたいとも思わなかった。
　なぜ、私を真正面から見つめようとしなかったのだろう。
　――あいつ、この写真私に似ていると思って、どんな顔で見ているんだろう。変な想像なんてしてないよね。まだ一年も経っていないのに、いきなり何考えているんだろう。まさか、私のことをそういう目で見ていたなんてこと。
　榎本が菓子皿に『柿の種』をたっぷり盛って運んできた。ピーナッツの入っていない、辛みの強いタイプだった。私は『榛野七草』の載った雑誌をひっくり返し、『柿の種』を片手に少しずつ受け、食べ始めた。窓から吹きぬける風を正面に受け、舌先にぴりぴり走る刺激を感じた。ずっと榎本の顔を見ずにほおばりつづけていた。
　――あの目できっと、私に似ているっていう『榛野七草』セクシーショットを見つめ、『がまんしている』の？
　――貴史が言っていたこと、それだよね。

家に着いたのは五時過ぎだった。それまでの間、私は『榛名七草』のグラビアと一緒にいたということになる。
また、榎本はあの写真で、ひとり、想像するのだろうか。
『榛名七草』の体育座り写真で、榎本は私の顔を思い浮かべるのだろうか。
思わずむかむかしてきた。私は口を押さえてしばらくしゃがみこんでいた。

すでにこの頃、私は「中学生男子特有の生理的現象」について、保健体育で習う以上のことを知っていた。
姉がすでに詳しいことを知っていたというのもあったし、学校ではこずえがその手の本を持ってきて読ませてくれた。
大抵雑誌で、具体的な内容については袋とじになっていた。『男の子のひそかな楽しみ』について詳しく説明してあるページを耽読した。
もっとも男子の生理的現象はわからないことが多かったので、貴史になにげなく、
「ねえねえ、裸の写真とか見ている時って、何考えているの？『男の子のひそかなる楽しみ』について教えてよ」
と質問したりもした。
「よくもま、男にそんなこと聞けるよな」
とあきれられながらも、
「先輩が言うには、『脳天がはじけるような感覚』なんだってさ」
という証言をしてくれた。
「肝心のあんたはそういうこと、うちでしているの？」
と聞いた時はさすがにけりを入れられそうになってしまい、うやむやにされた。
あれは思い当たる節があるに違いない。
もっとも私だって小学校六年の時、『性教育ビデオ』を見せられた直後、奴に質問されたからおあいこだ。
「美里、「生理」って、鼻血と同じ血が出てくるって本当か？」
さすがに最初はぎょっとした。他の女子のように
「やあだ、あんたすけべだよね。最低」
とこそこそささやきあうのは嫌だった。
「百科事典で調べてみよっか」
次の日、貴史とふたり、図書館の辞典を開いてじっくり読みふけった。

『男の子のひそかな楽しみ』に関する詳しい描写を読んでいるうちに、私は気分が悪くなり、次の時間、給食が食べられなかった。保健室でちょっとだけ横になったことを覚えている。その時の献立は確か、クリームシチューだった。
『フィニッシュの時、噴き出す白い液体が』とかいうくだりまで読むと、もう駄目だった。ご丁寧にイラストまで載っていた。目にそれがよみがえってきてしまった。生々しい指先の描き方が

リアルすぎる。
「美里はやらしいやらしいって言うけどな、しょうがねえだろ。やったことのない奴なんていやしねえよ。それこそ、立村だって男だから、経験ないとは言わないだろうし」
「見たわけじゃないんでしょ。人のことを勝手に想像するのはやめなさいよ」
　貴史が何気なく口にした言葉。一番恐れていたことだった。どこかで立村くんを例外として考えている自分を見つけてしまった。
　まさか、立村くんにそんなことを聞いたことはなかった。怖いもの知らずのこずえが弟をからかうのりでこの手の質問をたまに浴びせていることがあるとは聞いていた。どんな答えを返してくれたのかは聞いていなかった。

　榎本もそういうことを考えたことはない。
　そう思いたかった。
　なのに、部屋で見たのは『榛名七草』のセクシーショットだ。
　しかも榎本は私と『榛名七草』を重ね合わせているときた。
　写真を見た時のまなざしを私は受け入れられなかった。口を尖らせ、目はうつろだった。貴史から聞いた『男の子のひそかなたのしみ』はそこから来ているのでは。
　榎本のそういうことをしているポーズが夢うつつに浮かび、私はその夜、なかなか寝付けなかった。

　児童館で遊んでいたあの頃ならば、いくらでも無邪気におしゃべりすることができたのに。
「フィニッシュを迎え、感極まっている」ような男子の形に重なってしまった。榎本も、学校で見る貴史のまなざしも、立村くんの凛とした姿も。

その四　ふたりっきりの午後

「美里の方だろ、俺ん家に来たがっていたのは」
　わざわざ家に出向いてくるくらいだから、貴史も私に話したいことがあたのだろう。約束よりも早い日曜日の朝十時、私を迎えに現われた。
　薄っぺらい黒のウインドブレーカーで地味に決めている。髪の毛だけやたらとべたついていた。よくみるとポマードを塗っている。匂いが鼻についた。近づかれるのがうっとおしかった。どうせ髪を洗えば取れる代物なのだろうけれど。
　貴史のことを『たあちゃん』と呼んでひいきにしているうちの親には、その姿を見せたくなかった。
　まだ寝ている両親と姉、妹を起こさないように私はしのび足で外に出た。
「私、やっぱりいい」
「なんだよ、お前があんまりしつこかったから、立村に頼んでやったんだぞ」
「昨日、私だって別の日でいいって言ったでしょうが」
「立村に確認したら、かまわないって言ったから、昨日電話したんだぞ。美里いったい、どこ行っていたんだ？　確実にいるのは何時頃かっておばさんに聞いたら『朝なら大丈夫だ』って言われたからわざわざ迎えにきてやったのに、何様のつもりだよ」
　結局榎本の家でごろごろしていたため、家に帰ったのは五時過ぎだった。貴史から電話があったとは聞いた。でもどうしても、受話器を取る気になれず、親に怒鳴られながらもそのまま寝てしまったのだった。
　通りすがりの人は『けったいな』と言いたげな目で私たちを振り返っていった。この時間帯は、意外と人通りがなく、近所の人しか通らない。私と貴史のことをよく知っているおばさんたちばかりだった。なおさら恥ずかしい。あとで親に『お宅の美里ちゃんと羽飛さんちの貴史くん、いつも仲がいいわね』と言いつけられるだろう。貴史のとんがった髪型と、私の着ている灰色のジャンバースカート。どちらもあまり、見られたくなかった。特に私は髪の寝癖が直っていない状態だった。みっともないったらありゃしなかった。
「だって、変じゃない」
「なにがさ」
「貴史の部屋なんてさ」
「よくわからねえ奴。俺の部屋のどこが変なんだよ」
　貴史もさっぱりわからないという風に聞いてきた。
　説明できず、悔しかった。惨めだった。
「立村も、美里とならいいって言っていたしさ。それにあんまり、他の奴には知られたくないことだからなあ。立村に知られてまずいってことじゃないんだろ」
「あんたの部屋に行くわけ？」

「それが普通じゃねえの。なんなら美里の家でもいいけど、立村は連れて行けねえよ」
「違うってば。貴史なんにもわかっていない」
　わかるわけがなかった。前の日に榎本が見せたまなざしを貴史は知らない。今の私の心理状態を理解させようたって無理だ。そんなことは百も承知なのに、私はいつも必要以上の千里眼をもとめてきた。
「何がわかってねえんだよ」
「立村くんとは関係ないけど」
「じゃあ、今、その用件言っちまえよ。そうすりゃ、俺だって無理に美里を引きずりこまなくたっていいし」
　貴史はいらだち始めた。男って短気だから困る。私だって本当はもっと落ち着いた場所で、煮詰めるように聞き出したかった。
　うつむきながら貴史の足元を見つめた。
　こずえと約束したことをそのまま聞いた。
「どうして、あんなにまじめになるのよ。あのノート、絶対変よ」
「あのノートって、班ノートのことかよ」
「まじめなことを大まじめに話す奴なんて最低よね、って、女子の間で話題沸騰中」
「美里、お前知らないわけじゃないんだろ」
「なにをさ」
　立村くんは、私に教えたことを貴史に話していないはずだった。
「立村も白状した。立村から聞いたんだろ。その上で、この前二人で相談して、今度の『裏･ノート』計画を立て直そうと考えているところなんだ。美里も混ぜてもいいって思ったしさ。あいつも、口が軽くてお前に打ち明けたわけじゃなさそうだし。俺もまあ、いろいろな要素を考慮して、美里を仲間に引き入れようと思ったわけ」

　――ふたりっきりの秘密のはずだったのに！
　――貴史ってば、何考えているのよ！
　――何もわかんないくせに！
　――何が『裏・ノート』計画の建て直しよ！
　――それに……立村くんも立村くんよ。
　――私、誰にも言わないって言ったでしょ！　なのに、大嫌い！

「な、だからお前が来ないとちょっとまずいんだ。立村もさ、美里以外の女では駄目みたいだしさ、な」
　貴史が私をなだめだした。いつもこうやって私は貴史の要求を飲まされてしまう。
　こっそり立村くんからノートを見せてもらうのが楽しみだったのに、結局、貴史が割り込む。私は「男ったらし」と誤解される。ああいやだ。私と貴史の掛け合い漫才に終わってしまう。
　ため息をめいっぱいした後、私はうなだれた。

「わかったわよ。昼の一時に行けばいいのね」
「絶対、一時だぞ。遅れたら殺す」
　貴史が後ろを向いたとき、ポマードの匂いが漂い、胸悪くなった。ごほんと咳が出た。風邪の前触れか、咽の奥がかすかにじんと痛んだ。

「みさっちゃん、お久しぶり！　貴史、みさっちゃんだよ！」
　貴史のお姉さんはこずえに良く似たタイプだった。幼稚園の頃からうちの姉、妹と一緒に遊んだりしていた。気兼ねなくおしゃべりできる人だ。小学校四年ころ、貴史と険悪な仲になった時も、お姉さんとは仲良く遊んでいたものだった。二階の自室にいる貴史に、階段の下から声を掛けてくれた。
「それでは、おじゃまします」
　私は笑顔で挨拶して、奥に立っている貴史のお母さんに頭を下げた。
「みさっちゃん、貴史、学校でいろいろとうるさくて大変でしょう。お願いね」
なんだか勘違いされている節がなきにしもあらずだ。
「いえ、そんなことないです」
　こういう風にはきはき答えられる自分が、なんだか他人のようだった。
　貴史の出迎えはなかった。いつもなら降りてきてくれるのだけど、この日は、
「じゃあ、あがってこいよ」
　だけだった。
　何様のつもりなんだろうか。むっときた。
「もうすっかり、彼氏気取りなんだからねえ、みさっちゃん」
　お母さんに聞こえないよう、お姉さんは私にささやいた。
　――そういうんじゃないんだってば！
　私は言葉を飲み込んで、貴史の部屋に続く階段を昇っていった。人ひとり通ることのできるだけの幅の、木の階段だった。きしんでいる音がうるさかった。
　突き当たりのドアをノックすると、すぐに貴史が顔を出した。
　青無地のトレーナーに濃い目のジーンズ姿だった。朝の格好とは違い、髪の毛は染めていなかった。
「あれ、まともな格好だね」
「うるせえ、急いで入れ」
　貴史は私以外誰もいないことを確かめると、入るだけの幅を開けてくれた。すぐに閉め、いきなり鍵を書けた。
「いつから鍵なんてつけたのよ」
「最近、姉ちゃんや母ちゃんが部屋をかき回しにくるから、自衛が必要なんだ」
　ノブのところに掛け金のようなものを打ち付けて、ひっかける形だった。だから取り外そうとすれば簡単だろう。貴史のお手製であることは確かだった。
「立村くんはまだなの？」

「あいつは一時半に来る」
「三十分もずれてるじゃない！　私だけなんで一時なのさ！」
「たかが三十分だろうが」
「私、立村くん迎えに行ってくる」
「俺の家にあいつ来たことあるんだ。迷わねえよ。それより、どうして俺のことをそう避けるんだ？　お目当ての立村がきていないっていうのを差し引いても」
「そういうんじゃない、なに勘違いしているのよ。あんたが『一時に来ないと殺す』なんていうから、きちんと時間守ってきたのに、扱いが違うじゃない！」
　鍵を見てしまったせいだった。完全に閉ざされた空間。昨日の昼間に榎本と一緒に過ごしたことを思い出し、そこから少しずつ思い出したくないものを連想している私。グラビア雑誌の仇っぽい表情、それが私に似ているらしいということ。榎本が私に似たアイドル歌手を好んで『見て』いるということ。頭の中がぐちゃぐちゃした。

　でも、やっぱりここは貴史の部屋だった。
　幼稚園の頃から見慣れていた、茶色の木目が浮き出している。ベニヤ板の壁を見つめているうちに、私は少しずつ思い出していた。幼い頃、ここで過ごした記憶をだった。
　小学校に通っていた頃は、貴史と一緒に蒲団を並べて夜中までしゃべったこともあった。最近も、貴史の入手した数学問題集の『教師用解答』を丸写しさせてもらった。
　私はふうっと息をついて、もう一度部屋を見渡した。
　蒲団はおしいれにしまいこまれている。六畳間で、机と本棚くらいしか置いていないから、結構広い。本棚には少年漫画の単行本がびっしり埋まっていた。遠めから見て、そこだけは調和した色合いだった。上の一段に詰め込まれた参考書やら、世界名作全集なんかが紛れ込んでいるところは、汚らしい。本と棚との隙間に立てきれなかった分詰め込んだり、帯を破いたままにしておいたり。
　――私が貴史の彼女だったら、まずこの本棚をなんとかするだろうな。

　私は臨時に用意された折り畳みテーブルに両手を置いて、貴史をはったと見つめた。好きを見せないように意識しながら、口を切った。
「まあいいわ。それでは立村くんがいないうちに、聞きたいことを聞くね。それとも、うちのクラスの女子関係情報を仕入れたいの？」
「お前なに気合いれてにらみつけるんだ？」
「にらんでなんかないわよ。真剣に聞きたいからそう言っているだけ」
「お前の聞きたいことって、あの『班ノート』のことだろ。それはあとで立村が説明してくれると思うから、あとにしてもいいだろ」
「貴史の方が先決ってことね」
「美里にとりあえず確認したいことがあったから、あえて三十分前に呼び出したというわけ」
　窓はカーテンごと開いたままだった。風の吹き付ける音が秋の答え。枯葉を窓辺に運び、部屋

に舞い降りている。電気ストーブは焚かれていた。寒くなったから閉めてほしかった。貴史もこのままじゃあ風邪引くと思ったのだろう。すっと立ち上がり、窓をきっちり閉めて、しかしカーテンは開けたまま戻ってきた。
「立村くん抜きで、話さなくちゃだめなことなのね」
「たぶん、こんなことしているってあいつ知ったら、絶交されるだろうな」
　絶交されてしまうかもしれないほど、すごいことを話すつもりなのか。
　立村くんに関することだったら、一言ももらさず聞いておきたかった。
　次に貴史は班ノートをかばんから抜いた。だいたいＡ５サイズの大きさだった。左角に黒い綴じ紐を通してあった。貴史は真中あたりのページをめくって見せた。
　十月二十五日。私が当番だった日の内容が記されていた。

「班ノート」　十月二十五日　清坂美里

　私はどうだっていいんだけど、今日学校に来る途中で、とある人の噂話を聞いてしまいました。
　雨が降っていたんで、バスで来たのね。そしたら、学生服の男子（当然、公立）が数人、後ろでぎゃあぎゃあわめいているのね。
「おい、●●（あえて伏せ字にします）が附属行っているんだってな」
「あいつらなら、いじめられて当然だぜ」
「でも、うまくいっているみたいだって、△△が言っていたぜ」
「あいつのことだから、猫かぶっているんだろ。それに、附属の奴ってぼっちゃんぼっちゃんした奴が多いから、あいつの同類ばかりうじゃうじゃしているんでないの」
「学校際の時、乗り込んでばらしてやっかな」
　とかなんとか。まあ私はいいんですけど。
　ちなみに●●とは、我がクラスの男子であることを告白しておきましょう。武士の情けで、こればかりは私の胸にしまっておきますわ。
　ということで、私はやっぱり不真面目に書きました。
　先生、ごめんあそばせ。

「なんか問題あるの？」
　よく意味がわからなかった。
「て、いうかだな。あいつがすげえ、気にしているんだ」
「立村くんがなんで？　私、この中に立村くんの『り』の字も出していないよ」
「つまり、伏せ字の名前が自分なんじゃないかって言いたいみたいなんだ」
「どうしてよ？」
　何度も読み返し、いらいらしながら貴史をつついた。

「これはね、言いたくないけど、水口くんのことよ。たしかになあって納得してしまったけどね」
「入学式の時に、やたら親が張り付いていると思ったけどなあ。そりゃ、そういう過去があったら、心配にもなるわな」
　水口くんとは、頭の回転こそべらぼうに速いのにネクタイを一人で結べない、少々過保護気味の同級生だった。入学式の日にお母さんらしき人がずっとはりついていたのを覚えている。貴史とふたりで様子をみて唖然としたものだった。
「そっか、それならいいんだがな」
　貴史はしばらく黙り込んだ。私の書いた内容と、直接関係するわけではないらしいが、まだひっかかるものがあるようだった。
「それにしても変だね。立村くん。実名でなにからなにまで書かないとだめなのかなあ。そんなどうでもいいことを気にするなんて、神経細かすぎるんじゃないの」
「たぶん、あいつ、水口に近い過去があるんだと思う」
　いつもなら口にしない、貴史のやわらかい言葉が耳に響いた。私は戸惑い、何かを言おうとした、でも何もいえなかった。
「美里も知っているだろ、ある程度は」
「両親が離婚して、お父さんに引き取られていることでそ。それくらいじゃない。立村くんも自分でじゃべっていたじゃない。でも、それは自分で巻いた種じゃないんだから。たまたま巻き込まれただけでしょ。それと暗い過去とどうつながるのよ」
　まだ私の頭では、貴史の考えていることがわからなかった。
「『裏・ノート』にかけないようなことかもしれないぞ。ノートでおちょくれるような内容のものだったら、立村も平気で口に出せるんだろうが、俺の見たところによると」
「おちょくれない内容って、たとえばなにさ」
「たとえば――万引きとか」
「まさか！」
「たとえばだぞ、たとえば。あと、家出とか、シンナーとか、薬とか、タバコとかで警察のお世話になったとか」
「まさか、そんなことしていてばれていたら、絶対青大附中になんかこられなかったよ。うちの学校、内申書見るのよ。あんたと私が受かった時、先生連中は最初誰も信じなかったでしょ。あとで聞いたけど、私たちの内申書って相当きつい内容だったらしいよ。菱本先生が読んでいるのをこの前覗いちゃった。『清坂、どうして小学の時、あれだけはめはずしていたんだ？相当面白くなかったらしいなあ』って。結局警察沙汰がなかったし、成績もまずまずだったから受かったらしいけれど。まさか、立村くんが私やあんたと同じくらいばかやっていたとは思えないよ」
「俺もまさか、って思っている。あと思いつくのが、女子となにかしたってことかなあ。立村って、なんとなく女子受けしそうな感じだから、小学の頃からそっち方面の経験は早かったんじゃないかって、思うんだ」
　恥ずかしい感覚がよみがえってしまった。榎本の部屋に一瞬だけスリップしてしまった、変な

気持だった。
「そんなわけないじゃない！　あんた自分で何言っているかわかっているの」
　貴史と榎本との表情が重なって見えた。すぐに消えた。貴史はけろっとした顔でまぜっかえした。
「だから、まさかといっているだろ。冗談だよ冗談」
「冗談でそんなこと言わないでよ！　このすけべったらし！」
「変な想像する美里の方がずっとすけべなくせに」
　血が冷めた。貴史と話していると私だけがばかみたいだった。一言一言、貴史の言葉は自然な雰囲気で飛び出してきた。決して榎本のようにいきなり、値踏みするようなまなざしをぶつけることなく、ただ不思議そうな顔をするだけの貴史。こんな奴を信じないわけがないのに。
　榎本のつぶやいていた
「すること、していたかなあ」
という言葉を忘れさせてほしかった。
　『榛野七草』似の私を、グラビアに向けるようなまなざしで射た、榎本のことを遠くに追いやりたかった。
「まあいいわ、続けて」
「怒るなよ。でもこれからは本当のことを言うからな」
　貴史は鍵をはずして、ドアの隙間から人のけはいがないことを確認した。戸口にケーキとマグカップが二人分、用意されていた。たぶん、お母さんかお姉さんが気を使っておいていってくれたのだろう。中に運んだ後、もう一度貴史は留め金をきちんとかけた。
「美里はチーズケーキが好きだからってうちの母ちゃんが選んできたんだ。俺がこういうの嫌いだっていうのを知っていて、平気で用意するんだからなあ」
「でも、食べられないわけじゃないでしょが。いらないんだったら、私もらうよ」
「無理して食えないことはないってだけだ。本当に美里って、食べものくれる奴には誰にでもなつくタイプだろ。餌付けされているって感じだぜ。」
　貴史は黒、私は赤。おそろいのマグカップに注がれたココアを少しずつすすった。いつも私が遊びに行くと、貴史のお母さんは私専用のマグカップを用意してくれるのだった。私だけではない。姉、妹用のもあるけれど。
　私の好みはすでにわかっているからもてなしやすいと、貴史のお母さんは話していたらしかった。
　貴史はケーキに手をつけず、私にもそうするよう目で伝えた。しかたがない。カップをテーブルにおき、貴史が話し出すのを待った、音量をいきなり落として語り始めた時、私は思わず上体を貴史の方へ傾けた。そばに寄らなくては聞こえないほど、小さい声だった。

「土曜の昼、俺、立村の家に行ったんだ。いやあ、広い部屋だった。だいたい俺の部屋の二倍はあると思うな。で、床から天井まである本棚が、壁一面をざーっと埋めているんだ。向かい側は洋服ダンスで、それまたすごい量の服が詰まっていた。あとはベッドと机くらいだったからやた

らと広く感じるけど、ああいう部屋にすんでいるやつは、いままで俺知らねえよ」
　貴史の部屋の二倍、ということは私と姉の部屋をくっつけたよりも広いということだ。洋服ダンスの馬鹿でかさは、三人姉妹の真中だった私には想像できなくもない。でも、立村くんは一人っ子のはずだった。そんなに大きなたんすが必要なほど、衣装持ちなのだろうか。私は貴史の話を遮って尋ねた。
「立村くんの服ばっかりなのかなあ」
「らしい。立村がコートを取り出したとき、ちらっと見たけど、いかにもあいつらしい服がびっしりかかっていた。第一、コートだけでも十着くらいはあったんじゃないかなあ」
「私とお姉ちゃんの分を合わせても、そんなにないよ」
「で、そのコートがすごいんだ。戦争映画に出てくる、高校生が着ていたマントみたいなのがあるだろ、とんびだったか」
　――とんびのマント。
　大正、昭和の高校生が学生服の上にはおったといわれる、膝下までくる真っ黒いコートのことだろう。両手を広げると、とんびというよりもムササビの羽に見える代物だった。
「うわあ、暑苦しそう！　さすがに立村くん、学校には着てこないよね」
「いや、それがさ、意外としっくりくるんだ。めったに着ないとは言っていたけどな。今日は絶対、それ着てこいと命令してきた」
「どうしよう、私それ見たら、笑いが止まらないかもしれない」
立村くんの私服姿は、あまり見たことがなかった。あえていえば、評議委員会合宿の時、水色のチャイニーズカラーシャツを、ボタンはずさずきちんと着ていたことくらいだろうか。そろそろ十一月だから、はおりものを用意してもおかしくない時期だ。スタジアムジャンバー姿が目立ったが、立村くんは薄手の白いジャケットで来ることが多かった。
　風が強いから、そろそろ厚いコートが欲しい気持はわからなくもない。
「楽しみ、立村くんのとんびコート姿って、見てみたい」
「とにかく、あいつのうちはすごいぞ。もっと驚いたのが本棚。どんな本が並んでいると思うか？美里」
　いやらしいグラビア雑誌などはないと、信じたかった。
「ううんと『世界の名作』とか、音楽雑誌とか。立村くん、古い洋楽好きみたいだしね」
「半分は当たっている。そうなんだ、そういう本だけなんだ」
「イメージどおりかあ」
　しばらく貴史は自分の本棚を見つめて、一冊、少年漫画の単行本を取り出した。最近テレビドラマ化された人気学園SF漫画だった。私も小学校の頃、貴史から貸してもらって読んでいた。
「『砂のマレイ』、まだ原作と同じままだよね。いつくらいからオリジナルになるのかな」
　黙ったまま、貴史はテーブルの上に本を置いた。
「立村、知らなかったんだよ。『砂のマレイ』を」
「ＳＦ嫌いだったっけ？」
「いやそんなんじゃない」

　本をテーブルに立て、貴史はゆっくりと、
「立村の本棚には、漫画本が一冊もなかったんだ」
　私にはそのことが何を意味するのかわからなかった。
　貴史はさらに続けた。
「全部、『世界の文学』とかいう、図書館に並んでいるような全集と、文学関係の文庫本がほとんどだったんだ。字が小さくて、題名ばかりは有名なもんばかり。ずらーっと並んでいた。壁一面にだぞ。なのに、漫画とか、俺たちの読んでいるような本が一冊もないんだ。立村が言うには、『漫画を読むとばかになる』と言われ続けてきたらしい。思い当たる節は確かにあるよな。立村、雑誌とかマンガとか、テレビネタにどうしようもなくうといところがあったしな。謎が解けたぜ」
　隣に並んでいる本棚の内容をざあっと見直した後、私は頭の中で立村くんの部屋をイメージしてみようと試みた。十畳前後の洋室で、黒っぽいたんすが右壁一面、向かいの壁には本棚がこれまた一面を埋めているのだろう。『レ・ミゼラブル』『罪と罰』『武器よさらば』など。読んだことはなかったけれど、文学全集には納められているような本。びっしりつ収められている光景。信じられない。
「でもまさか、読んでいるわけ」
「読んでいるらしい。自分で本を選べるようになったのは、附中に受かってからだってさ。それまで、本は自分の家でしか読めなかったらしいんだ」
「淋しい生活なのね。立村くんって」
「附中受かって最初にしたのは、まずテレビを一晩中つけっぱなしにしてみたことらしいぞ。相当、娯楽に飢えていたんだなあ」
　ようやく貴史がケーキに手をつけた。あわせて私も真中からばっさりと切り込み、一口でほおばった。
「食い物があれば、お前、幸せな顔しているもんなあ」
「おいしいよ。それより続き続き」
　口に物が入った状態で答えながら、私は話の続きを促すべく、うなずいた。

「確かに、立村は変わった奴だと思うんだ。今まで遊んでいた奴だと、テレビとかそれこそ漫画とか、そういった話で盛り上がっていたんだけど、立村だとだめなんだ。あいつはそういう話になると、ただ黙って聴いている。俺たちの話題に合わせようともしない代わり、邪魔もしないって感じなんだ」
「そのわりには、いつもつるんでいるよね」
「やはりそう見えるか、美里にも」
　言葉を半分言いかけながら貴史はうなずいた。私もつられた。
　不思議な気持だった。なんで立村くんが貴史のような開けっぴろげな奴と仲良くしているのかが、謎だった。何度も聞こうと思った。でも私がかくしている、立村くんへの心を見抜かれてしまうのがいやで、ずっと質問を飲み込んでいた。

「文学全集を読んでいるような立村くんと、マンガばっかりの貴史とだと、なんだか沈黙が続きそうな気がするんだけど、そうでもなかったんでしょ。昨日は盛り上がったんでしょうね」
「あたり。結局帰ったのは六時過ぎ。立村の父さんが帰る直前までいたんだ」
「いったい何の話をしていたわけ？」
「美里が聞きたがっていることだよ。お前が書いた班ノートのこと」
　やっと話が振り出しに戻った。私は改めて姿勢を正した。
「立村が作ってくれたチャーハンを食いながら、しばらくは音楽のこととか、いろいろしゃべっていたんだ。あいつ、古い洋楽系のインストロメンタルしか聴かないって言っていたから。そのレコードをＢＧＭにして。A面が終わって針を戻してから、いきなり、立村が言いにくそうに切り出したんだ。美里が書いたとこ、たしか十月二十五日分、そこ開いて、伏せ字のところを指で指して、『清坂氏が立ち聞きしていたっていう連中、本品山中学の奴だろうか』って聞いてきたんだ」
　本品山中学は榎本の通っている学校でもあるし、立村くんが公立中学を選んでいたら通っていた可能性大のところでもある。学区がいろいろ複雑で、五校の小学校から生徒が集まってくるとは聞いていた。立村くんの住んでいる品山地区は、かなり本品山中学から遠いらしいが、それでも通わなくてはならないらしかった。
「それで、貴史はどう答えたの？」
「立村に思い当たる節があるのかって、聞き返しただけだってさ。表情は変わらなかったけれど、別の話の合間にちょくちょく、俺や美里が載るバスの路線を知りたがってきてさ。いかにも、こだわっている風だったんだ」
他人が動揺していることにすぐ気付くのはいつものことだった。すぐに問い詰めるのもお決まり通り。
「『どうしてそんなに、本品山にこだわるんだよ。さてはお前、暗い過去があるのかよ』と俺も聞き返したら、『なにばかなこと言っているんだ』とあしらわれてさ。それでもまだ、いろいろ尋ねてくるんだ。『清坂氏は品山に知り合いとかいるんだろうか』とか、『本品山は清坂氏の行動範囲内か』とか。でも肝心要のことは一言も口にしなかったな」
　立村くんは最後まで具体的内容について触れようとはしなかったらしい。貴史が繰り返し『知られたら困ることでもあるのか』と尋ねたそうだが、何も答えなかったという。
「無理やり聞き出そうとしたからよ。あんたってばかね」
「別に、立村がすけべなことしたとか、そういうことを期待したわけじゃないし、もし警察沙汰起こしていたら、とっくにばれていると思うんだ。だからまあ、万引くらいかなあ、と思ってさ」
「それってやっぱり警察沙汰よ」
　私は班ノートをぱらぱらめくりながらつぶやいた。万引ほどばかばかしいことはない、と思っていた。別にいい子ぶるわけではなかった。捕まってしまうスリルなんて、何にも気持ちよくないものだから。青大附中の連中だったら絶対そんなこと考えない。勝手に決め付けていた部分もなかったわけではない。

怖かったのは、立村くんがそういうことをしている可能性のあるなしだった。もし、立村くんが万引なり女子とすけべなことをしていたとしても、意外じゃないと思う自分がどこかにいた。立村くんだって、榎本と同じ中学一年の男子であることには変わりないのだから。
信じたくないと願う心は、痛みを伴うくらい激しくものを言っていた。
でも、好奇心だけが勝手に動き出した。もう知らん振りはできない。知らないでおけば、きっと立村くんを好きなままでいられるのに。波立たない片思いの海に、荒波を立てたい、とひそかに願っていた。
「もし、立村くんが万引きしていたとしたら、どうするのよ。今さら菱本先生に言いつけるつもり？」
「どうもしねえよ。ああ、そうだったのか、って、それくらい」
「簡単に済ませるわけじゃないんでしょ」
「そういわれればそうだけどさあ」
貴史だって、立村くんの過去を知りたがってくるくせに！
それをネタにして、なにかあくどいこと考えているんじゃない？
図星をさしてやりたかった。でも私自信、同じことを考えていた。私がもし男子で、貴史と同じ立場だったら、ありとあらゆる方法を講じて立村くんの隠していることを知ろうとしているだろう。秘密があることを知って、無視していられない性格だった。
「あのさ、美里」
急に貴史の表情が静まった。息を吸って、じろりと私をにらみつけた。私も条件反射で思いっきり目に力を入れてにらみかえした。見つめあったとたん、私の予想とは違った言葉が、飛び出した。
「俺とお前の長いつきあいに誓って答えろ」
「何よ、いきなり」
――十年以上、なら長い付き合いになるかもしれないな。
ぼんやりとそんなことを考えた。
「お前、立村に本気だろ」
ケーキを差したフォークを、テーブルの上に落としてしまた。からりと鈍い音がした。私は落ち着いているつもりだった。でも鼓動が高まり、頬が熱くほてってくるのは止められなかった。貴史に一言言い返すのがやっとだった。
「話が飛び過ぎているわよ！」
「無理やりくっつけるから安心しろって」
その時の私は貴史の目にもわかるほど、動揺していたのだろう。にらみつけていたその目をそらし、うつむき加減で笑みをもらし、再びまじめな表情にもどった。
小学校の頃にも、好きな男子がいたことにはいた。貴史と正反対の、おとなしそうな優等生タイプが好みだった。でも、口に出したことはほとんどなかった。貴史には勘付かれていたことが多かったから、よくこのようにつっこまれたものだった。大抵、貴史の部屋でお菓子を食べながらだった。白状したことはなかったけれども、貴史に問い詰められたとたん、気持が冷めていく

のをいつも感じていた。立村くんへの想いも、同じくしぼんでいくのだろうか。貴史がいなかったら、頬に手を触れて確認したかった。それができなかったから、私は答えるしかなかった。
「そうおもいたかったら、勝手にそう思えば」
　ぎりぎりの線で、言葉を選んだ。
「はっきり言ったって、かまわねえのに。変な奴」
　貴史の吐き出すような口調に、勝手に心臓がどきどきした。

　貴史がむっつりと黙り込んで、残りのケーキを食べ始めた。その隙に私は頭の中で要点を整理した。貴史の考えていることのひとつやふたつ、想像つかないわけではない。だてに十年以上、つるんでいるわけではないのだ。腕時計に目を走らせた。まだ時計盤の十の文字まで針が進んでいなかった。あと二十分待つことを想うと、どういう顔をしていいのかわからなかった。黙っていてもおかしくないように、フォークでケーキをほおばった。
「俺も、立村みたいな奴、好きだなあ。できれば、親友になりたいって奴だ。すごく変な話だけどさ、男同士でそう思える相手は、あいつがはじめてなんだよな」
　照れ隠しなのだろう。私の前に置いてあった班ノートを、ゆっくり取り上げ、ぺらぺらとめくった。私から目をそらしていた。私が立村くんを好きだというのと同じ重みを持った言葉らしかった。
　女子同士だったら、いつでも言い切ってしまえることなのに。どうして男子同士だと照れるんだろう。変よね。え？でも、今、貴史、『男同士でそう思える相手』って言っていたよね。聞き間違いじゃないよね。
「貴史。今まで親友がいなかったなんて、言わないよね。あんなに小学校の時、男子と仲良くやってきていたのに、その中に立村くん以上の親友がいなかったなんて、あんた、そんなに淋しい奴だったの」
「どうせ俺は淋しい奴だよ。うるせえな」
「あんたの方から話を振ってきたんでしょうが！」
「話をそらす癖はやめろよな。俺もお前の無神経なくせに余計なことに神経とがらせる性格、幼稚園のころから頭にきていたんだ」
「そのせりふ、そんままあんたに返してやるわよ！」
「どうして、どうでもいいことにそうこだわるんだよ。ああ、こんなうるさい女のどこがよくって、母ちゃん姉ちゃん、美里のことを気に入っているんだか」
「うるさくって悪かったわね」
　手の届くところにあった、長い柄の箒を握り締め、スイカ割りの要領で貴史の頭に振り下ろしてやろうか、そんな気分だった。一年前だったら、ためらうことなくそうしていたことだろう。でも、立村くんが来る前に一戦交えるのはやはり恥ずかしかった。息を深く吸い込み。『自制心、自制心』とつぶやいた。

　――立村くんには小学校時代、知られたくない過去があったらしい。

――その過去が私たちにはわからない。
――貴史はそれを知りたがっている。
――そのために私に相談を持ちかけた。

単純にまとめるとこんな感じだった。
次に疑問点を挙げてみた。

――立村くんの隠していた過去を知って、貴史は何を考えているんだろう。
――また、そのことを私に相談してどうしようというのか。
――貴史は立村くんをいい奴だと思っている。
――できれば親友になりたいと思っている。
――立村くん自身は貴史のことを、たくさんいる友達の一人だと思っているだけかもしれない。貴史には耐えられない。無理やりにでも、立村くんと強いつながりを欲しがっている。
――そのためには、立村くんのことをもっと知りたいと思っている。
――隠していた過去を聞いて、それでも友達でいられると言って、友情を結びたいと、こう思っている。

ここまで考えて、まだ答えの出ない問いがあることに気付いた。

――私に何をしろっていうんだろ？

「要するに、立村くんの小学校時代を洗えって、そういうこと？」
とりあえず出た結論をよよりどころに私は貴史に尋ねた。
「まあ、そんなところだ」
貴史は大きくうなずいた。唇を結び、班ノートを私に返した。
違う話だったら勘の鋭さを自慢していただろう。もし、貴史の好きな女子について相談されたのなら、私もこんなことを口にしなかっただろう。
「貴史、あんたって淋しい奴ね」

相手の隠していることを暴き立てて、その弱みを握って友達になるなんて、私には理解できない。立村くんを傷つけるだけじゃない。そりゃあ私だって、小学校の頃は似たようなこと考えていたかもしれない。スパイまがいのことをしていないとは言えないよ。誰かの好きな男子のことについて、いろいろ釜をかけたりして探り当てたり、からかったりしたことはある。でも、そういうことした相手と、親友になりたいとは思わないだろうな。親友だからこそ、そんな汚いやり方をしたくないと思うものじゃないだろうか。
聞いた話の内容から考えて、立村くんが小学校時代辛い思いをしてきたことは確かだろう。本音を言ってしまえば、私だって知りたい。

　でも貴史が、そんなことするのは許せなかった。

　――共犯者になってしまうのは、いや。
　――ばれたら立村くんに誤解されちゃうよ。

　ひとつは、人の心の傷をびりびりとはがすさもしい人間であると。
　もうひとつは、貴史と私との仲が、『付き合っているもの』だということになること。

　立村くんは私のことを、５月の末あたりから『清坂さん』ではなく、『清坂氏』と読んでくれていた。その頃、一年生の間で女子と男子が『氏』つきで呼ぶことがはやっていた。その名残だった。流行がすたれたこの時も、私を含む数人の女子を、立村くんはそう呼んでくれていた。数が絞られていた。
　私は立村くんの眼中に入っていたかった。
　汚いやり方を平気でしたくなかった。

「俺な、美里」
　貴史はふうっと息をついて寝そべった。頭に手を組んで、天井を見上げていた。
「今まで、俺より上のレベルの男と会ったことがなかったし、親友だとも思ったことなかった」
「本当に、あんたっていやな奴だったのね。知らなかったわ」
「ちゃちゃ入れるなよ。黙っていろ。でも、立村って、どこかかなわねえってところがあるんだよな」
「あたりまえでしょが。あんたより上の男子って、一杯いるに決まっているでしょうが」
　ひどい言葉を浴びせたにも関わらず、貴史は珍しく歯向かってこなかった。物思いにふけっているような口調だった。はにかんでいたのか、部屋の空気がなんとなく、ぬるく感じた。まじめな話をしている時は、いつもこんな空気の、やわらかさが肌に伝わってきた。その空気は榎本の部屋にも、決して見つけることのできないものだった。
「あいつって、絶対他の奴に弱みを見せないようにしているところあるんだよな。例の班ノートでもそうだけどな、本音を書かないことを美学にしているんだ」
「それは私たちだってそうじゃないの。別に立村くんだけじゃないわよ」
「計算はしてないだろ。書いて、相手がどういう手に出るかってことを、立村の場合、菱本先生が何を期待して班ノートを書かせているのかを、見抜いているんだ」
「別に、それがどうしたって感じだけどね」
「頼むから黙れよ。立村が普通じゃないところさ、菱本を『先生』じゃなくて『男子の一人』として観察しているところなんだ」
　誰だってそうじゃない、と口に出そうとしてやめた。
　殴られたら、きっと痛い。
「先生、っていうか、なんていうか。あいつは尊敬する大人っていうのが誰もいないって言って

いた。みな同じ人間じゃないかって。そういうやつらに頭ごなしに怒鳴られたり同情されたりするのはたくさんだって、言いたいんだろう。でも、立村は俺たちみたいに腹が立ったらすぐに文句言うようなことをしないんだ。むしろ、自分の計画どおりに事を勧め、菱本をからかって、あと地団駄踏ませてやろうとたくらんでいる。俺にはそこまで行き着く頭なんてねえよ」
「あんたがそんなことをあっさり思いつく頭の持ち主だったら、私とあんたとの仲はとっくに終わっていたけどね」
「じゃあ聞くけど、俺と美里の六年間って、いったいなんだ？　ほとんど立村と同じ路線じゃねえかよ。なんで俺って先生運がわるいんだろうって、いつも思ってたぞ。何かあったら俺と美里が呼び出されて怒鳴られて、教室から抜け出したとはいって殴られ、成績がよくなったらよくなったで『高慢なところが見受けられる』と通信簿に書かれてさ。クラスの連中だって同じだ。覚えているだろ。四年のおとまり会。俺と美里だけ、図書館に真夜中閉じ込められて、鍵かけられたこと」
「あったあった。でもおもしろかったよね」
　思い出した。一階の図書館に二人、鍵をかけられて閉じ込められたことがあった。反省しろということだったのだろう。数時間後、鍵を開けてくれたらしいが、私たちは知らなかった。さっさと窓から飛び降りて、自転車であちらこちら真夜中の道を走りつづけたのだから。結局帰ったのは真夜中の一時過ぎだった。
親たちに文句言われるのがいやだったのだろう。担任は私たちをにらみつける機会が増えた以外、何も言わなかった。
「あんなところ、窓開ければ抜け出せること、知らなかったみたいね。沢口先生」
「あの時も思ったろ。俺たちが責められたり怒鳴られたりしている時、みんな知らん顔だったこと。普段はつるんでいても、ピンチの時に見方でいてくれた友達がいたか？　たぶん面白い奴だとは思っていたかもしれないけど、俺は結局最後まで信用できる奴がいなかたなあ」
　なんとなくだが、貴史が立村くんに惚れる気持を感じ取ることが出来た。言葉ではなく、気持で通じ合うものがあったのだろう。私と貴史は、物心ついたときから、計画を練ってきたものだた。
　当然、先生たちからは受けの悪い小学生だった。同級生に対してはわりと、八方美人で通してきたのでいじめられはしなかった。倍返しでやりかえしていただろう。怖がってだれも手を出してこなかった。
　もっと自然に、ばかやれるところに行きたかった。
　それが附中を選んだ最大の理由だった。
　同じ感覚を、立村くんも感じていたのかもしれない。
　貴史が私と同じことを考えていたのならば。立村くんを同士と思ったのかもしれない。

　でも、どこかひっかかった。素直にうんとうなずけなかった。
　沢口先生を相手に闘うとき、私は心のどこかで激しく叫んでいたような気がする。相棒の貴史と真夜中の公園を走り回っていた時、どきどきしながらも待っていたのは、追手だったはずだ。

敵から応答が欲しかった。
　そうすれば、私ももっと頭の回転を早くして逃げることができただろう。全力で戦ってやろうと思っただろう。貴史も私と共通するところがあった。そうでなかったら、こうも長く友達でいやしない。
　立村くんは、敵からの応答を無視して、少しずつ掘り進めていきたいタイプのようだった。敵を上から見下ろして、将棋の駒のように動かし、自分のシナリオを完成させていく。それが今回の班ノートと、『裏・ノート』。
菱本先生も、クラスのみんなも、私も恐らくその駒のひとつだったのだろう。
　私はそこまで、したたかになれなかった。
　だからこそ。
「立村くんがそういう人だと、考えたくないよ」
　ぽつりと、つぶやいた。
「もちろん、俺もそう思っている。そんな悪じゃねえよ」
　貴史は身を起こして、ふと尋ねた。
「美里、四月の宿泊研修のこと、覚えているか」
「記憶にはちゃんと残っているわよ」
「で、夜、国枝が病気になって騒ぎになっただろ。お前、まだ、その真相を聞いていないか」
「全然」
　確か、夕食が終わって寝るまでの自由時間に、突然貴史が女子の部屋に乱入し、
「余ってる浴衣ないか！　あったらよこせ」
と叫んだことがあった。私はたまたま自分のパジャマを持ってきていた。用意されていた浴衣を一枚渡して、それっきりとなった。
　次の日、同じクラスの国枝くんが病院に運び込まれたという話を聞いたが、男子たちも詳しい状況は話してくれなかった。もちろん貴史も言わなかった。女子の間ではさまざまな憶測が飛び交ったものの、結論が出ず、謎の一つとして胸に収められた。
「宿泊研修の後だったよな、評議医院に立村が無条件で選ばれたのは」
「うん、覚えている。てっきり貴史が選ばれるんじゃないかって女子は言っていたんだけどね。いきなりあんたが立村くんを推薦するんだもの。あっさりきまっちゃって驚いたよ」
　貴史はすでに入学式当初から目立っていた。それに対して立村くんは目立たぬ無口なままでいた。宿泊研修の後も、立村くんの顔を覚えていない女子が多かった。
「なんで羽飛くんじゃやないの」
と、選挙の後、疑問の声もずいぶん聞かれた。
　もっとも今では、立村くんが『仕切り』の才能をもっていることが判明し、反発の声も出なかったけれども。
「男子の力関係って、どうなっているの？　いろいろグループに分かれているようだけど、立村くんはどの連中とも仲良くやっているよね。女子だたらそうはいかないよ。気に入らない子だったら、徹底して無視するよね。

「やはり変だと思ったか」
　貴史は腕時計をはずして、テーブルに置いた。時計版がはっきり見えるおうに、バンドをたたんで、ちらりと針を確かめた。
「あの宿泊研修は、すごいことになっていたって、美里聞いていないだろ」
「国枝くんが倒れたってことくらいでしょ」
「まあ、そうなんだけどさ、倒れた原因がちょっとまずかったんだ」
「食中毒じゃないの？」
　すぐには答えず、貴史はもう一度時計を見やった。

「部屋割りの関係で、俺は立村と別行動だったんだ。夕食と風呂が終わってから、同じ部屋の連中と食い物食ったり、花札やったりしていたんだ。そうしたら、いきなり、隣の部屋の連中が来てさ、仲間に入れろって言うんだ。顔と名前が一致していない奴も多かったろ。名前を覚えるいい機会だと思って、盛り上がっていた。でも、立村と国枝だけがいないんだ。『立村はどうしている』と聞いたら、いきなりもごもご言うんだよ。『国枝が具合悪くなっちまって、立村が介抱している』って感じで」
「どういうこと？　国枝くんが気分悪くなって、立村くんが看病しているってことだよね。他の連中は立村くんに押し付けて、貴史たちの部屋に避難してきたってこと？　なんだか情けないね」
「詳しいことは俺もきいていねえよ。しばらくたってから、『立村だけでも連れてくれば』とか言ったら、突然黙っちまって。どうもあの部屋には戻りたくないようなことを、もごもごと言い出したんだ」
「そんなこと言ったって、結局寝るのはその部屋しかないんでしょ。理由、あったの？」
「うん、確認してよくわかった」
　貴史は唇をちょっとゆがめて、身震いして見せた。
「じゃあ様子見てこようかってことになり、言い出しっぺの俺がひとりで隣の部屋に行ったわけだ。ふすま開ける前から変な匂いしていあし、おかしいなとは思ったさ。でも、なあ、確かに戻りたくないわな。蒲団一面に吐かれていたれあ、立村に押し付けて、自分らは他の部屋に非難したくなるだろう」
「やだ、ひどい状態だったんだね」
「あんなとこ、見たことねえよ。部屋に入ったとたん、俺もうっときそうになったもんな。国枝はトイレにこもっていて、立村もずっと背中をさすってやっている状態で。俺が来たのも気付かないんだ。まだ吐いたものを片付けてなかったみたいで、そのままになって」

　立村くんは貧乏くじをひかされたということらしかった。
「『立村、誰か呼んでくるか手伝うかするか？』って、声を掛けたんだ。村、振り返って、『呼ばなくていいから、ちょっと待ってくれ』と怒鳴ってさ」
「でも、先生を呼んだわけでしょ。国枝くんを病院に運んでもらったはずだよね」

「一応な。でも、その前に片付けなくてはならない問題が山ほどあった。とりあえず俺は雑巾を用意して、国枝の散らかしたものをふき取って、シーツをまとめたり、蒲団をたたんだりしていた。立村が、また俺の方を見て、『浴衣、余ってないか？』と聞いてきたんで、女子の部屋から調達してきたりして、それなりに手伝っていたわけだ」
「そうか、どろどろに汚れてしまったから、きれいなものに着替えさせてあげようってしたわけね。さすが立村くん、頭働くね」
　どうせなら男子の部屋からもらってくればいいのに、と思ったことを覚えていた。なんでいきなり、私のいる女子部屋に現われて、『浴衣余っていないか、美里』と声を掛けるのか、怪訝に思ったものだった。
　貴史はココアの残りを飲み干した。

　聞いていてあまり気持ちいい内容ではなかったからだろう。食欲も無くなり、私はケーキを半分残したまま、フォークを置いた。
「国枝の様態が落ち着いて、とりあえず蒲団に寝かせてから後始末して、シーツを風呂場で洗ったりしていた。立村が小学校の頃、ずっと保健委員やらされていたってこと、その時に初めて聞いたんだ。『そういうことは、しょっちゅうだから慣れている』んだとさ」
　初耳だった。
　附中に来るような連中は、たいてい学級委員か学習委員、図書委員経験者であまり体育、保健、美化医院関係はいなかった。どうしてなのか、理由はわからない。後々知ったことだが、学級委員を務めておくと附中入試の際有利だということもあったのだろう。
　立村くんの持つ雰囲気は、典型的な学級委員タイプだと感じていた。あまり声高にものを言うわけではない。目立つわけでもない。でも立村くんに仕切ってもらうと、いつのまにか揉め事も片付いている。男子の間で、立村くんは深く信頼されているように見えた。
「ある程度片付けてから、国枝がなぜああなったのか説明してもらったんだ。どうやら、同じ部屋の誰かがタバコを持ってきて、回し飲みしたらしいんだな」
「へえ、よくばれなかったね」
「立村が、最初先生を呼ばなかったのは、そこが原因だったらしいんだ。俺も片付けている時に気付いた。あいつらばかだから、タバコを三本くわえさせて、火をつけて、吸おうとしていたらしいんだ」
「無理やり？」
「いや、そこまでは聞かなかった。ただ、国枝のようすだと、生まれてから一度もタバコを飲んだことがなくて、煙を吸ったとたんむせるだけむせて、胃の中のものを全部もどしてしまったらしい。三本だろ？　死ねってことだよな」
「全く、男子って、ほんとに、ばかなんだから。そりゃ女子でもタバコもってきている子いたから別になんとも思わないけどさ」
「お、いたのかよ」
「内緒よ。でもねえ、三本一気に吸ってみようなんて発想は、まず思いつかないね。受けを狙っ

たの？それとも本当に試してみたかったの？」
「その辺は国枝に聞いてみねえとわからねえよ」
　貴史は事実関係を伝えてくれただけだった。
「もし、あの直後に先生を呼んだとしたら、たばこを吸って騒いでいたことが全部ばれてしまうだろ。立村はともかく、他の連中はみんなつるんでいたみたいだから。残りのタバコもおっぽり出して、逃げ出してしまったんだもの。立村も頭抱えたとおもうよ」
「そうか、部屋の中、タバコの匂いがしたら、一発でばれるもんね」
「入学したばかりだろ。停学くらってみろ。しゃれにならねえよ。とにかく国枝がぶっ倒れた段階で、他の連中がパニック状態になって。ちょうどその時に立村が風呂から帰ってきたんだと。あいつ一人、たまたま時間を遅らせて入ってきたらしい」
「帰ったら、タバコの匂いと吐かれてしまった蒲団とかあ。どうしていいかわからない男子。そりゃあ、困るよね。立村くんだって」
「でも、そこからが立村のすごいとこだった。まず、うずくまって吐き続けている国枝をトイレに連れて行って、背中をさすってやったろ。その後で、他の奴らに『隣の部屋に行っていろ』と指示したらしいんだ。『タバコのことはなんとかするから』とかなんとか言って。その後はまあ、今話した通り。トイレに全部、タバコ関係のものを流して証拠を消し、浴衣を用意して着替えさせてやり、ある程度片がついた段階で、菱本先生を呼び出したってわけさ」
　ここでようやく、菱本先生の名前が出てきた。私が聞いた話では、『国枝くんが倒れるとすぐに、菱本先生が車で病院に運んでいった』ということだけだった。立村くんの活躍は全く、女子の耳に入っていなかった。
「うちのクラスの男子、何人かは、立村くんのおかげで停学食らわずにすんだというわけね」
「そういうこと。思わず立村の手回しのよさが判明してしまって、俺たち男子は呆然としていたんだ。菱本先生だけはなんだか、うさんくさそうな顔をしていたけどな。『どうしてもっと早く呼ばなかった』と立村を怒鳴りつけていたけれど、あいつ、一言も言い訳しなかった」
「よくわかった」
「帰りのバスの中で、『立村って、すごい奴だな』って言っていたよ。たぶん次の週に、あいつが評議委員にすんなり納まったのは、あれが関係していると思う」
「見た目おとなしそうなのにね。なんか男子が一目置いているのはおかしいなあ、とは思っていたのよ。私も。グループ関係なく、立村くんの言うことに従うんだもの」
「でもな、美里」
　窓辺に立ち、貴史は外を眺めた。伸び上がってちょっとだけうなずいた。
「あいつ、本当ははったりかましているんじゃないかなあ」
「え？」
「最近、『裏・ノート』初めてからしょっちゅう思うんだ。本当のところを見せたくないって言うか、わざと計算高い振りをしているっていうか」
「どういうこと？」
　チャイムが無表情なメロディを奏でた。

「ほら、きたぞ。お待ちかねだろ、美里」
　素早く階段を下りていく貴史。見送り、ようやく私は、ふたりっきりなのを忘れていたことに気付いた。

その五　真打登場

　立村くんはトラッドっぽい薄茶のシャツをふわっと着ていた。微妙に色の濃さが強めのベストを羽織り、シャツのすそをきれいに流していた。見た目寒そうだった。貴史の後からそっと、細く戸を開いて滑り込んだ、そんな感じだった。
「これで全員揃ったということだ、立村。ま、そっちに座れよ」
　貴史は美里の隣を指差した。私に手で、少し場所を空けるよう指示した。
　戸惑った表情をはっきり見せ、立村くんは私と貴史の顔を交互に見やると、
「別に、いいなら」
　片腕に抱えていた黒っぽい羽織物を私の隣にそっと置いた。私に軽く頭を下げ、視線をさらっと流すように見た。
「結構、時間かかったんじゃないの？」
「だいたい、四十分くらい」
　私と立村くんとの境目に、黒いコート。そっと片手で触れた。かなりごわっとしていて、ぬくもりがなんとなく残っていそうだった。
　――これが、あの、『とんびのコート』なのだろうか？
　貴史が立村くんの分ココアを用意する間、私はできるだけ気付かれないようにそのコートに触れていた。腕のあたりだろうか、切れ目が何気なく入っている。
「ね、立村くん、このコート、貸してくれる？」
「どうして」
「これって、『とんびのコート』なんでしょう。すごく似合うって貴史が言っていたよ」
「そんなことないよ」
　細い唇がかすかに震え加減だった。立村くんは自分のコートを後ろに追いやろうとした。
「見るだけだったら、いいでしょ。今、誰もいないんだから」
　返事を聞かずに私は一気にコートを膝の上に広げた。膝がたっぷり隠れる大きさで暖かかった。シャーロックホームズが着ている、小さなケープつきのコートの無地もの。飾り気のない筒型のコートの上に、肩をすっぽり覆うケープが縫い付けられていた。
　立村くんはあっけに取られた表情で私の手元を見つめていた。
「別に、そんなめずらしくなんかないって。まだ雪降っていないから、学校に着ていかないだけであってさ」
「たぶん、目立つと思うけどな、立村くん、ちょっとこれ、私はおってみていい？　貴史の部屋って鏡がないから、どんな格好か自分で見られないんだよね」
「かまわないけどさ、そんなめずらしいか？」
「だって、私持ってないもん。着ている人、見たことないもん」
　さっさと立ち上がって着た方が勝ち。さっそく袖を探して両腕通してみた。肩に巻きついたケ

ープはちゃんと最初から縫い付けてられていた。
　暖かい。すそが長すぎる。私もそんな背が高いほうではないから、膝にちょこっとかかってしまう。歩きづらいかもしれない。
「なんだか重たくない？　立村くん、肩凝らない？」
「慣れているから」
　短く答え、立村くんは私を見上げてほんのちょっとだけ、笑顔を見せた。
「でも、いいかもしれない。私こういうデザインって、嫌いじゃないよ。ね、今度は立村くんが着てみてよ」
「いいよ、俺はそんなの」
「よくないってば、着てきたとこ、見るの、ふふ、楽しみだったんだ」
　脱ぐ前にくるっと回ってみた後、すぐ、立村くんに押し付けた。つられて立ち上がった立村くんも断りきれなかったらしく、ゆっくりと羽織りはじめた。着慣れているだけあって、ケープ部分がひっくりかえっていないかどうかまで、ちゃんと指先で確かめていた。
　ようやく貴史の足音が聞こえてきた。
「貴史、早くおいでよ。立村くん、着ているってば。とんびのマント」
「別に、そんな、いいだろ、そんなこと」
　戸惑いというよりもはにかみ加減。ささやき声に近かった。
「じゃあ、開けろよ、美里」
　げらげら笑いながら、私は片手でノブをひねった。貴史が両手ふさがったままで入ってきて、一言。
「立村、今度学校に着てこい。絶対、お前そっちの格好の方が、似合っている」
「冗談言うなって。『華美な格好』で来るなって、書いてあるだろ」
「黒だから『華美』には入んないんじゃないかな。ね、貴史」
「いや、一応、何かあった時にだけ、着ろって言われているから」
　語尾をにごらせ、少しだけむっとした表情を覗かせた後、立村くんはまたコートを脱ぎ、丁寧にたたんで後ろに置いた。

　しばらく男子同士でしか通じない暗号のような会話を交わしていた。たぶん話の内容からすると、立村くんの家で出た話題らしい。学校では一言もそのことについて話さなかったようで、
「とりあえず、十一月が期限だな」
「やっぱり、そこは譲れないってか」
「ぎりぎりだ。このあたりまで待てば、そろうものも揃うしさ」
　しばらく私の存在を忘れていたみたいだった。意識しているのが私だけのようでおもしろくない。かといって割り込むのも、子供っぽく思われそうだった。
　――テープレコーダー、持ってくればよかったな。
　――あとあと、脅す道具に使えそうな内容、話しているんじゃないかな。
　――相当、貴史とふたりっきりで、煮詰めておいたんだろうな。

――ま、そういう秘密の場所に私も入れてもらえたから贅沢言えないけど、せめて説明してほしいよね。

かえって無口でいたほうが好都合なところもあった。
立村くんが黒いトンビのコートを羽織った時、見せた横顔がなんとも言えず、気品を感じたのはたぶん私だけだっただろう。黒をまとうと、色の白さが際立ち、唇の薄さ、髪の毛の柔らかさ、瞳のあどけなさ、いろいろなものが入り交じっていて、へんてこな気持になった。私好みの雰囲気だった。貴史を含む他の男子には持ちえない、上品な香り。
立村くんって学校ではおとなしい評議委員の顔をしているのに、どうして、コートが変わったくらいでそんな風に感じてしまったのだろう。
もちろん私はかなり前から、立村くんのことを意識していたし、他の女子と付き合うなんてことにはなってほしくないな、くらいは思っていた。
もう一歩、おしゃべりできる仲になれたらいいな、そのくらいだった。
おとなしそうに見えて実は頭の切れる、それでいて私のことを『清坂氏』と特別あつかいで読んでくれる人。ちょっとクラスではめずらしい存在。
鼓動が早くなったことに、戸惑っているのは私だった。

「清坂氏、さっきから俺が言っていること、もしかして聞いていないだろ」
問い掛けられ、あわてて私はわれに帰った。立村くんが隣で軽い笑みすら浮かべながらこちらを見ていた。
図星だった。素直にうなずくしかなかった。
「ごめん、実はその通り」
貴史にどやされた。
「二度手間かけさせるなよ、な、立村」
「いや、俺の説明がまずかった。ということで、羽飛、なんか書くものあるか？」
「別に気を遣わなくたっていいのに」
「よろこんでいるくせに」
貴史の一言だけよけいだった。無視して私は立村くんの側により、書いているものを見させてもらった。

・１１月までにしなくてはならない事
・１１月以降にする事
・予定されているらしい編集について

全く見当がつかなかった。
「まず、第一点目の説明をしてほしいな」
立村くんは片膝を立てた格好で、器用に頬杖をついた。

「例の班ノートについてなんだけど、羽飛と二人でできるだけさりげなくやってきたつもりだった。菱本先生の言われた通りに『自分の思っていることを素直に』書くような振りをしてみたところなんだけどさ」
「お互い、大変よね。読んでいる方が恥ずかしくなるよ。大丈夫？」
「覚悟はしていたから」
　目をちらっとそらせて立村くんはすぐ、シャープの先で箇条書きのところをつついた。
「思ったとおり、菱本先生も、他の連中も、みなあのノートに書いたことが本当だと思い始めている、これも、覚悟していたことだけどまだ一週間くらいしかたっていないのにな。計算違いだったって、昨日も羽飛と話していたんだ」
「真っ正直に信じている子の方が多いんじゃないの？　立村くんって、見た目まじめそうだから。こういうことを考えているとは、まず他の女子は気付かないと思う」
「わかっているのは、この三人だけだってこと。わかってる」
　ふたたび立村くんは貴史の方を見た。貴史もうなずいた。
「ただ、この状態が続くのは、俺にとってもあまりうれしいことじゃない、清坂氏、だいたい見当つくだろう」
　簡単に付いた。私は立村くんの目を見つめてうなずいた。戸惑ってそらそうとするのを、追いかける感じでたぐった。
「それと、これはまだ噂でしかないことなんだけど」
　貴史が後を引き取って続けた。
「菱本先生、十二月にクラス文集を作りたそうなこと、言っていただろ、美里」
「ああ、そんなこと言ってたね。誰も聞いていなかったみたいだけど」
　すぐに立村くんが説明に入った。
「今年卒業した先輩から聞いたところによると、菱本先生の『クラス文集』に賭ける情熱は、生半端なものじゃないんだそうだ。最初はたかをくくっていたけど、聞いていてぞっとしたよ」
「前もって、原稿集めて、それを綴じるだけじゃないの？」
「いや、もっと手が込んでいる。菱本先生があれだけ班ノートにこだわる理由、わかるか？　本当のことを知りたくて、生徒の中に入りたくて、とかなんとか言っているだろ」
「単に交換日記好きなだけじゃないかなあ。まさか、ネタを集めたいってことかなあ」
　何気なく思いついたことを口にしたとたん、立村くんの顔にひらめきの表情が浮かんだ。
「そう、さっきから俺が言いたかったのは、そこなんだ、この前、評議委員会が始まる前、本条先輩から聞いたんだけど……」

　立村くんは評議委員会内で、二、三年の先輩達と仲が良かった。可愛がられているというより、相手と『同格』の感じでしゃべっている。
　同学年同士では、なんとなくきちんとした落ち着きを見せている。でも評議委員会内に限っては、敬語こそ用いてはいるが、かなりつっこんだ話をしている様子だった。
　たぶん、評議委員会がらみで情報を仕入れたんだろう。私は話を促した。聞き上手になりたか

った。
「普通、文集というと、原稿を集めてコピーして、綴じる、それだけだと思う。でも、菱本先生の考えている方法っていうのは、クラスの出来事や生徒の何気なく書き残したこと、言葉などを全部拾い上げて、『編集』したいらしい」
「『編集』って？」
「よくわからないし、はっきりしたことは言えないよ。ただ、去年菱本先生が担任していた人たちは、一部の委員を除き、文集というものが存在することを知らなかったみたいなんだ。十二月前後から二人だけこっそり声を掛けて、『文集のネタを集めてくれ』とか言って」
「でもクラス内で選ぶわけだから、こっそり集めることはできないでしょ。みなばかじゃないから、気付くよ」
「いや、あくまでも、菱本先生が内緒にするように言って、やらせたらしい。もちろんその時はそれがうまくいって、結局三月卒業式の当日まで誰も気付かなかったらしいんだ」
「文集が出来上がったのが、卒業式当日？」
「そういうこと。どうせほとんどが青大附高に進むんだから、別に卒業式なんてしなくたっていいと思うんだけどさ。とにかく菱本先生は自分で『編集』し、隠密の編集委員に集めさせた原稿をまとめて、卒業記念にプレゼントした、ということ」
「内容はどういうことだったの？　それによっては、楽しみじゃない？」
「見てみればわかるよ。羽飛、どかしていいか？」
　汚しちゃまずいと思ったのだろう。立村くんはお菓子とカップをテーブルの下におき、ふきんで軽く拭き、かばんからＢ５版の小冊子を取り出した。
　クラス文集と呼ぶには豪華な表紙だった。入学式から遠足、文化祭、いろいろなカラー写真がコラージュ風にまとめられている。私の卒業した小学校でも一応、学年文集らしきものは作ったが、とてもだけど比べ物にならない。
　表紙はカラー。分厚いページ数。紙質だけはぺらぺらしている。たぶん費用を節約したのだろう。
　全部見たいけれど、ぱらぱらとめくってみた。

　――この文集は、学級日誌、および班ノートを通して、三年A組の日常を拾い上げたものです。
　本来ならば、A組のメンバーひとりひとりがそれぞれの思いを綴ってもらうのが筋なのでしょうが、
　どうもそういうやり方に、僕はなじめずにいました。
　心の奥にフィルターをかけたまま、本当の言葉をぶつけずに綴られた文集のなんとむなしいことか。

　そこで今回A組の三年間を集約するにあたって僕は、次のような手段をとりました。

　１　過去三年間、提出を義務つけてきた班ノート三年間分を見直して、それぞれの言葉と思い

を綴った一冊にまとめること。
　２　クラスのスナップ写真ではなく、僕自身が集めてきた日常風景（もちろん誰も気付かないように用意したものです）を掲載する。
　３　そして、それぞれの思い出に対する僕自身の反省（が、ほとんどです）を、遺していくこと。

　残念ながら、三年間すべての班ノートを掲載するということは、量的な問題もあり断念せざるをえませんでした。
　（こんなことだったら、一年ずつまとめて置けばよかった……反省）
　また、あえてＡ組メンバーには、了解を得ないまま始めてしまったことにも正直なところ心苦しいことがあります。
　読んでいただければお分かりでしょうが、すべてがすべて、楽しい思い出ばかりではありません。
　人を傷つけてしまったこと、辛かったこと、悔しかったこと、恥ずかしかったこと。
　たぶん、このような形で残ってしまうことに抵抗を感じるメンバーもいることでしょう。

　それでもあえて、こういう形で残したかったのは、
　中学三年間、混沌とした中で口にしたり書いたりした言葉が
　必ず五年後、十年後、自分自身の中で必要になる時があるからです。
　これは僕の経験です。
　人によってその時期がいつになるのかはわかりません。
　受験の時、恋愛の時、結婚の時、はたまた（？）自分の子供が生まれた時。
　通り過ぎた言葉たちをもう一度味わう時が来るはずです。

　内緒にしていてごめん。
　でも、いつかこの一冊が、かげがえのない宝になることを祈りつつ。
　三月十五日　三年Ａ組　担任　菱本　守

「これって、何を言いたいわけ？菱本先生、妙にハイテンションだよね」
　他のページには、それこそ過去の班ノートから抜き出した内容を、わざわざ文字の大きさまで替えて編集された内容が詰め込まれていた。
　前書きどおりすべては載せきれなかったらしいので、一部抜粋という形を取ったらしい。
「立村くん、読んだの？これ」
「一応、ひととおり。先輩達がものすごくかわいそうになった。だよな、羽飛」
「ごもっとも。二年生のところなんてひでえぞ。登校拒否した先輩がいたらしいけど、実名付きで全部、学校にくるまでの道のりっていうのか、それを書いているだぜ」
「でもその人はすぐに学校に戻ったんでしょ」

　立村くんの声が思わず上ずったように聞こえた。
「だからなんだよ。もう済んだことなんだよ。どうしてそんなことを、形に残しておく必要あるんだよ！」
　貴史の様子は変わらないけれど、私はかなり驚いた。ちょっと後ろずさった。立村くんも、すぐに自分らしくないと気付いたのか、声のトーンをすぐに下げた。
「まあ、立村、落ち着けや。お前がこういうこと嫌いなのは、この前よくわかったから」
「ごめん、なんだか、変なこと言ったかも、しれない」
　テーブルの下に置いたココアをすすりながら、立村くんはいつものように落ち着いた表情で話はじめた。

「別に俺はかまわないんだよ。菱本先生が文集作るのも、何するのも。班ノートだって別にイラストを書いているとか、破って捨てているとか、そういうことはしていないだろ。ちゃんと、まじめに、文章で書いているだけだろ。あんなにまでして人の中に入りたがるのか、それがものすごく不愉快なんだ」
「確かに立村くんはまじめだよね。することはしているけど」
「比較するようで悪いけど、俺も清坂氏も、そんな目立ったことはしていないと思うんだ。いろいろ小学校の頃、あったって聞いたことがあるけどもう過ぎてしまったことなんだから、それを持ち出してああだこうだ言うっていうのは、汚いと思う」
「賛成。過去のことは過去のことよ。今の自分を見てもらわなくっちゃね。でも何よ、まさか貴史、また変なこと立村くんに言いつけたんじゃないでしょうね」
「過去だけど事実だってあるんだろ。別に、立村、そんなに美里の過去なんて、むかつくことなんてなかっただろ」
「それは大丈夫。聞いているってだけだから」
　ふだんだったら思いっきり貴史を締め上げるところだがこらえることにした。
「俺が許せないって思ったのは、第一にあの班ノートの時のことさ。確かにうちの両親は離婚しているけど、それと今の俺とどう関係ある？　本当のことを聞かせろとか、ふざけるのをやめろとか、勝手に想像して決め付けないで欲しい」
「で、『裏ノート』をこしらえた訳ね」
「嘘でもいいから菱本先生の望む内容を書いてやろうか、そう思ったさ。でも、本来だったらそんなきれいごとを書くのは俺の主義に合わない。わかってもらえる人にはちゃんと、本当のことを残しておきたい、それで始めたんだ」
「ずいぶん入り組んでいるよね。でもまあ、確かに立村くんがむかつくのもわかるな。ね、本条先輩とか、他の先輩には話したの？」
「本条先輩にはぼかして話をしたけれど、詳しいことは羽飛と……清坂氏だけ」
　班ノートのことで絞られたとぐちったんだろう。本条先輩とは、立村くんが一番なついている評議委員二年の先輩だ。
「そうしたら、本条先輩が高校生の人からわざわざ借りてくれてさ。『どうするんだよ、あんま

りはめはずしたら、一生の恥が残るぞ』とか言われて」
「立村くん、あおざめたでしょう」
「血の気が引いたって、ああいう時のことを言うんだな、って思ったよ」
「ほんとほんと、立村いったい何かとんでもないことやらかしたのか、ってあせったもん。話聞いたらたいしたことなかったけどなあ」
「羽飛、よくお前も冷静でいられるよな。考えてみろよ。あんな白々しいことがみな、文集に残るんだぞ。しかも、前書きのところもう一度読み直してみろよ」
　指差した一行をもう一度読んだ。

（こんなことだったら、一年ずつまとめて置けばよかった……反省）

「ということは新しいクラスの場合一年ずつまとめる可能性もあるってこと？　でも深読みのし過ぎじゃないの？」
「いや、まだ噂に過ぎないんだけど、うちのクラスで最近、文集を作る係を選び始めているらしいんだ」
「え？　どういうこと？」
「美術のうまい奴とか、写真部の奴とか、そういうあたりに声を掛けているらしい。俺には全然聞こえないけれど、この前も杉浦さんがそれっぽいこと、言っていたし」
「杉浦加奈子ちゃん？」
　貴史も目をむいた。
「杉浦が、おい、お前に文集委員させられたって言ったのか？」
「……まあ、そういうこと」
　立村くんははっきりと私から目をそらせて、話をさらに続けた。
「今は何を考えているのかわからないし、それ以前に菱本先生の趣味がなんなのかも見当つかないよ。本当は俺が文集委員にもぐりこめればよかったんだけど、どうやら前からにらまれているらしいし」
　評議委員として立村くんはかなり用心深く振舞っていた。私も一緒にいて、そのことは感じていた。
　どのグループともつかず離れず、男子同士との会話は均等に。悪口をできるだけ言わないように。
　声もめったに荒げなかった。ただそれが『中学生らしくない』と思われたふしもないわけではなかった。
　たまに女子が『立村くんは何を考えているのかわからないから不気味だ』と悪口言っていたのを聞いたことがある。私は無視していたけれども、男子同士でも似たようなところがあったのかもしれない。
　こずえみたいに『あの子は単なるガキなのよ』と言い切るにしては、まだわからないところが多すぎる。

　菱本先生から見たら何か気になるところもあるのだろうか。ちょっとしたことで、しょっちゅう立村くんを呼び出し注意するらしい。
「確かに、菱本先生は立村くんをチェックしているよな気がするね」
「やはりそう思うだろ？　こちらは何もしていないっていうのにさ。本当はこういう企画なんてつぶしてしまえれば一番いい。誰もやる気ないということで、菱本先生にあきらめてもらえればいいんだけど、そうもいかなさそうなんだ。そこで」
「そこで？」
　ゆっくりと立村くんは私に向かいささやいた。
「このノートのからくりを、他の連中に、おしえてやってほしいんだ。清坂氏」
「どういうこと？」
「班ノートに書いたことはほとんどが嘘っぱちで、仮に文集へアップされたとしても、本当のことは『裏・ノート』に書かれているということを」
　真剣な声だった。あやうく、自分が飲み込まれそうだった。
　――どうして、どうして、どうして私に？
　思わず見詰め合ってしまった。どきまきしながらも、私は自分の言葉を忘れたくなかった。
「どうして、立村くんは自分でそれをしようとしないわけ？」
　立村くんの表情がすっとゆるみ、何か言葉を捜しているようだった。
「そんなことだったら、無理に私でなくたっていいんじゃないの？　第一、そんな小細工するよりも、立村くんがはっきり、菱本先生に言えばいいことじゃないの」
　言葉がきりきりと音をさせるようだった。ちりちりと孔を開けようとするのが聞こえそう。やわらかな、待ち兼ねていたはずの時なのに、なぜか私ははむかっていた。
　貴史が空気をかき回してくれた。
「いや、他の女子じゃあ、だめなんだよな、立村はな」
「何言っているんだよ。普通の人じゃ、つまらないっていうのはあるけどさ」
　心なしか、立村くんの頬に赤みがさしていたように見えたのは思い過ごしだろうか。こちらまで伝染しそうになり、あわてて私も言葉を挟んだ。
「まるで、私って、普通じゃないって奴？」
　すかすかの会話で場を盛り上げようとしてくれる貴史に、こっそり手を合わせた。一時険悪になりそうだった私と立村くんとの会話を、うまく丸めてくれた。長い付き合いだからこそ、わかってくれるありがたさ。貴史がいれば、いくらでも軽口を叩くことができた。貴史の前では、何を言っても縁を切られることはない。
　でも、今ここで立村くんを怒らせてしまったら、クラス替えのない中学三年間、地獄のだんまりが続くことになってしまうかもしれない。怖い。怖いくせに、攻撃している自分がいた。
　私はもう一度、角の立たない言い方をしてみた。
「って、いうか。表立ってできない理由でもあるの？　立村くんくらい頭がよかったら、もっと別の方法を考えそうな気もするんだけど。もちろん『裏・ノート』も面白い方法だとは思うよ。でも、なんだかめんどくさいでしょ。二冊も作って、しかも中まで書いて。ものすごく、しんど

いんじゃない？　それだったらむしろ、文集委員の方にうまくもぐりこんで、思う存分書きたいこと書いて、先生をあっと言わせたほうがいいんじゃないかな。私だったらそうするよ」
　頬が熱く、焼け焦げそうだ。もし、貴史がいなかったら、うんうんと素直にうなずけるのだけど。立村くんはちらりと私のまなざしを捕らえ、すぐにそらした。指先でついと、こめかみを押さえた。
　答えが返ってくるだろうか。
　――おこっちゃっただろうか。
　身動きせずに立村くんは上目遣いで私を見た。まつげが長い、とぼんやり思った。同時に、はたして立村くんの瞳に自分が移っているのに気付いた。どんな顔で映っているんだろう。黒目の奥に映っている私の顔は。おぼろに想像する自分の表情はかわいくなかった。悔しい。

「なんて、言えばいいのかな。つまりさ、羽飛や清坂氏がふたりで、いつもいろいろ計画して、先生たちをはめこんでいたって、よく話していただろ。入学式の時のこととか」
　言葉が少しばらばらでとりとめなかった。
「真夜中に図書館に閉じ込められ、脱走して逃げた話とか、いろいろ聞いていて、なんだか俺もそういうことしていたような気がしてきたんだ。あまり小学校の頃って、そういうこと、しないできたからな」
　いったい貴史は私と組んでやらかした事柄のどのくらい、立村くんに話したのだろう。気になる。口調だ。貴史をにらむが、奴は無視した。
「今回のことは、俺自身だけに降りかかってきたことだから、確かに清坂氏の言う通り、一人でやればいいことなのかもしれない。たまたま羽飛に話したらいろいろ案を出してくれてそれに乗ったわけなんだけど、でもさ、もしかしたら、羽飛と最強のコンビを組んでいる清坂氏だったら、もっと鋭いやり方を見つけてくれるかもしれない」
　誉められなれていないと、つい私もうつむいてしまいもごもご言ってしまう。
「買いかぶりすぎだよ、立村くん」
「その通り、俺もそう思う」
　だから、貴史の言葉はよけいなのだ。腹が立つ。
「巻き込んでしまうことになるのか、て言われると、何も言い返せないよ。でも、羽飛と清坂氏とだったら、なんだかうまく行きそうな気がするんだ」
　立村くんの瞳が、軽く下を向いた。はにかんでいる様子だった。
「だから、俺は、二人以外の人には、絶対に言いたくないし、頼みたくない。もし駄目だと言われたらあきらめる」
　目が覚めたような気がした。とくとくと心臓が鳴り始め、私はもう一度、立村くんに尋ねた。
「私は、何をすればいいの？　貴史とはどういう打ち合わせをしていたの？」
　立村くんより先に、貴史が答えた。
「班ノートが嘘っぱちだってことを、何気なくクラスの連中に伝えてやるってことだ。立村には暗い過去はないし、それどころかいじめられたことなんて皆無だし、きれいごとばかり言ってい

るような奴でもないってこと」
「もちろん、『裏・ノート』の存在は、まだ伏せたままにしておけばいいのね」
「そう、それは絶対だ。だからお前に、『裏・ノート』を見せるんだ」
「立村くんが、あんな過去を持っているわけないって、何か出てきた折に繰り返し言えばいいのね。『裏・ノート』を読ませてもらって、その内容を、私流に解釈しろってわけでしょ」
　最後は立村くんに確認した。
　うなずき、もう一度私にだけ聞こえるような声でつぶやいた。
「他の人には、頼みたくないんだ」
　真剣なまなざしで、貫かれた。すぐにうつむいた。

　――なんで、そんな汚い手を使いたがるの？
　――私と貴史の計算高さを利用しただけなんじゃないの？

　ふだんの私だったら、もっと立村くんを問い詰めていただろう。その時、自分の顔が立村くんにどう映っているのかばかり気にしていた。鏡代わりになるようなものが、貴史の部屋にはない。
　私の目に映っているのは立村くんの、本当に言いたいことを閉じ込めているようなまなざしだけだった。
　何を言いたいのかはわからないけれど、これだけじゃない、いえないんだ、そう言いたげに見えたのは、思い過ごしだったのだろうか。

その六　表か裏のさかいめ

「裏･ノート」は勝手に盛り上がっていた。
立村くんもそれを渡してくれる時、誰にも見せたことのないひそかな笑みを、私にだけ見せてくれた。

十一月十四日　班ノート　立村　上総

誰にも言いたくない過去はあるだろう。いじめで自殺した中学生の話を聞きながら、いろいろ考えたことがある。
僕の経験したことに多少似ていたからだ。
理由はわからないが僕はずっと「いじめられっこ」といわれる人間だったと思う。そんなに人より目立つようなことはしなかったし、むしろ引っ込み思案だったんじゃないだろうか。でも、されたことは、例の中学生とほとんど変わらなかった。
特に四年生の頃は、何度も死のうと思った。
五年生の時は、学校に毎日、出刃包丁を持っていった。
六年生の時は、あぶなく人を殺しそうになった。
追い詰められると、何をしでかすかわからないと、その時感じた。
でも僕はまだ救われていた。中学は青大附中に行くことになっていたし、過去のことを気にしないで友達になってくれる同級生がたくさんいた。
過去を振り捨てることができたと思う。
でも自殺した中学生の場合、小学校から高校までずっと、加害者の同級生と顔をあわせていなくてはならない。十二年間いじめられ続けるくらいなら、死を選ぶ彼の気持が、僕には痛いほど、よくわかる。
ただ、彼には自分を殺すよりも、相手を殺してほしかったと思う。罪になったとしても、生きている方がはるかに幸せだったと思う。
本当はこういうことを書くつもりではなかった。永遠に忘れてしまいたかった。でも、このクラスの人は、きっとそういう僕の過去をも受け入れてくれるだろうと、信じている。

十一月十四日　裏・ノート　立村　上総

一気に暗くしてしまった。お涙頂戴の感動作を、菱本先生へのプレゼントに創作してしまった。ここまで書いたら俺のプライドも何もなくなるよな。これもすべて、大どんでんがえしのために乗り越えるとしよう。

十一月十五日　班ノート　羽飛　貴史

俺はいじめられたこともないし、むしろ加害者だったのかもしれない。立村くんのいうような、ひどいことはしていなかった。けんかもいろいろやってきたけど、いつも堂々と戦ってきていたと思っている。
でも、いじめられた立場からしたら、どれも同じなんだろうな。
俺は立村くんが、出刃包丁を持って教室に入ってくるなんて考えられないし、まして殺してやりたいほどいじめられたなんて、思ったこともなかった。
だって、立村くんはいつだって沈着冷静にふるまっているし、騒ぎ立てることもしない。
大人みたいにふるまっている。俺はすごくうらやましい。立村くんみたいになりたいと思っていた。
立村くんをいじめる奴なんて、よっぽどのばかだと思っていた。
でも、そんな残酷な経験をしているから、立村くんの今があるんじゃないかと思う。
昨日読んでみて、そう思った。
「彼には、自分を殺すよりも、相手を殺してほしかったと思う。罪になったとしても、生きている方がはるかに幸せだったと思う」ってとこ、読んでみて、なんだか泣けた。死ぬのは勇気がないからだ、とかしらじらしいことを、昨日の道徳の時間に皆しゃべっていたけれど、やっぱり、立村くんは奥が深いよな。強いよな。

十一月十五日　裏・ノート　羽飛　貴史

たまには立村も泣けること書くよな。これはまじめに。
でも、いいかげん早めに手を打たないと、お前、まじで、出刃包丁持って学校に来ていた奴にされてしまうぞ。

十一月十六日　班ノート　古川　こずえ

立村くんの言いたいこともわかる。羽飛くんが感動するのもわかる。
でも、私がショックだったのは、羽飛くんが、道徳の時間の、みんなの発言をしらじらしいと言っていたところ。すっごくむかついた。
本当に立村くんが人を殺そうとしたかどうかは知らないけどさ、「自分を殺すより、相手を殺してほしかった」ってことに、あそこまではまらなくたっていいんじゃない？
いじめられて死にたくなったことなんてないけど、他人に迷惑かけて平気って考えがものすごくやだ、って思う。
立村くんはいじめられた原因がわからないって書いているけれど、本当はそういう考えがある

から相手にむかつかれたんじゃないの。
　あたしなら、納得しちゃうな。
　何書いているかわからなくなっちゃった。ここ、飛ばしていいよ。

　十一月十七日　班ノート　杉浦加奈子

　私には難しいことわからないので、何も書けません。
　立村くんがどんな過去を持っていても、たぶん他の人は何も言わないと思います。ちょっと気になるのは、古川さんのいうような、迷惑かけて平気って考えです。
　いじめられたら殺してもいいんですか。人を刺してもゆるされるんですか。どっちが悪いかわからないのに。

　十一月十八日　班ノート　清坂美里

　みんな、「自分を殺すより、相手を殺してほしかった」って言い方を誤解していると思うな。違う言い方にしておけば立村くんも誤解されなかったと思うのに。私が思うには、「逃げるよりも、ぶつかったほうがいい」って意味じゃないかって。
　立村くんがつらい思いをしたことだけわかってあげれば、それでいいのに。何があったって、私たちは立村くんの経験したような汚いことをする気ないし、したいとも思わないもの。
　なんでどうでもいいことにみんなこだわるの？

　十一月二十六日　「裏・ノート」羽飛　貴史

　しかし、まあ、立村、よくもまあすごい過去を作ったよな。いくらなんでもここまで想像できねえよ。はたして菱本先生が信用してくれるかどうかは別として、このまま卒業文集に載せられたら、あんたの身の破滅だぞ。さあ、どうする？

　十一月二十七日　「裏・ノート」立村　上総

　表か裏か。賭け、そのものかもしれない。うまくいくとは信じているけれどな。

　学年発表会の後は間をおかずに実力テスト五教科が行われ、『裏・ノート』について話し合う機会がなかった。
　当然、私と貴史が「立村くんの隠している過去」について調べることもできずじまいだった。
　立村くんに頼まれた『班ノートのことは嘘よ』という言い訳もおおっぴらにはしていなかった。
　方法が思いつかなかったわけではない。

ふたりきりでしゃべる機会がなかったわけではない。
電話だってあることだし。
どうしても踏み切れない重たいものが詰まっていた。

きっと立村くんが否定してほしかったのは、十一月十四日の『いじめられた暗い過去』のことだろう。
こずえや加奈子ちゃんには、なにげなく
「まさか、立村くんがあんなことされるわけないじゃない。ねえ。だって立村くんは小学校の時、模擬試験で国語と社会を満点取ったことあるって言っていたよ。それだけ頭いい人が、ねえ」と、冗談交じりで話した。あれは私自身にも言い聞かせたかった言葉なのかもしれない。

貴史も、あえて私に問い掛けてこなかった。
誰も話題にしなかった一ページ。私の直感では、立村くんの班ノートに綴った言葉の方が、真実に近い。
言葉の力を私は今でも信じている。小手先細工をうっちゃってしまうような、鋭さがある。
立村くんの書いた十四日の班ノートには、針でするどく突き刺すような、痛みが伝わってきていた。
嘘だとは、どうしても思えなかった。

一ヶ月が経った。
評議委員会の議題は、合唱コンクールの総括だった。
青潟大学附属中学の合唱コンクールは少々変わっていて、二年生のみ参加の決まりとなっていた。よりによって男子の声変わりが重なる時期に、あえてなぜ、というのが疑問なのだけど、その辺は誰もわからない。伝統なのだそうだ。
音楽教師が指名した『課題曲』と『自由曲』の二曲を、夏休みが終わってからはずっと練習し、体育館にて熱唱。最優秀賞を取ったクラスには、特別に『クラス旅行一泊二日』をプレゼントされるという。もちろん青潟近郊のみだけれども、特別な修学旅行のようなものだ。
他にも優秀賞、優良賞なども選ばれ、『学校内にキャンプ券』『教室内にお泊り会券』などが賞品として用意されている。
しかしながら、私たち一年生にとってはまだ､先の話だった。二年生の評議委員同士が集まっていろいろ相談している間、私は数学の問題集を開いた。
次の日、黒板に出て解かなくてはならない問題だった。数学の先生は前日に前もって、問題を割り振りし、その答えを黒板に書かせておくという、宿題に似たやり方で問題を解かせていた。抜き打ちでない分､気は楽だ。
私の分はすでにすませてあった。簡単な二次方程式の文章問題だった。もともと数学は嫌いなほうではない。気になったのは、五題離れたところに掲載されていた立村くんの問題だった。
はっきり言おう。立村くん、あなたには無理です。

　問題集には星印の数によって難易度がわかるようになっている。私の問題は星一つ程度。しかし、立村くんの当たった問題は、有名私立大学附属高校の試験問題だった。星印は三つ。難レベルだ。解くのは、立村くんなのだ。
「立村くん立村くん」
　選曲ミス問題で言い争っている二年生たちを立村くんは眺めていた。こんなにのんきでいいのだろうか。
　私は隣にいる立村くんを、問題集の角でつついた。
「なんか？」
「この問題、解ける？」
　あえて、差し出したのは、私の当たった分の問題だった。
　基本問題の二次方程式に手が出ないようでは、当てられた問題を解けるとは、思えない。
「俺に解けってか」
「今日、似たような問題、解いたでしょが。ね、やってみなよ」
「恥かかせる気でいるだろ、清坂氏」
「どうせ、知られるのは私だけよ。いいじゃない」
　解く場所として、評議委員会ノートを一ページ、破いて渡した。
　立村くんも暇を持て余していたに違いない。箇条書きで『合唱コンクール』の反省点を並べて書いているだけだった。
　ならば、ここで立村くんの個人レッスンをしてあげたかった。お互いのためだ。
　立村くんはとろとろと問題をノートに写した。シャープペンシルでうっすらと、ＸＹＺを並べ、分解作業に入った。
はずだった。
　でも、なぜ？　私の目には謎としか思えないようなことをしていた。
　こんなところでなんで因数分解しているんだろうか。
　第一、足し算の合計からして、間違っている。
　一次方程式の一プラス三イコール四が、二次方程式に代わっただけなのに。なぜ答えが７にならなくちゃいけないんだろう。
　もう見ていられなかった。この人は数学の授業中、英語の辞書を引いて内職していてはいけないんだと、つくづく思った。
　端切れをむりやり取り返し、私は猛スピードで、正確な答えを導きだした。
「だから、俺に何をさせたかったんだ、いったい」
いつもは沈着冷静を装う立村くんだけどこの時は、すっかり立場なし、といった表情で私に尋ねてきた。私と立村くんは、問題を間に挟んで一分間くらい、全く異なる思考回路を辿っていたに違いない。
　言葉をしばらく探してみた。チャンス到来、これを逃したくなかった。
「見てられないもん。ね、立村くん、明日当たる問題、何番だった？」
「百十八番の文章題。よりによってなんで俺に当たるんだか」

「ええっと、これよね。高校入試用の問題よね。こんなの立村くんに解けるわけないって、今、わかっちゃったから、私が代わりにやってあげる」
「え？」
　ぐいっとあごを引いて、私は立村くんにだけ、聞こえるようにささやいた。
「このままだったら、班ノートに書いている内容が、本当のことだと思われちゃうわよ。小学校時代、暗い思い出しかなかったとか、いじめられていたとか。私だって影でいろいろ努力しているのよ。台無しになんかしたくないもんね。それに、数学が苦手な男子って、うちのクラスにはそういないじゃない」
「悪かったな、例外で」
「私と貴史が通っていた小学校ではね、勉強が極端に出来なかった奴って、しょっちゅうばかにされていたのよ。立村くんは英語のエキスパートだし、数学以外は成績いいからまず大丈夫だけど、班ノートに書いてあったいじめの話が、説得力ある内容になっちゃ、いやじゃない？」
　ちょっと言い過ぎただろうか。いつもの私の癖だった。優しくしてあげようと思う一方で、本心を見抜かれるのは恥ずかしいとおびえている。どこかで怖がっている。立村くんから『男』の視線を感じたくない。
「もちろん、私は『裏ノート』読んでいるから、そんな誤解なんて、絶対しないけどね」
　立村くんはふっと、力が抜けたような笑みをもらした。軽くうなずいた。私の言葉をわかってくれたのかもしれなかった。不意に私の握っているシャープペンシルの先をじっと見つめ、そこに話しかけるように、
「清坂氏も、『裏ノート』を読んでいなかったら、本当のことだと思っているんだろうな」
　できたら目をじっと見詰めて、言ってほしかった。
「たぶんね。立村くんがこの前書いたことあったでしょ。『表か裏か』ってとこ。加奈子ちゃんも言っていたよ。立村くん、よくあそこまで書いたよねって」
「杉浦さんが？」
　声のトーンが少し変わったことに、気付いたけれど、知らん振りして私は続けた。
「そうよ、加奈子ちゃんも立村くんのイメージがもっと、違うものだと思っていたんじゃないかな。黙っていたら立村くんってクールに見えるよ。まさかいじめられていたなんてこと、ありえないってね。でも大丈夫。加奈子ちゃんには、ちゃんと私から、本当のことを説明しておいたから。『まさか、立村くんが本当にいじめられていたなんてことないよ。あれはポーズよ、菱本先生をうまくごまかすための』って」
　そこまで言って、はっとした。
　立村くんの表情に、険しいものが走っていた。私の方を全く見ずに、私の指先のみに語りかけている。爪みがきで磨いておいてよかったと思った。マニキュアを塗ったようにきらきらしているのが自慢だった。
　――今度、お姉ちゃんのピンクのマニキュアで、小指だけ塗ってこようかな。

「どうしたの、立村くん、なんか私、まずいこと言った？」

「いいや、あのさ、さっきのことなんだけど、杉浦さん、それ以上、何も言わなかったか」
「別に？　加奈子ちゃん、あまりしゃべらない子だから」
「裏のことも知らないよな」
「あたりまえ、三人の秘密にしてあるんだから」
「そうか、それならよかった」
　立村くんは問題集を閉じた。同時に、結城評議委員長の声が響いた。
「それでは、本日の評議委員会を終わります。それと、二年評議の本条、ちょっと残ってもらえないか」
　前の方で議題をまとめていた本条先輩が、ひょいと立村くんの方を見て手招きしていた。用があるのだろう。立村くんは私の方を全く見ずに、急ぎ足で教壇の方に向かった。
なんともなしに、他の男子評議委員も周りに集まりはじめていた。男子と女子がなんとなく、分裂した感じだった。私は自分のノートをしまい込み、後ろにたまっている女子評議委員とおしゃれの話に花を咲かせた。こっそりリップクリームを交換しあったりしていた。
「ほんのりももいろリップ」という、ちょっと色のついているリップクリームを塗ってみて、鏡でみたつやが気に入り、今度、買うことに決めたりした。やがて、男子評議委員グループはまとまって教室を出て行った。何か相談ごとでもあるのだろう。評議委員会ではいつものことだ。
　男子と女子の間に入ることのできない空気が、その時は存在していた。

　先輩たちに遠慮して、私たち一年女子評議委員は家庭科室に場所を移動した。そこでは、こずえがひとりで足踏みミシンを踏んでいるはずだった。空調完備近代的な青大附中になぜ、足踏みミシンが残っているのかが不思議だ。家庭科の課題はパジャマだった。電動ミシンだってきちんと揃っているのだから、素直にそれで縫えば丸くおさまるのに、なぜかこずえは足踏みミシンにこだわった。
「すぐに止まってしまう軟弱さが、どこかいいのよ」
　こずえは不器用にミシン板を踏み踏みしていた。
「どう、できそう？」
「うん、あとボタンのかがりだけ」
「ほとんどミシンなんて使わないじゃない。なんで、こんなところに閉じこもっているわけ？家庭科の先生もいないからいいけど」
「何をおっしゃいます美里さん、ここはね、青大附中の裏事情がてんこもりの場所なのよね。隣、工作室だって知っているでしょ」
「工作室は男子のみだもんね」
「でしょ、壁越しに、男子の会話が丸聞こえなのよね」
　どの教室も、鍵は教師あずかりのもと、責任を持って借りにいくことになている。こずえは何かの機会にこっそり合鍵をこしらえたという。あまり家庭科室、工作室には先生が出入りしないし、もし顔を出されても「事務室から借りました」しれっと言い訳しておけばこちらのもの。おそらくこずえ以外の生徒もやっていることだろう。

「うちのクラスの連中も、いた？」
「くるよ、今日はいないけど。すっごく、えっちな話しまくっていたよ」
　こずえは猥談が得意だった。旅行の夜などは独断場。よくこんなねたを仕入れてくるもんだと思うくらい、よく、知っている。
　よくある雑誌のＡＢＣ情報だけではない。現実に即した青大附中内での恋愛沙汰などもすぐに仕入れてくる。ほとんどそれはがせねたではなかったところがすごかった。
　どこぞの先輩は二年の先輩といい線行っていて、このまえホテルに入るところを目撃されて停学くらったとか。
　二年の某先輩は、学外の女子の家にしょっちゅう遊びに行っていて、大人のお付き合いをしまくっているとか。
　一年のなんとかさんは彼氏がいて、Ｂまで進んだとか。
　どこでそんなネタを仕入れてくるんだろうと思っていたが男子からの直情報はうまみがある。一年の男子が『好みと偏見によるアダルトビデオベストテン』について語り合っていたという話もこずえからだった。もちろんそんなビデオの題名はよくわからないけれど、『出ている女の子がクラスのだれそれに似ている』という話まで出てくると、これは他人事ではなくなる。
　一ヶ月前だったら私もきゃあきゃあと笑いこけていられただろう。私にも二歳年上の姉がいる。姉と彼氏が、親に隠れて何をしているか、大体知っているし、たまにおどして洋服を貸してもらったりもする。母に言いつけるようなおりこうさんではない。
「こずえの大好きな私の幼馴染は、どんなすけべ話していたのかな」
「羽飛は……さすが、趣味がいいよね。元気で明るい子が好きだってさ。私みたいに」
　一同、爆笑した。こずえも笑っていた。こずえの恋心は、ここにいる女子評議みな、知っている。
「でね、今回わかったことがあるんだけどね。美里は、ひそかにもてもてだってこと」

　榎本の部屋で感じた、えたいの知れない恐怖感が、まだ私からは離れていなかった。
　もてている、というこずえの言葉に、思わず身震いした。
　――あいつと、あんなことするなんて。貴史とあんなことするなんて、立村くんと、あんなことするなんて。いやだ。絶対にいやだ。
　唇が細かく震えているのを見破られないでよかった。言葉ですぐにごまかした。
「誰によ、誰に。そんな奴いるわけないじゃない。名前、全部出してみてよ。私ね、青大附中に来てから、変なこと一度もしてないから」
　私を好いてくれている人がいるなんて、信じられなかった。
「知りたそうな顔しているよね、美里ってば。ね。じゃあ、美里、思い当たる男子、誰でもいいから言ってみてよ。結構近いとこにいるかもよ」
　三人で顔を見合わせた。どのくらい近いのかわからなかった。隣でパジャマをいじくっていた評議委員仲間が、あいつだ、こいつだと、適当にＤ組の男子名を挙げていった。
「羽飛でないことは確かなんだよね」

　これはお約束だった。
「井上くん？って感じでもないか。あと菅原くん？」
「違う違う。さあて、美里、誰だと思う？」
　私は考えるふりをした。
　かまかけてみようかな。
「もしかして、立村くん？」
　さらっと言ったつもりだった。でも来たのは、沈黙だった。こずえのが何気なくかしいだような気がした。
「え？　もっかい言ってみてよ。立村のこと？」
「なにって、いや、もしかしたら、立村くんあたりかなあ、って思って。おんなじ評議委員だし、近いとしたら」
　他の評議仲間が顔を見合わせていた。そして思い立ったように、Ａ組の評議をしている子がこずえに尋ねた。
「ねえねえ、こずえちゃん、この質問って、この前テレビ番組の心理ゲームで出たものだよね。最初に浮かんだ人がってやつ」
「ああ、ネタばれしないで！」
「ということは、もしかして美里が好きな男子って、立村くんだってことになるのかな」
　正真正銘、今度は頬が熱くなっていく。心臓ががんがん鳴り響いた。女子同士ゆえ、隠せない。
「ど、どういうこと？　こずえ、もしかして『心理テスト』したの？」
「はは、ばれちゃったら仕方ないな。そうだよ。これはね、『自分のことを好きでいてくれる人が誰かと聞かれて、最初に浮かんだ相手が、貴女の好きな人です』って心理テスト。誰かに試してみたかったんだけどな。でもさ、美里、最初に浮かんだ相手が、本当に立村なの？　羽飛じゃなくって」
　鈍すぎる自分に腹が立つ。誘導尋問に気付かなかった私がおばかだった。
「たまたまよ、たまたま。それに貴史とのことは、いやってほど聞いているでしょ。噂になるのもあきあきしたっていうか。仲のいい友達であって、それ以上じゃないってば」
「で、最初に浮かんだのが、立村ねえ。美里の理想とする『白馬の王子さま』的雰囲気は、持っているかもしれないね。よけいなことしなければ」
　こずえは口を抑えた。笑顔でいっぱいになる。
「そうかあ、羽飛じゃないんだあ、そっかあ、よかったあ！」
　戸惑いながら、自分が隠してきた秘密がばれたことにどうすればいいのか困り果てていた。たぶんこずえのことだから、黙っているなんてことはないだろう。ばれてしまうかもしれない。それ以上に、評議委員仲間の前で知られてしまったというのも、痛かった。
　委員会内で好きな人が出来た場合、うまくいけばいいけれど、行かなかったら悲劇だ。

　ライバルがいなくなったことに狂喜乱舞しているこずえを、冷静に見つめている様子の評議仲

間がいた。私はふと、Ｃ組の評議委員が口ごもっているのに気付き、促した。
「ねえ、ゆいちゃん、何か、いいたそうだね」
「うん、美里、確かに立村くんは美里のこと、意識しているんじゃないかな、とは思っていたんだ。委員会の間も、すごくしゃべっているしね。でも」
　ゆいちゃんはしばらく言いよどんだ。目でＡ組、Ｂ組の評議委員に合図を送っていた。二人も何かに気付いたように、気まずそうにうなだれていた。
「でも、何？」
　ついにばれてしまった秘密が、漏れてしまうのもかまわず、私は『でも』にこだわった。Ｂ組の評議委員が思い切ったように口を切った。
「っていうか、立村くん、最近、Ｄ組の杉浦さんと付き合っているって噂、あるんだよね」
「杉浦加奈子ちゃん？　同じ班だけど、聞いたことないよ。班が一緒だから話ことはあるかもしれないけど」
「付き合っているとこまでは行かないのかもしれないけど、最近ふたりっきりで、図書館とか、廊下にいるところを見るんだよね。美里は、気付いてなかった？」
　こずえと顔を見合わせた。首を振っている。私も初耳だった。
「なんでもなかったら、いきなりふたりっきりでひそひそ話したりしないよね」
「私、本当にみたことないよ、立村くんと、加奈子ちゃんがふたりっきりでいるところなんて」
　こずえの援護射撃も届かなかった。ゆいちゃんは、ごめんね、ごめんねと言いながら、さらに続けた。
「確か、夏休みが終わったあたりだったかな。美里がたまたまいなかった時、Ｄ組の教室に用事があって行ったの。そうしたら、誰もいない教室で、立村くんと杉浦さんが窓辺に寄りかかって、何か深刻そうな顔して話していたの」
「深刻そうにって？」
「話は聞こえなかったの。でも、真剣そうだった。私が美里いないかしら、って聞いたら、杉浦さんが教えてくれた。立村くんは、どうしたのか、様子がおかしかった。ずっと窓の外を見つめていたの」
　ゆいちゃんの言葉は、最後にとどめを指した。
「それ……ってね。先週も、見たの。杉浦さんが尋ねていたの。あの口調で、『清坂さんに話していいの』って。たぶん、杉浦さんも美里のことを気にしていたんだと思うのね。だから、どちらも隠していたのかなって、思って」

　――何を、話していたの？
　――何を、隠しているの？
　――何を、加奈子ちゃんとしているの？

　私はもう、こずえも、評議の仲良したちも、一気に見えなくなった。縫いかけの水色七部袖パジャマがただ、淡い水色に変わり、すぐに白いもやに溶けていった。

　こずえがハンカチを大急ぎで出してくれた。でもその色も赤なのか黄色なのかわからなかった。揺れるそのハンカチは、消えかけていた妄想をうごめき立たせていた。
　あの日、榎本が想像していたであろう私の妄想。
　それはいつしか立村くんの目に映る、加奈子ちゃんへの妄想に重なっていきそうだった。
　立村くんも、加奈子ちゃんをなめまわすようなまなざしで見つめていたのだろうか。
「ごめん、きっと、偶然だよね。まさか、美里が、立村くんのこと、本気で好きだなんて、思ってなかったから。つい、冗談で言っただけだって。ね、みんな、そうだよね」
　ごめんね、と言いながらもどうしても押さえきれなかった。私は顔を上げられなかった。
　思い当たる節があるのだから。
　委員会の時も、『杉浦さん』という言葉に、過敏に反応していたのは感じていた。
　貴史の部屋でも、『杉浦さんが文集委員をする』という話を、ためらいがちにしていたのも、気になっていた。
　私が、ひとり舞い上がって目をつぶっていただけだったのだろう。
　凍りついたように、立村くんは私の指先だけを見つめたいた。
　私もくもっていくこずえのハンカチしか見えないし、見つめられなかった。

　こずえのハンカチをびしょびしょにしてしまったので、帰り道、文房具屋でかわいいのを買って返した。
　こずえもまさか、私が立村くんのことを本気で片思いしているとは思っていなかったらしい。散々、目の前で「あいつはガキなのよ」を連発していたのだから、当然かもしれないけれど。
　貴史を巡るライバルという誤解が解けたのが救いだった。急展開に驚き、慌てながらも、こずえは私の家まで送っていった。
　本当は貴史の家の前を、わざと通って帰りたかったんじゃないだろうか。
「ゆいちゃんの話していた、立村と加奈子さんの噂、なんだか眉唾もんだよね。いやね、ゆいちゃんたちを疑うわけじゃないよ。だけど、普通だったらＤ組の中でもっと噂になってもいいはずだよ」
「わかんないよ。そんなの、みんな気付かなかっただけかもしれないし。加奈子ちゃん、誰とでも仲がいいから」
　泣き晴らした顔を見られたくなくて、私はうつむいたまま歩いた。
「私みたいに、よけいなことしゃべる女子、好きじゃないのかもしれないし」
「ばか、そんなことないよ。私ね、どちらかいうと立村のタイプって、美里みたいな感じじゃないかって思うな」
「なぐさめてくれているんだよね。わかっている」
　うわっつらのなぐさめに思えて、さらに泣けた。
「あのさ、美里、よく考えてみなよ。この前の班ノートのこと覚えている？　道徳の授業で、『いじめで自殺した中学生』の話。立村があの時、自分もひどいいじめを受けていたようなこと書いていたよね」

「うん、覚えている。こずえはむかついたみたいだけど」
「まあね、でも誤解しないでよ。私は立村を嫌っているわけじゃないから。絶対恋愛対象にはならないけど、いい奴だとは思っているからね」
　こずえは一呼吸おいて、さらに続けた。
「私ね、立村がいじめられていたとすれば、あの冷静沈着っぽく見せる、あの性格に問題あったんじゃないかなって思うのよ。言いたいことを言わないっていうのかなあ。自分で全部背負ってしまうようなとこ、あるでしょ。美里も一緒にいること多いから、わかるでしょ」
　わかる、それは誰よりも、わかっているつもりだった。六月の学年集会の時も、話に聞いた宿泊研修の騒ぎの時も。
　先生に怒られても、自分でなんとかしようとする姿は、こずえよりよく見ているつもりだった。
「で、それがね、うちの弟と同じやり方なんだよね。羽飛とか私とか、美里とかだったら、むかついた相手に何かをはっきり言うじゃない。その場で。でも、うちの弟って、根に持つんだよね。表向きへらへらするから、こっちとしたらさらに頭にくるのよ。で、最後にがまんできなくなってものを壊すかなにかしちゃう」
「人を殺しそうになったって書いていたもんね」
「その場で言いたいこと言ってすっきりするのが、私のやり方なんだけど、うちの弟には全然通じないのよ。たまに見るんだ、一人でこっそり泣いているとこ」
　私は、その日の道徳授業のことなんてほとんど覚えていなかった。当時話題に上っていたいじめ問題についてはあまり、身につまされたことがなかったからだろう。『担任の生徒いじめ』だったら書きたいことはいっぱいあったけれども。
　ただ、死んでしまうことは、負けだと思っていた。どんなに歯を食いしばっても生きてなくちゃ、意味がない。
　自殺して告発するよりももっといい方法があったんじゃないだろうか。
　クラスの意見は大抵そんなものだった。立村くんは何も発言せず、ぼんやりと窓の外を見ていた。つまらなかったんだろう。
　まさか、あそこまではっきりと、感想を書くとは、私自身思っていなかった。恐らく『裏・ノート』のからみだろうと、想像はしていた。
　もちろん、裏ノートの存在を知らないこずえにそんなことはいえなかった。
「でもね、やはり弟ってめんこいとこあるのよ。私に思い余って、相談してくる時もあってね。そういう時は、私なりにやさしくアドバイスしてやるんだよね。そういうところが結構素直でさ」
　こずえのやさしさ、という表現は非常に解釈が難しい。
「だから私が言いたいのは、立村って、かなり頼れるお姉さんタイプが好きなんじゃないかな、って思うのよ。美里みたいに、いろいろ世話やいてあげるタイプ。数学の授業ではこっそり問題を解いてあげたりしているんでしょ。知っているぞ。そのくらい」
「だって、評議委員会一緒だから」

「うちの弟が、加奈子ちゃんタイプのような、守ってあげたくなるようなおとなしい子、好きになると思えないもんね。大丈夫よ、美里。私もこれから協力するからさ。もし、立村が加奈子ちゃんに血迷っていたら、思いっきり面倒みてやって、こっち向かせなさいって」
　ほんの少し、ほっとした。でも口から出るのは、不安ばかりだった。
「こずえの弟くんと立村くんが似ていれば、ね」
「絶対そっくり！　話せば話すほど、本当に思うよ。立村って、ほんとうちの弟とおんなじだよねって」

　夕食後、私は立村くんの住んでいる街と、底に続く公立中学の地域を確認すべく、地図を取り出した。
　品山町に住む中学生はたいてい、公立の本品山中学に通うことになっているはずだった。
　本品山中学。榎本の通っている、学校だった。

その七　ほんとうのことを知りたいけど

　廊下の窓からはななかまどのひからびた実が、ふらふら揺れていた。
　もう分厚いコートを着ないと耐えられない寒さだった。
　――明日からダッフルコートを用意しようっと。
　評議委員会の時に貸してもらったリップクリームの、ちょっと濃い色のも買っておこうと決めた。

　次の日、立村くんに『高校入試レベルの数学問題』の答えを渡した。
「いつもありがとう、なんだか、申しわけない」
「いいよいいよ、お互い様なんだから。今度借りは返してもらうから」
　軽口を叩きながら席に付き、隣の加奈子ちゃんをちらっと見やった。相変わらず準備を万端に整えて、教科書、問題集、ノートを開いていた。
「おはよう、加奈子ちゃん」
　おだやかな笑顔で加奈子ちゃんはうなずいた。私の見た限り、やきもちを焼いたそぶりはなく立村くんの方を見るでもなかった。まだこずえは来ていない。
「私、この問題、難しくて途中までしかわからなかったの」
　抑揚のない声で加奈子ちゃんは私を見てもう一度微笑んだ。
「清坂さん、どう解いたの？」
「どの問題かなあ。加奈子ちゃんが当たっていた問題ってどれだっけ」
「ううん、それは大丈夫なの。この、問題なの」
　指差したのは、立村くんが当てられた、星印三つの問題だった。
「いちおう、うちでやってみたんだけど、難しいの。できなくて。清坂さん、よかったら教えてね」
　ざわつく気持を落ち着かせながら、私はノートを開いた。立村くんに渡したとおりの答えを、そのまま加奈子ちゃんに見せて写してもらった。
「ありがとう、やはり、予習しておいた問題が解けないのって、おちつかないから」
　私の表情が硬くなったのに気付かぬ様子で、加奈子ちゃんはお礼を言ってくれた。

「やったあ！　今日も自習だあ！」
　貴史がチャイムと同時に飛び込んできた。遅刻ではない。恐らく早めについた後、職員室かどこかで油を売っていたのだろう。生活指導の先生に、服装の乱れをチェックされたのかもしれない。
「しまった、数学の先生とこ行くの忘れていた。貴史、ねえねえ、本当に今日自習って言っていた？」

「ほんとほんと。なんか数学関係の先生がみーんな、研修か何かに出かけるんだってさ。よかったなあ、立村。今日も数学で地獄見ないでさ」
「拷問から逃れたってことだよな。でも数学だったら、自習用のプリント用意されているかもしれないな。取りに行ってくるか」
　立村くんは立ち上がり、私の方だけ見て声を掛けた。
「とりあえず、問題集の借りは、ここで返しておくからさ」
「代わりに行ってくれるの？　ありがと！」
　目線が際どかった。無理やり隣の加奈子ちゃんを見ないようにしている風だった。ドアを開けた拍子にこずえがこけそうになりながら入ってきた。
「わあ、びっくりした。立村、どこいくのよ」
「数学の自習課題、取りに行ってくるだけだよ」
「ふうん」
　私の隣にすぐ座り、こずえはにやにやしながら私を小突いた。
「いい感じじゃない。チャンスよチャンス」
「良くないってば」
　あくまでも、加奈子ちゃんに聞こえないように。こずえもそのことはよく気遣ってくれていたようだった。
「でも、ま、いっか。って感じかな。今は」
「やっぱり嬉しかったんでしょ。立村もずいぶん気を利かしたことするじゃない。あとでね、立村に聞いてみるね。美里が知りたがっていることをね」
「何よいったい。変なこと、言わないでよ！絶対ばれたらやだからね」
「大丈夫よ、絶対ばれないからってば」

　立村くんが大量のプリントを抱えて戻ってきた。自習が前もってわかっていた、ということで、先生たちはちゃんと自習用プリントを用意してくれていた。大きなお世話、うんざりというのが本音だ。
「なにそれ。一人何枚配れって言うのよ」
「十種類あるって言っていた。どうしようか、まず、分けてから全員に配るか。大変だな」
　全部を自分で配らなくてはならないと思い込んでいるらしかった。一人一人綴じたものを、いつも渡すものだと思っているようだった。
「そんな面倒なことしなくてもいいよ。ね、給食台、きれいでしょ。そこに並べて、各自一枚ずつ取っていってもらおうか。それの方が楽だよ」
「そうしようか。全員に渡すなんて気が狂いそうになるもんな」
　私はすぐに立ち上がり、立村くんから半分、プリントを受け取った。すばやく、給食台の上に十種類のプリントを並べ、
「悪いけど、上から一枚ずつ、もらっていってくれる？　全部で十枚あるから、間違えないでね」

と声を掛けた。
　がやがや、全員が立ち上がり列を作ることなく適当に上からもらっていってくれた。あっという間だった。
「立村くん、いつも自分ひとりで抱え込まなくていいよ。みんなにやってもらえることは、やってもらおうよ」
「うん……でも、なんだか仕事、さぼっているような気もするな」
　申しわけなさそうな表情でつぶやいている立村くんに、私は強い口調で言い返した。
「なに言っているのよ。立村くんはいつもやることやっているじゃない。評議委員として十分過ぎるくらいだよ。これ以上、何好かれようとするの」
「ごめん、また変な」
「変なこと言ってないから、あやまんなくたっていいよ」

　前の日にこずえが言った言葉を、あらためて思い返していた。

「私ね、立村がいじめられていたとすれば、あの冷静沈着っぽく見せる、あの性格に問題あったんじゃないかなって思うのよ。言いたいことを言わないっていうのかなあ。自分で全部背負ってしまうようなとこ、あるでしょ。美里も一緒にいること多いから、わかるでしょ」

　どうしてあそこまで立村くんは、人によく思われようとするのだろうか。
　前の夜ずっと考えていたことだった。
　『裏・ノート』のような、菱本先生をばかにするようなことを平気で考え出すくせに、Ｄ組の生徒や先輩たち、もちろん私たちになんとか、受け入れてもらおうとしている様子がなんだか気になっていた。
　貴史が私に話した通り、立村くんは『暗い過去』を抱えているのだろう。私は確信していた。たぶん、いじめられていたか何かしたのだろうし、表の班ノートに書いてあったことも、多少は事実なのだろう。「本当は違うんだ」と言いながらも、どの人にもよく思われようとしているのが見え見えだった。
　小学校時代の私だったら、こういう人を好きになっていただろうか。見た目は好みでも、大抵はいつも、失望して熱が冷めてしまうタイプのはずだった。
　立村くんにはなぜか、違う感情が湧いていた。

　もっと、立村くんのことを知りたい、
　本当に言いたいことを、聞いてあげたい。
　今の私だったら、味方になってあげられるかもしれないのに。
　私は、今の立村くんがひたむきに私と貴史に向かってきてくれるのが、嬉しかった。
　だから、受け止めてあげたかった。
　――加奈子ちゃんじゃなくたっていいじゃない。

――私の方がずっと、わかってあげられるよ。
――だから、話してくれたっていいじゃない。

思い立ったらすぐに行動せずにはいられない私の性格。数学の自習時間が終り、次の授業は英語だった。
　チャイムが鳴り、立村くんはすぐに職員室へ向かった。こずえは別の女子のところでなにやら本を借りているようだった。
　うちの班員は、幸い貴史と私だけだった。振り向いて私は、貴史に目配せした。
「ちょっと待て、このプリント、量が多くて片付かなねえよ」
「そんなの後で言いから、ちょっと廊下まで来て」
　ちっと舌打ちしたものの、貴史も私の表情に何かを感じたのかすぐに立ち上がった。
「すぐだろ、廊下寒いんだよな。美里早くしろよ」
　廊下からまだ、立村くんが戻ってきていないことを確認した後、私は廊下の窓際へ貴史を引っ張っていった。窓からかすかに糸をひいたような風がすり抜けた。
　首筋だけちょっとひんやりとした。
「貴史、ちょっと確認したいんだけどね。あのこと、今でも調べている？」
「あのことってなんだよ。言えないことかよ」
「『裏ノート』の過去のこと」
　あいまいな言い方だったけれど、貴史はすぐに勘付いてくれた。
「……美里。だいたいもうわかっているだろ。あいつ本人が、本当のこと書いているんだからな。俺はもう、探る必要ないんじゃないかって思っている」
　十一月十四日の日記にあることはすぐに気付いた。
「ミイラ取りが、ミイラになったって、ことよね」
「まあな。あいつは暗い過去を、班ノートで作ったつもりでいるぜ。自分にはこういうことなんてなかったと言いたいんだろうな。『裏・ノート』でもそう言い訳しているし。でもな、あいつの過去が本物であろうがなかろうが、どうだっていいような気がしてきた」
「過去を知って、立村くんと親友づきあいしたいって、言っていたくせに」
「そんなにいじめられていたってことが隠したい過去なのかよ。女々しい奴だぜ。いまさら俺が、立村のこと嫌いになるなんてことないってのにな」
　貴史の言うことはいちいちごもっともだった。
「あんたの言うことは正しいと思う。でもね、貴史。私ね、あれが、立村くんの隠しておきたかった過去だったとしても嫌いにならないけどね。けど、今は、なんか、知らないままではいたくないんだ」
「何を聞き出せって言うんだよ。あいつに恥をかかせたいのかよ」
「ううん、違う。立村くんはもっと、別のことを隠していると思うんだ。本当のことがわかったら、うんとうなずいて、知らん顔できるよ。でも、知らないままだと、またよけいな想像してしまいそうで怖いんだ。いじめられていたとしても、それを隠そうとするのには、もっと別の理

由があるんだと思うのね。私」
「たぶん、あるだろうな。俺たちにも気付かれたくないこととかな」
「このままだと、私も貴史も、立村くんを、やたらと人の顔色ばかり見ている奴だと決め付けてしまいそうで、私、それが嫌なんだ。他の女子とかは、立村くんのことを『よくわからない人』って言っている。このまま、『裏・ノート』の存在を、他の女子に知られるよう話していくと、きっと立村くんのことを悪く取る人が出てくると思う。私、それは絶対嫌だから」
　言葉が自分でもわけのわからないまま飛び出してきた。
　貴史はポケットに手をつっこみ、つま先で壁を蹴った。
「つまり、お前、立村の秘密を握って、さらに引き寄せようって魂胆かよ。美里って、そういうところは頭働くから怖いんだよなあ」
「貴史、手伝ってくれるよね」
　前から知りたい知りたいと思っていて、できなかったことをどうしてもしたかった。
　貴史と一緒だったら、絶対うまくいくに決まっているから。
「お前って、やっぱり変な女だよな」
　貴史は何も言わずに教室へ戻った。私は後を追おうとして、やめた。しばらく窓ガラスの側にたたずんでいた。
　窓を閉めれば、うごめく怪しい妄想の影。
　あんなことを言ってしまったけれど、本当に私は、立村くんの過去を受け止められるのだろうか。
　窓の向こうにはひからびたななかまど。手を伸ばせばとどくけれど、窓を開けて、きりつけるを跳ね返して、つまむことができるのだろうか。

その八　夕暮れの再会

「あとで食い物代返せよ！ったく、金かかることしか思いつかねえ奴だぜ」
　貴史が激怒しているのももっともだ。羽飛家のこずかい額は小学時代千円、中学で三千円、高校入学後にようやく五千円と定められている。
「絶対、中学に入ったらバイトしてやる！」というのが貴史の口癖だった。もっとも知っているのは、私くらいだろう。学校側に禁止されていることもあり、貴史はなかなかバイト先を見つけられずにいた。
「だから、今のうちにバイト先の下見しておけばいいでしょうが。時給も五百円ってことだし」
「ファーストフード屋で働けってかよ。そんな人の多いところにいたら、一発でつかまっちまうに決まっているだろ。頭が働かないのか、お前は」
「だからって、他にどういうバイトある？　お正月のしめなわ飾りバイトもあるけど、今年の末まで待たなくちゃ」
「ちくしょう、父ちゃん母ちゃんはバイトオッケーだっていうのに、なんで学校がだめなんだよ」
　あの日のななかまどは、すでに枝から落ちた。十一月のごくわずかに光る太陽。それも夕暮れ色に刻々と食いつぶされてゆく。せっかくのお天気だというのに、貴史と私は太陽を無視してハンバーガーを食べていた。
　本当は外食も校則で禁じられている。外食は校内の学生食堂のみだった。
「このあたりって、青大附中の奴って見かけねえよなあ」
「制服、みな学生服だよね」
　私たちは客の中で明らかに浮いていた。ちゃんと目立たないトイレの前にあるボックス席を押さえておいたのも、そのせいだ。そうでもしなければ、学生服の集団に飲み込まれてしまい、妙に覚えられてしまうだろう。制服を脱いでくればよかった。
　家から三十分以上かかるこの店。ハンバーガーチェーンの本品山店だった。
　勢いでここまで濃いできてしまった。次の日まで考えたら、たぶん来る根性はなくなるだろう。だから私は貴史を、放課後すぐにこの店まで連れてきた。
「小学校で言えば、品山小学校と本品山小学校の中間地点ってとこよね。立村くんもこの辺で遊んでいた口じゃない」
「金があれば、の話だろ」
「どうしてあんたはそうわびしいことばかり言うのよ」
　幸い私にはまだ、経済的に余裕があった。小遣い額五千円に加え必要によってはプラスアルファーしてもらえる、清坂家の余裕を見せつけるように。
　ポテトを追加した。指差して、食べるよう促した。
　もぐもぐと、貴史は礼も言わずに食べつづけた。どう見たって、私と貴史がデートしているよ

うには見えないだろう。
　でも絶対、立村くんには知られたくなかった。

「ところでだ、さっきの話」
　口に塩のつぶつぶをつけたまま貴史は切り出した。
「本当にそいつが、立村の過去を知っているのかよ」
「わからないけど、本品山中学に通っているよ」
「けど、立村とは顔を合わせたことがないんだろ」
「小学校が違うからね。あの児童館に立村くんは出入りしていなかったから、まずないと思うんだ」
「じゃあ、もし、かすっていたらどうするんだよ。美里、そいつに連絡したのかよ」
「今から呼び出すに決まっているじゃない」
「どうやってだよ」
「もうちょっと待とうよ。貴史。もう少し店が空くまでさ」
　私はオレンジジュースを飲み終えた。氷をストローでかちゃかちゃつつき、とろかした。
「班ノート、見せて」
　受け取り、ふわっと開いた。開きやすいページが自然と動いた。
　ここが問題の一ページ。
　これが表か裏か。
　立村くんは裏を主張しているけれど、私と貴史はひそかに表と読んでいる。

十一月十四日　班ノート　立村　上総

　誰にも言いたくない過去はあるだろう。いじめで自殺した中学生の話を聞きながら、いろいろ考えたことがある。
　僕の経験したことに多少似ていたからだ。
　理由はわからないが僕はずっと「いじめられっこ」といわれる人間だったと思う。そんなに人より目立つようなことはしなかったし、むしろ引っ込み思案だったんじゃないだろうか。でも、されたことは、例の中学生とほとんど変わらなかった。
　特に四年生の頃は、何度も死のうと思った。
　五年生の時は、学校に毎日、出刃包丁を持っていった。
　六年生の時は、あぶなく人を殺しそうになった。
　追い詰められると、何をしでかすかわからないと、その時感じた。
　でも僕はまだ救われていた。中学は青大附中に行くことになっていたし、過去のことを気にしないで友達になってくれる同級生がたくさんいた。
　過去を振り捨てることができたと思う。
　でも自殺した中学生の場合、小学校から高校までずっと、加害者の同級生と顔をあわせていな

くてはならない。十二年間いじめられ続けるくらいなら、死を選ぶ彼の気持が、僕には痛いほど、よくわかる。
　ただ、彼には自分を殺すよりも、相手を殺してほしかったと思う。罪になったとしても、生きている方がはるかに幸せだったと思う。
　本当はこういうことを書くつもりではなかった。永遠に忘れてしまいたかった。でも、このクラスの人は、きっとそういう僕の過去をも受け入れてくれるだろうと、信じている。

「あれは、本当にしめられてねえば、書けねえよ」
　貴史はもう一度ノートを取り返し、問題の個所を読み返した。
「これから榎本を呼び出して、立村くんが殺しをやらかしそうになったとかそういうことがわかれば、あの班ノートは表と裏、本当のことだってわかるわけね」
「知って、そうだったらどうするんだよ」
　貴史は最後のポテトをかじり終えた。
「加奈子ちゃんから取り返す」
　さっぱりぴんとこない顔で、貴史は
「杉浦か？」
　と問い返した。あえて私も答えなかった。
　三十分くらい居座っていただろうか。私はテレホンカードを生徒手帳から抜き取り、立ち上がった。
「そいつを、呼び出すのか」
「そう、貴史、スタンバイ、お願い」
　私が、電話ボックスの陰からトイレ正面のボックス席を覗くと、貴史はその斜め後ろに位置する、カウンター席に荷物を移動させた。
　十分声の届く距離だった。

　榎本の電話番号を手元に残しておいてよかった。古い住所録はまだ処分していなかった。
　――こんなかたちで、また逢うことになるなんて。
　大きく息を吸って、ボタンを押す。
　三回コールした後、聞き覚えのある声が名乗った。すぐに自分の苗字を告げた。
「清坂、か。俺です」
「うん、元気？」
　榎本の方がなんとなく意識しているようだった。私は貴史がそばにいるからしゃきしゃきと返事できるけれど、榎本はそんなの知るわけないだろう。
　照れているのかもしれなかった。
「あのね、今、あんたの学校の近くに用があって来たんだ」
「ふうん」
「ハンバーガー屋さん、知っているでしょ。すぐそばだよ。本品山中学の」

　榎本ははっと息を呑んだようだった。しばらく沈黙が続いた。
「でね、ちょっと、榎本に教えてほしいことがあるんだ。出てきて、ちょっとだけ、話しない？」
「俺の家なら駄目か。今誰もいないし」
「いいよ、私、おごるから」
　きっぱりと私は答えた。家に行きたくない、とは言えなかった。
「じゃ、私、来るまで待っている」
「え？　おい、清坂、どうかしたのかよ」
　慌てた声がびんびんと響く。私は店の名前を二回繰り返した後、一方的に受話器を置いた。貴史とすれ違いざまに目が合い、軽くうなずいた。
　元いたボックス席にひとりで座り、かばんから薄いアルバムを取り出した。
　秋の写生会の際、菱本先生が写したスナップ写真と、クラス団体写真が混じっていた。班行動も多かったから、メンバーも同じ顔ぶれが揃っていた。
　一枚だけ、私と立村くんが斜に隣り合っている写真があった。別にツーショットを狙ったわけではない。立村くんの隣に座っていた貴史がたまたま入らなかっただけだ。
　ひそかに一番のお気に入りである。

　そんなに待たされないだろうとたかをくくっていた私だった。でも榎本が姿をあらわしたのは夕暮れも終わりかけの頃だった。貴史とはそれから一言も口を利かずにいた。退屈だけどしょうがなかった。
　手を振り、トイレの前のボックス席に榎本を呼んだ。榎本は漂白したジーンズに、濃紺のTシャツを表出しし、黒いジャンバーを引っ掛けていた。ジーンズが少しきつそうだった。
「来てくれたんだ」
　アルバムを閉じ、ほろりと私はつぶやいた。
「待っていたんだろ」
　ジャンバーを脱がないまま、榎本は私と向かい合わせに座った。私が制服のままで来たのに戸惑った様子だった。
「学校から、まっすぐきたのか」
「家から、遠いもの。それより、なんか、頼んだら？　さっき言ったけど、私おごる」
　すぐに本題にはいりたかったが、そこはがまんした。安心して話すためには、まず飲み物が欲しかった。
　榎本はコーヒーを二杯分持ってきた。氷を溶かしきって飲むものがない私の分だった。
「私、頼もうと思っていたんだ。いくらだった？　払うよ」
「いいっていいって、清坂、俺のおごりだって」
「なんかやだな、そういうの」
　財布を取り出し二人分、四百円を取り出すが、榎本は何度も手を振った。
「それよか、俺に聞きたいことって、なんだよ」

　指先を榎本はカップの柄でいやしていた。私の持っているアルバムに向けた。私はまだ、それを開いていなかった。
　もちろん榎本に見せるために持ってきたものだから、勝手に見てもらおう。
「これ、見て欲しいんだけど、いいかな」
　私は真中あたりの写真を見開きにして差し出した。どの写真にも、撮影年月日がプリントされていた。九月の初め、二学期が始まって学校祭がひと段落した頃だった。
「附中の、遠足か？」
「本品山でも行くでしょ」
「まあな、でも附中って写生会やるんだなあ。すごいよ。俺たちなんて、登山だぜ」
「あ、それなら五月に終わっちゃった」
　画板や、絵の具を持って、制服のままで野原に出る、そういうことが榎本には珍しく思えたらしい。
「なぜ、ジャージを着てないんだ？　みんな制服だよな」
　事細かに聞かれ、私もそれなりに答えた。
「前開きの白いジャージで、水色のラインがひいてあるの。すぐ汚れるから、二着買っておくのが常識なんだ」
「俺たちなんかかぶりのやつだ、いいよな、前あきだったら、すぐ脱げてさ」
　榎本は二、三ページめくって、また尋ねた。
「こんなかに俺の知り合いでもいるのか」
「小学校はいないかもね。でも、見たことある人、いたら教えて欲しいの」
　私は立村くんの写っているページへの反応を注意していたけれど、榎本の指先に反応は見られなかった。例のツーショット写真も、榎本にはすれ違いの一枚としか見えなかったらしい。ページがゆれるたびに、私は息を止めた。
　全部見終わって、榎本は私に向き直った。
「一人、もしかしてって、奴はいるけど」
「誰？」
「この子。よくこの辺で、クラスの奴と歩いている」
　指差したのは、女子班員三人のスナップ写真だった。私、こずえ、そして加奈子ちゃんがアップで写っていた。
　膝を抱えて加奈子ちゃんは微笑んでいた。
　榎本の指は、加奈子ちゃんの顔、真っ正面をついていた。

「週に一回は必ず、校門のとこで待っているんだ。本品山ではちょっと有名だよ。彼女なんだってさ。附中の制服着ているから、清坂のこと知っているかなあと思っていたけど、やっぱり友達の彼女だから、あまり聞けないよなあ」
「それって、いつから？」
「入学してからすぐ。そいつがいうには、六年の頃から付き合っているって」

「でもこの子、この辺に住んでいないよ。小学校別のはず」
「友達の方が品山なんだ。彼女は確か、塾で知り合ったって言っていた」
　貴史が週刊誌を丸めている音が聞こえた。音が響く。聞いているようすだった。
「ねえねえ、じゃあ、榎本にも品山の友達って、結構いるんじゃないかなあ」
「そりゃあいるよ。でもどうしてだよ」
「私が知りたいのは、品山小学校のことなんだけどね」
　加奈子ちゃんの秘密も気になるけれど、まずは本題に突っ走った。
「品山中学って、いじめとかあったのかなあ」
「俺、本品山小学校だし、そんなに長くいたわけじゃないから、わからねえよ」
「ちょっとくらいは聞いていない？　その、品山の友達とかからは」
「女みたいに噂話なんて、そうしねえよ」
　無駄かもしれない。でも私は食い下がった。正攻法をあきらめ、方向を変えて突っ込むことにした。コーヒーは苦く、スティックシュガー一本では甘さが足りなかった。榎本が使わなかったもう一本をもらって入れた。
「じゃあさあ、品山小学校の友達で、ボスっぽい奴っていなかった？　あそこの小学校は一学年三クラスしかないって聞いていたから、六年間いると、みんな顔を覚えるって言うし」
「そんな奴のこと調べてどうするんだよ」
「榎本に紹介してもらう」
「清坂を、どう紹介すればいいんだよ。別に彼女ってわけでもないし」
「友達でいいじゃない」
　あっさり流してみたものの、どこか榎本の口調がひっかかった。そりゃあ、別に彼女じゃないから、説明できないだろう。
「やだよ、こっちの立場も考えろ」
　だいぶほっとコーヒーの中身も減っていた。口にするたびにぬるさが舌に転がった。冷えていくのを確かめるたび、私は榎本といる時間の長さを感じた。
「ちょっと待っていろ､思い出してみるからな。清坂は要するに、品山小学校のバトル関係を知りたいんだな。何か、ひどいことされそうになったかして」
「もしかして、聞いている？」
「もうちょっとだ、思い出せるかもしれない」
　私は両手でカップを抱えた。
「品山で番を張っていたとすれば、浜野かな。もしかして、あれかな・・・」
　榎本は、しばらく独り言を繰り返し、『浜野』という名をつぶやいていた。そして、
「違うかもしれねえぞ」
　ひとつの噂を教えてくれた。私のカップもゆっくりと、テーブルに下りた。

「浜野って奴、写真の子と付き合っている奴だ。品山の出身で、結構押しの強い奴でさ。先輩たちもあいつには一目置いている。でもさ、品山の元同級生が言うには、小学校の頃よりはずっと

いい奴になったって口々に言うんだ。俺みたいなのともうまくやっているし、清坂のいうようないじめなんてする奴じゃないんだ。この前、六月くらいに、うちの中学でちょっとした解剖事件が起こってさ」
「なに、その解剖って。サルのこと？」
「違う、気に入らない奴を閉じ込めて、真っ裸にするんだ」
　榎本は目をそらして話を続けた。
「相手は、まあそれをされても当然の奴だった。ちくり魔で、先生へのおべっか使いでさ。でもいじめていたのかどうかは、ちょっと、わからない。浜野は一年の間では顔だから、あいつが無視すれば、大抵許されるんだ。ところが、あいつは今回、大慌てで止めに入ったんだ。服を脱がせていた奴を殴りつけ、無事に片をつけてくれた」
「どうして榎本、そこまで知っているの」
「まあ聞けよ。浜野は『ああいうひ弱な奴ほど、一度切れたら何をしでかすかわからないんだぞ。あまり追い詰めるな』って言い放ったんだ。中にいた品山の連中は、何を言われたかがすぐにピンときたみたいで、解剖はおあずけになった」
「思い当たる節、ねえ」
「俺も気になったから、後で品山の奴らに聞いたとこによると、浜野は小学校の頃、いじめていた奴に卒業式の帰り、一対一の勝負でぼろぼろに負けてしまい、人格が代わっちまったらしいんだ」
「へえ、負けたの」
「土手のサイクリングロードがあるだろ。川沿いの。あそこって叢になっているだろ。そこですれすれまで自転車をぶつけ合い突き落とされ、けがしたらしいんだ。かなりひどかったらしい。浜野のえらいところは、その勝負を誰にも言わないよう、仲間内に命令したんだそうだ。最後まで誰にやられたかを秘密にするよう、したんだそうだ。あいつにとっては屈辱だったんだろうなあ」
「もっとわかりやすく教えて。浜野ってどんな感じの奴なの」
「うん、俺とは正反対のってとこ。口より手が先な奴だけど、どこかやさしいところあってさ。卑怯な手を使ってまで勝とうとはしないんだ。よっぽど腐った奴でないかぎりシカトとかリンチとかでしめたりしないな。あいつ、よく言うんだよ。小学校の時の自分はいやってほど、いきがっていたって。中学に入ってからは、プライドで勝負するようになったって」
　一年のうちにそれだけ力のあるところを見せるのだから、相当の器だろう。そんな奴と仲良くしている榎本の姿も想像できなかった。榎本はどちらかいうと、自分から行動を起こすタイプではなかった。私がななかまどのジャムを受け取った時も、児童館でなんとなくさよならする時も、そしてあの日、私をいつもと違う風のもとで見つめていた時も、何もしようとしなかった。何も手をかけようとしない。ただ、瞳にえたいのしれないものを浮かばせているだけだった。
　それが妄想なのか、憧れなのか、私には想像することしかできないけれど。
　一年前だったら、そんな榎本の内気さに甘えていられた。
　でも今は、児童館に入れない二人がいた。

　制服を脱いでも、戻れない。
「榎本、ひとつ、あんたについて聞いていい？」
　私は榎本に尋ねた。
「あんたって、本当に、その浜野って奴と仲良くしているの？　小学校時代にいじめなんてやっていた奴と、つるんで自分が惨めにならないの？」
　コーヒーが少し温み、やがて冷えた。
　榎本は無言で答えなかった。
「あんた、まさか、解剖に参加していたんじゃないの」
　ここまで言ってしまった。
　隣に貴史がいるから、怖いものなしなのかもしれない自分。私には、榎本が、児童館で遊んでいた頃の榎本と思えなかった。さりげない甘さをただよわせた、おっとりとした少年の姿が消えていた。
「そんなことするわけないだろ！」
　ぼそっと、榎本はつぶやいた。
「そりゃ、清坂の言うとおり、俺も小学校の頃だったらつるみたくない相手だったぞ。あんな奴なんかと一緒にされたくないと思って、それで、それで」
　勢いが消えた。
「青大附中に行きたかったんだ」
　私と一緒に、行きたかった、そう言われるのが怖かった。だから知らん振りしていた。
「けど、そうもいかないだろ。落ちたんだから。しかたなくて本品山中学に行くはめになった時は、すごく恥ずかしくってさあ。あんなに勉強して、それで落ちたのかって言われているようで。そんなとき、浜野たちと球技大会で組むことになったんだ。俺、卓球だけは得意だったから、どんどん負かしていって、学年でトップになったんだ。そうしたら、浜野とか、その仲間とか、今まで付き合いのなかった奴が勝負を申し込んできたんだ。で、少し試合をしたりしているうちに、いろいろなこと話すようになって。少しずつ、遊ぶようになって。多少は、清坂の言うようなことをしていたかもしれない。でも、解剖なんて絶対、やってないからな。かえって、あいつらと会えてよかった、って思っているんだ」
　そして、榎本は私の目をまっすぐ見て、こう言った。
「悪いことしたことない奴なんていないんだって。苦しんだことのない奴だって、いやしないって。そう思うようになってから。俺、楽になったんだ」

しばらく言葉が途絶えた。
　なんと相槌を打てばよいかわからず、私はうつむいた。今の榎本が、浜野という腕っ節の強い奴とつるんでいるという事実が、まだぴんとこなかった。
　変わった榎本というのが、目の前にいる。
　私はただ、榎本の言葉を真っ直ぐに受け止めることしかできなかった。
「さっきの浜野の話だけど、そのあとで本人から聞いたんだ。あいつも、卒業式が終わるまでは

、自分でそんなとんでもないことをしているという意識がなかったって。どういう奴かは知らないけれど、なんかかんかあると、そいつをなぶるのが日常茶飯事になっていたって。浜野だけじゃなくて、品山の連中はみんなそうしていたらしい。ちっとも、おかしいことだと思わなかったって言っていた。卒業式の事件さえなければって」
　殺されかける。殺そうとしたこともある。
　私は『十一月十四日』の一節を頭の中で繰り返した。
「その日、浜野はその相手に呼び出されるかなにかして、川沿いのサイクリングロードで待ち合わせたんだって。闇討ちじゃなくて、決闘だと言っていた。ほら、向こうの川沿い。サイクリングロードに入る直前の踊り場で、自転車でぶつけ合い、倒れたほうが負けというルールで、誰も見ている奴はいなかったらしい。浜野もそういうのはしょっちゅうだからなれていただろうし、もちろん負けるなんて、思っていなかったって。ところが、その相手はものすごい勢いで浜野に向けて突進してきた。そして体当たり。詳しいことはわからないけど、気が付いたらサイクリングロードを見上げる格好になって、全身を思いっきり打って、しばらく動けなかったんだって」
「決闘、ということは、他に立会人とかいなかったの」
「知らねえよ。ただ、それ以来人生観変わったって。そのことをされた理由も、されてしょうがない理由も、わかったような気がしたって。だから、仕返ししようとは思わなかったって。なぜ自分が、そういう気持になったのかを、考えていくって」
　私は手元のアルバムを撫でながら、三ページ目の写真に指を触れた。ここがたしか、秘密のツーショット。
「浜野って奴、性格、いい奴かもしれないね。榎本の友達ってそういうタイプが本当は、よかったんだね」
　皮肉でもなんでもなく、素直に言えた。
「もう、逢わないことにしようね」
　私は立ち上がり、コートを羽織った。夕暮れは落ち、藍色の闇に包まれ、ファーストフード店のライトだけが場違いに明るく輝いていた。外のくらみに身体も溶けていきそうで、私はふらついた。
「待てよ、清坂」
「ごめんね」
「送ってってやるよ」
「いい、大丈夫だから」
　貴史がいるから、とはいえなかった。貴史は身動きせず、雑誌をめくっていた。
　――このまま、動かないでいて。
　――とにかく外に出たいだけ。
　――ごみを捨てて、私と榎本は店を出た。
　自転車の鍵を探し、はずそうとすると、隣に榎本がしゃがみこんだ。
　指がかじかんで、うまくはまらなかった。
「貸せよ」

　榎本の指は軽々とチェーンロックをほどいていった。ありがとう、とつぶやくつもりが、咽元に消えた。熱いものが指先に走った。榎本の手のひらが私の指を包んでいた。
　背中に人通りのあるのを感じた。榎本の手は離れなかった。
「なんで、これっきりにしたいんだよ」
「だって、あんたの目が」
「俺の目がなんだって言うんだよ」
　妄想ばかり見つめているから。私を見つめている時はいつも、児童館の失われた思い出を通してなにかを探している。児童館で卓球をしていた頃の、まだ幼い私を探している。
　ほろ苦い、ななかまどのジャムをなめて、あの時確かに私は榎本のことを思っていた。
　もう、どこにもいないのに。
　口篭もり、私は一番自分に近い言葉をひっぱりだした。
「もう私、あんたの味方、してあげられないもん」
　指が離れた。自転車の鍵がほろりと落ちた。
「だから、これっきりにしようね」
　榎本は言葉を失ってしゃがみこんだままだった。

　本当は今でも嫌いじゃない。
　もし私が立村くんと友達でなかったならば。
　きっと貴史と同じような親友でいたかった。
　でも、もう私は榎本と同じ場所にいられない。

　私はペダルを漕ぎ始めた。私の電話番号、住所も、榎本には一切教えていなかった。榎本が知っているのは、青大附中の清坂美里、それだけだった。
　干からびたななかまどの実をつぶしながら一本道に入ると、後ろからかるい軋み音が近づいてきた。振り返ると、サドルの異様に高い自転車が追いかけてきた。貴史が黙って追いかけてきた。

その九　もうひとりの恋心

　あれから貴史にも班ノートのねたは一切振らなかった、
　なにごともなくページを重ねているのを、私は黙って様子見していた。
　ただ『裏・ノート』自体はいったん休止状態になったらしい。貴史の番に回ってきた後立村くんに回していないらしい。立村くんも全く、そのことには触れなかった。

　――この人が本当に、浜野とかいう番長風の奴と一対一の『決闘』をやらかすだけの、度胸を持っていたのだろうか。
　――この人は本当に、教室へ出刃包丁を持って通っていたのだろうか。
　――この人は本当に、六年間しつこくいじめられてきたんだろうか。
　何度見ても、立村くんの端正な表情と曇りないまなざしは変わることがなかった。榎本の語った物語を噛み砕いた。
　榎本との付き合いを立村くんの過去を知ることにより失い、私は何をしているのだろう？
　何を知りたいのだろう？
「清坂氏、どうした？」
　英語の副読本に関する訳文を、立村くんから写させてもらっていた。立村くんは私にさらりと尋ね、じっと私を観察するように見つめていた。
「ううん、なんでも。訳、ありがとう」
　作り笑顔が醜いことくらい、自分でもわかっていた。
　言わなくちゃいけないのに、なぜ言えないでいるのだろう。
　秘密を知ってしまった以上、私は私なりの考えで立村くんにどう振舞うか、答えを出さなくてはならないのに。
　一週間、私は立村くんのいぶかしげな表情に知らん振りをしつづけた。

「あのさ、立村、この中であんたが好きなのは、どういうタイプ？」
　後ろで今度はこずえが、立村くんの机にアイドル歌手のブロマイドを広げていた。たぶん、芸能雑誌の付録カードだろう。新人歌手ばかりでなく、あのグラビアアイドル『榛名七草』もいた。
「ああ、俺もそれ聞きたいなあ、立村。お前あまりそういうこと言わないだろ。白状しちまえよ」
　悪乗りする貴史の声。私はそっと振り返った。露骨に知りたそうな顔をしていると思われたくなかった。できるだけさりげなく。立村くんの反応はと見ると、無表情のまま、広げられた五枚をじっと見つめているだけ。
「どうしたのよ、かたまっちゃって。目移りしている？」

「いや、なんていうか、誰、これ」
　か細い声で、答えていた。貴史から聞いたとおり、立村くんは芸能ネタがほとんどわからないのだろう。
「立村、テレビとかで見ないの？　名前なんてどうでもいいけどさ、好みくらいはあるでしょうが」
　しばらく黙りこくっている様子なので、貴史が助け舟を出した。
「俺は、鈴蘭優あたりかなあ」
　鈴蘭優、か。と私も割り込んだ。
「貴史、かわいい趣味してるじゃない。まだこの子小学五年生だよ。それってロリコンっていうんだよ」
　鈴蘭優とは、小学生子役出身、私たちの世代よりも少し下の美少女アイドルだった。両耳の上に、髪をおだんごにして結んだヘアースタイルが大人気だった。もっとも私はこの路線が苦手だった。真似はしたくなかった。
「うるせえ、うちの父ちゃん母ちゃんも、年はみっつ離れているんだ」
　ごもっとも。こずえは貴史の趣味に、少し戸惑った表情だったが、
「ふうん、羽飛って年下が好きなんだあ。それはそうと、立村、あんたはどうなのよ。白状しなよ。ね、美里」
　よけいなことを言わないで欲しい。私は黙って立村くんの表情をうかがった。
　――榛名七草だったらどうしよう。
　――私、似ているって言われるんだよ。
　立村くんは一枚一枚、ゆっくりと手にとって眺めた。吟味するまでもないのに。側でこずえがにやにやしながら私をつつき、ちょっとだけむかついた。
「しいてあげれば……、でも、わからないな」
　何かを言おうとして、言葉を飲み込んだ。立村くんはまとめてこずえに手渡し、一言、
「いったい、何を知りたい」
　言葉も穏やかなまま尋ねた。
「ばかだねえ、だから立村、あんたはガキだっていうのよ。お姉さんは情けなくなるわ。ひとりくらい誰か、好みだとかそういうのって感じなかったの？」
「うん、感じない。だから答えられないよ」
「じゃあ、せめてさ、うちのクラスで好みのタイプって、誰？」
「あのさ、人をからかうのもいいかげんにしろよな」
　落ち着いて交わす立村くんと、さらにつっこみつづけるこずえ。
「じゃあ、今のところ、男にしか興味ないんだあ。ホモって奴？」
「ばかばかしい」
　立村くんは呆れ顔で、こずえの質問を打ち切った。
「古川さんの弟、五年生だったんだよな」
「そうだよ、本当にあんたとおんなじ」

「同情するよ。こらえているんだろうな」
　私も立村くんの意見にひそかに同意した。姉弟愛なのだろうが、私だったらちょっとご遠慮したい。
　とりあえず、立村くんの好みがわからなかったのが残念だった。参考にしたかったのだけども。

　加奈子ちゃんはそんな私たちの会話をにこにこ笑って聞いていた。
　榎本から仕入れた情報から、加奈子ちゃんが本品山中学の彼氏もちだということを知り、ずっと注意していたのだが、全然そういうそぶりは見えなかった。
　かなり用心しているのだろうか。
　それと同時に、加奈子ちゃんと立村くんが、いつ落ち合っているのかを、見逃さないよう心がけていた。
　ゆいちゃんが話していたように、他のクラスでは噂になるくらい、二人の様子は目立っていたという。でもどうしてＤ組ではその噂が全く立たなかったのだろう。
　不思議でならなかった。
　加奈子ちゃんは部活にも委員会にも入っていない。掃除が終わるとさっさと家に帰る。
　大急ぎで本品山に向かえば、待ち合わせできないこともない。相手がもし部活をしていたら、多少ゆっくりしていても間に合うだろう。
　加奈子ちゃんは自転車通学だから、その点は保証できる。
　わからないのは、なぜ立村くんと加奈子ちゃんがふたりっきりでいたか。
　私だっていつも立村くんとくっついているわけではないのだから、知らないところで何か行動していたとしてもおかしくはないだろう。
　ただ、加奈子ちゃんと待ち合わせをする、ということ自体がわからなかった。クラスの連中に気付かれないよう、こっそりと待ち合わせ場所を決めて、二人で帰っているのだろうか。
　それ以前に、二人は付き合っているのだろうか。
　貴史にそのあたりを探ってもらおうかとも考えた。でも私の方から頼み込むのはプライドが許さなかった。
　いろいろと妄想が広がり、授業に身が入らなかった。しょっちゅう、宿題を忘れてしまい、友達にノートを借りる日々が続いた。

　仮にだ。立村くんが加奈子ちゃんと付き合っていたとしたら、どういうところを好きになったのだろう。
　加奈子ちゃんはおとなしそうで、どのグループの子とも仲良くできて、それでいて言いたいことはきちんと伝えるだけの、しっかりしたところがある子だ。おとなしそうで芯の強い女子に、男子はきっと弱いのだろう。立村くんを例外として考えることはできない。
　なにかの拍子で、ふらふらっとしたのだろうか。
　でも、加奈子ちゃんには彼氏がいるのだ。噂をあっちこっちに張り巡らせてやりたいけれど、

まだ、それもできなかった。

　ぼんやりしているうちに帰りの時刻がきた。菱本先生のお言葉をいただいた後、起立、礼の号令をかけようとした時、
「ああ、立村、お前は少し残っていろ」
　まただよ、と言いたげな雰囲気が、教室の中に漂った。立村くんが呼び出しを食らうというのは、珍しいことではなかった。本人もため息をついていた。
「かわいそうになあ、お前何やらかした」
「わからない。まあ、いつものようにうまくすかしてくるよ。この前の実力テストで、数学の点数が悪かったからかなあ。羽飛よりなぜ俺の方を呼び立てるのか、理由がわからないよな」
「用事あるなら、待ってようか」
「いや、いいよ。たぶん、お説教は長引くだろう」
　立村くんは号令をかけ終えた後、しぶしぶと職員室に向かおうとした。
　私も、さっさと教室から出ようとした。

「あの、立村くん、いいかしら」
　不意に加奈子ちゃんが立村くんの側に寄った。戸口でふたりはいきなり、二言三言、何か言葉を交わしていた。
　加奈子ちゃんはやわらかい笑顔のままだった。
　呼び止められた立村くんの表情は明らかに曇った。
　何かを約束しているらしい。
　さりげなく寄ろうとして、私は耳をそばだてた。がたがた椅子の音が響く中で、私が聞き取ったのは。
「本品山中学前で、あとで」
　目をそむけたままつぶやいた、立村くんの一言だけだった。
　加奈子ちゃんはにっこり、うなずくと、急ぎ足で教室を出て行った。

　みなさまの誤解をあおるがごとく、私と貴史はふたりで校門を出た。私が誘ったのだ。いつものことだから、Ｄ組の連中は何も言わなかった。ただ、他のクラスの男子だけが、ひゅうひゅう冷やかすこともあった。無視していればいい。どうせ私も貴史も、こんなことは小学校の頃から慣れっこだったのだから。
「いいかげんあんたもこずえとくっついちゃいなよ」
　気のない返事が返るだけ。
「冗談やめろよ。俺も女子に関心ねえよ」
　こずえの片思いは知るひとぞ知る状態だった。『清坂美里は羽飛貴史をめぐるのライバルではない』ことが判明した家庭科室の放課後。以来こずえは貴史への想いをおおっぴらに、激しいアタックを繰り返していた。体育の授業中、バスケットボールに熱中する貴史へ「羽飛、

ゆけーっ！」と絶叫するなんて根性、私は持っていない。
「私に白状させた分、あんたも本音を言いなさいよ」
「じゃあ言うぜ。俺、本当に古川って苦手だ」
　残酷な言葉を、あっさりと貴史はつぶやく。
「じゃあ、誰が好きなのよ。鈴蘭優とは言わせないよ」
「鈴蘭優ちゃんを探しているところだろうが」
　貴史はそこまで疲れたように言い、あくびをした。
「美里みたいに、男の知り合いがいるわけじゃないんだからな」
榎本の件らしかった。だいぶ経ったけれども貴史の方から切り出してはこなかった。私が言い出さないのをいらいらしながら待っているかのようだった。
　私の指を榎本が包んだシーン。貴史に見られてはいないだろう。見られていたらもう、顔あわせるのが耐えられない。
「児童館での知り合いは、あいつだけよ。あとはいないわよ」
「そんなこと、俺に言い訳してどうするんだよ、それよかさ」
　貴史は本題に移った。
　品山小学、卒業式での『決闘』騒ぎである。

「あそこまで一字一句合っていたとは、思わなかったぜ」
　きちんと聞き漏らさなかったらしい。私は相槌を返した。
「つまり、浜野っていう品山で番はっていた奴が、立村に負かされたってことか。立村が『あぶなく人を殺しそうになった』っていうのは、勝負の時に自転車でつっこんで転ばせるかなにかして、坂から突き落としたってことを言っているんだな」
「つじつまが合うよね」
「これって、一歩間違うと警察沙汰になるかもしれないぞ。立村、ひっかからなかったのかな」
「相手の名前を一言も言わなかったっていうから、たぶん、互い納得の上での勝負だったと思う」
「これこそ、警察沙汰だからなあ。附中の合格取り消しにならないともかぎらんし」
　貴史は白く重みを増した空を仰いだ。昼間でも鉛色の空と誰かが言った空。手に届くのはあの、重たい空の色だけなのかもしれなかった。たまらなくやるせない真実。
「浜野って奴、きっと立村くんにやられたことが悔しくてならなかったんじゃないかなあ。だって、榎本の話で行くと『仕返ししようとは思わなかったって。なぜ自分が、そういう気持になったのかを、考えていくって』ってきざなせりふを言ったってことだし」
「確かに。美里もたまにはいいこと言う」
　貴史は足を止め、自転車をがっしりと安定させた。人通りの無い道に立ち止まり、私と並んだ。
「なあ美里。俺たちがもし、小学校の頃ばかにしていた奴から、殺されそうになったら、どう思う？」

「いっぱいいすぎてわからない。でも、悔しくて悔しくて死にたくなるんじゃないかなあ」
「死にたくなるほど、悔しいよな。俺もそうだ」
　私はいつも、許せない奴らをとことんたたきのめして今まで来た。そのことが間違っているとは全く思っていなかった。あいつらはそれなりのことをして、それなりの罰を受けたはずなのだ。そいつらからいきなりしっぺがえしされたとしたら、私は生きていくのもいやになりそうだ。私のしてきたことがみんな間違いだったと、せせら笑われること。それが許せなくて悔しい。
「そのこと、他の奴らに言えると思うか？」
「絶対に、言えないね。あんな奴らにずたずたにされたとしたら、私は断然、復讐を誓うね。でも、誰の手も借りたくないよ。そいつらの名前を口に出すと、舌がただれてしまいそうだもん。自分以外の誰にも、知られたくないよ」
「だろう。な、浜野って奴も、同じだったんじゃないか」
　貴史はまた空を見上げた。貴史も何を見つめているのだろう。探したくて、声を掛けた。
「卒業式で、浜野は立村くんに復讐されたのね。全く、想像したことのない、負け方だったのね。立村くんって、そういうことができる人じゃ、なかったのね」
「たぶんな」
「でもねえ、浜野は立村くんにやりかえさなかったみたいよ」
「そこが俺にもわからなかったんだ。ずっと考えていたんだけどな。実は、浜野ってすげえいい奴だったんじゃないかなあ」
「いじめの筆頭だった奴なのに？」
「いくら立村が附属に逃げてきていたって、小学校が品山だったら、顔を合わせる機会はいくらでもあると思うんだ。番張っているくらいだから、仲間も腐るほどいるだろうし。立村ひとりを締め上げるのは難しくないだろう。でも、浜野は潔く負けたことを認めたんじゃないか。たとえ立村との勝負がどういうものであったにせよ、仲間を集めずに一対一で勝負するくらいのプライドを持っていたんじゃないか」
　貴史は空を見上げるのをやめた。
「そうかなあ」
　口ではあいまいな相槌だけ。ぴたりと重なっていた。
　榎本から聞いている間も、浜野という『品山小学校の大将』に対して、全く不快感を感じなかった。自分が片思いしている立村くんをねばっこくいじめつづけていたということについては卑怯だと思うものの、『決闘』で生き様を改めた姿は潔いと思った。
　小学校時代ならともかく、中学で顔を合わせていたら、ぜひ友達として徹底的にしゃべってみたいタイプだった。なによりも『決闘』という手段を取ったことが偉い。
　立村くんがどういう方法で『決闘』を申し込んだのかはわからないし、自転車でぶつけ合うかなにかして突き落とすだけの根性がどこにあったのかもわからない。もし『決闘』がばれてしまった場合、青大附中合格を取り消される可能性も考えなかったわけじゃないだろう。浜野がもし心底腐った男だとしたらだ親なり友達に泣きついてそれなりの手段を取っただろう。
　決闘は紳士的な方法で行われ、勝利者、敗者ともに、納得の上けりがついた。はっきり言って

、それはすごいことだと思う。

「でもね、貴史。ここまで知ってしまった以上、『裏・ノート』企画は、もう出来ない」
　貴史もうなずいた。
「そうだな。立村は班ノートにおいて本当のことを書いたんだ。あれを嘘だと言って売り込むことは、もうできないな」
「私も、あの中の内容を、他の女子に伝えることはもう出来ないよ。嘘、つけないから」
「わかった。立村には何気なく、『裏・ノート』に飽きたって、言っておく。でもショック受けるだろうなあ。俺が寝返ったと思って、口利いてくれねえかもな」
「そんなあいまいなやり方じゃなくて、はっきり言ったらいいのよ。あのことが本当だってわかったけど、私も貴史も、なんとも思ってないって。立村くんはきっと、本当のことがばれたら縁を切られるって思っているよ。そんなことないからって、言ってあげれば」
「でもな、どうやって知ったのか、聞かれたらどう答えるんだよ。美里の昔の相手と」
「そんなんじゃないってば！」
　かっとなって私は叫んだ。
「貴史が思っているような下品な相手じゃないんだからね。何考えているんだか、もう」
「手を握り合っていたくせに」
「あんたってばあ！見ていたのね！」
「見るもなにも。仕方ないだろ」
「あんたもまさか、私が男ったらしだって言いたいつもりなの。最低！」
「ばあか、美里がめろめろに惚れているのは立村だけだってわかっているって。少なくとも杉浦には勝てるだろう」
　聞きたくない名前が貴史の言葉に出てきて、私は手を口に当てた。こぼれてきそうだった。
「どうした、美里」
　貴史は私の顔を下から見あげた。私がなぜ動揺しているのか、わかっているかのようだった。

　教室を出る前に、加奈子ちゃんと立村くんがなにやら話をしていた様子に、私はこっそり通りすがりの振りして約束を盗み聞きした。
「本品山中学の前で、あとで」
　彼氏もちの加奈子ちゃんが、なぜ、立村くんと約束をしたのだろう。
　よりによって、本品山中学の前でなんて。

「貴史、男子の間で、立村くんの相手って誰だと思われているの？」
　プライドもなにも捨てた。
「誰って、なあ。あいつ好みのタイプ言わないからわからねえよ」
「加奈子ちゃんってこと、ないよね」
　力が抜けた。やはりこういうことは、貴史にしか話せない。こずえにも、姉にも妹にも、相談

できないことを、貴史には何でも話すことができた。
　絶対に、貴史ならば、答えを出してくれる。理屈ではなかった。
「なんでお前杉浦にそんなこだわるんだ？」
「だって、立村くんと加奈子ちゃん、影でこっそり会っているみたいなんだよ。今日も帰り、本品山中学の前で待ち合わせの約束していたんだよ」
「奴は今ごろ、菱本先生につるしあげられているだろ」
「でもその後で、本品山で待ち合わせするって」
　身体がぶるっと震え、私はフードをかぶった。貴史もコートの先を軽く引っ張り、私の耳もとに確認するかのよう、尋ねた。
「杉浦の相手は浜野だといっていたな。それで相手が品山だったら、立村が知らないことはないだろう」
「だよね、だよね」
「これは何かあるな」
　なにかに突き当たったらしい。貴史の表情がだんだん鋭く、険しくなっていく。空を見上げ、ふっと息を止めたふうに私の目をじっと見た。
「あいつ、杉浦に横恋慕していたのか」
　答えず私は貴史の様子をじっと観察した。私と同じ結論に達しているのならば、こいつもわかるはずだ。
　絶対に、口に出してほしくなかったこと。
　貴史の推理はまさに私と同じところを突いていた。
「俺たちの方では聞いていない。美里、その噂はいつぐらいからあったんだ」
「私も、最近聞いたの。二人っきりでいたらしいのが、夏休み後。最近も、そういうこと、あったみたい。評議のゆいちゃんが話していた。甘い雰囲気じゃなかったみたいだけど。でも、私のことも話していたみたいなんだって」
「屈折しているな。よりによって、過去の黒幕と、気になる子が付き合っているなんてな。でもな」

　私の暗い表情を読み取ってくれたのだろう。貴史の口調は不意にやさしくなった。
「杉浦は、立村を振るつもりなんじゃないか？　決着をつけるつもりなんじゃないか」
「どうしてそんなことする必要あるの？」
「今、美里が言ったとおりだとしたらだぞ。相手がいる杉浦としたら迷惑千番だろうよ。しかもその相手が、よりによって立村と犬猿の中ときたもんだ。美里ならどうする？」
「私ならば、たぶんあっさり切るね」
「だろ。ただ、美里のように冷酷でなければ、断る方法を考えるだろうなあ」
「蛇の生殺しの方がもっと残酷だと思うけど。あんたがこずえにしているように」
「俺のことはどうでもいいだろ。心配してやっているんだぞ。少しは素直に聞けよ」
　言葉は命令調なのに、なぜか貴史の口調はやわらかかった。つぶやき風だったからだろうか。

「お前の知っている杉浦って、どういう感じなんだ？　あんまししゃべらねえ子だけど」
「おとなしいよ。気持悪いくらい。どのグループにもうまく混じっているって感じで。どう考えても、あの浜野と付き合うような子には見えないな」
「立村に惚れているってことは、まずないな」
「ない……と思う。わからない」
　断言できなかった。
「自分に付き合っている奴がいるということを、本品山中学の前で見せ付けて、断るつもり、ってことは考えられないか？　美里」
「ずいぶん面倒なやりかたよね。直接言えばいいのに」
「言えないだろう。誰もが美里じゃないんだからな」
　するすると考えがまとまっていった。私の頭の中でつながらなかったピースひとつひとつがぴったりと収まり、貴史の推理に絡み合っていった。
　文集委員に選ばれたことを知っていたのも、加奈子ちゃんの名前を出されたことに動揺していたのも、立村くんがずっと気にしていたためと考えれば納得がいく。
　たどり着いた結論に、涙が出そうだった。でも泣かなかった。貴史の前でも、がまんできた。
　ごくんと咽の奥の塊を飲み込んだ。
「やはり、それしか、考えられないよね」
「もしそうだとしたらどうする」
「わかんないよ。そんなこと言われたって。立村くんの気持ちを私が変えられるわけないじゃない。自分の気持じゃないんだから」
「お前らしくないこというなよ。まだ決まったわけじゃねえだろ。俺だって、半信半疑だって」

　貴史はぐるりと私の前を自転車ひきながら回り、戻ってきたところで言い切った。
「どうしても気になるなら、美里、決着つけてこい」
「え？」
　耳を疑った。
「本品山中学であいつと杉浦が何をしようとしているか、確認してこいよ。どうせ、お前は知りたいことをとことん知らなくちゃ気がすまないだろ」
「貴史、あんたも来てくれるの」
「ばかやろう。これはお前の問題だろ、勝手にしろ」
　すごい勢いで耳もとの風がすり抜けた。貴史が自転車を反対方向に向けて猛スピードで走り抜けた後だった。ぴりぴりとほおの粘膜を差すような冷たい風だった。ぎゅうと、泣くような風の音。かさかさするような、呼吸の響き。
　すべて私の中に流れ込んだ。答えは一つだった。
　私は本品山の方へ向けて、自転車を漕ぎ始めた。

その十　ふたりのうけとめた言葉

　青大附中の校舎は大学構内に位置するということもあり、すとんとした円錐形のキャンバスに溶け込むよう設計されていた。白亜の塔、と言う方が正しいだろう。
　冷暖房完備、生徒玄関にはロビーが設置されている。一年近く過ごしていると、そんな快適さも慣れへとかわっていくのだが、こうやって本品山中学の前に立つと、いかに自分たちが恵まれているかが痛いほど思い知らされた。
　木造三階建の、見るからに寒そうな校舎。
　土台には、ねずみのかじったらしき穴のようなものも見受けられた。校門も、腕で一抱えある大木を二本並べて代用しているとしか思えない代物だった。黒大理石で、『青潟市立本品山中学校』とつり出してあったけれど、やはり見劣りすることは否めなかった。
　門の影に自転車を隠し、私はコートを深く着なおした。青大附中の制服が見えなくなるようすっぽり隠した。
　ここから青大附中まで自転車で三十分。貴史としゃべった分、加奈子ちゃんとのタイムラグはあるかもしれない。私だって、自転車とは長い付き合いだから、かなりスピード出して走ることができた。もし待ち合わせしているとしたら、間に合うという自信があった。
　時計をちらっと見て、私は奥の方にちんまり覗く生徒玄関を確認した。学年別に分かれているというわけではなさそうだ。榎本の姿は見えなかった。貴史を少しくずしたタイプの男子生徒、五、六人がたむろっていた。
　すその長い学生服をたっぷりめに着こなし、なにやら白い息を吐いている。あれはタバコの煙かもしれない。まかりまちがっても優等生には見えなかった。私好みのタイプではなかった。なんとなく、うざったくていやかもしれない。
　時間を確認すると四時過ぎだった。立村くんと加奈子ちゃんは本品山中学の前で待ち合わせをしているはずだった。隠れ場所を探してみたがなかなか見つからない。私は自転車ごと移動することにした。向かいのグラウンド隅に、ちょうど運動部の部室らしき建物が立っていた。プレハブの、触ると壊れそうなちゃちな作りだった。壊れたベンチも放置されていた。これさいわいと、自転車と一緒に隠れた。

　――本当に来るのかな。
　――それ以前に、立村くん、菱本先生に呼び出された件、終わったのかな。
　――大急ぎで自転車を漕いだって、たぶんここには間に合わないよ。
　――加奈子ちゃん、どうして待ち合わせしようなんて言い出したんだろう。
　――貴史の言うとおり、立村くんを振るつもりだとしたら、直接はっきり言ってしまえばいい

のに。
――三ヶ月以上ひっぱることないじゃない。
――いくら加奈子ちゃんが内気だからって言ったって、私が立村くんの立場だったら苦しいよ。きっと。
――それに、なんで立村くんは加奈子ちゃんのことを好きになってしまったんだろう。
――ずっと評議委員で一緒にいた私を『清坂氏』と呼んでくれたのは、なんだったの。
――やっぱり貴史と仲良しだからなのかなあ。
――『裏・ノート』に誘ってくれた時、私だけにって言ってくれたのは、好きでもなんでもなかったからなのかな。

ぐるぐると頭の中を立村くんとの会話が駆け巡る。
いつのまにか私は立村くんが私を気にかけてくれていると思い込んでいたのかもしれなかった。多少思い上がりの兆し有り。でも、私と貴史以外には打ち明けたくないと話してくれた『裏・ノート』のことを思い出すたび、全くの錯覚ではないとも思った。
加奈子ちゃんと私は正反対の性格、雰囲気だ。貴史がこずえに対して『いい奴だとは思うけれど、それだけ』という感覚とおんなじだったのだろうか。
どういう結論が出るのかはまだわからないけれど、私は最後まであきらめたくない。
貴史の推理を改めて噛み砕き、ひとつだけ望みがあることに気付いた。

――立村くんがどう思うかは別として。
――加奈子ちゃんは立村くんと付き合う気はさらさらないはず。
――そうすれば、私にもチャンスがくるはず。

手をすり合わせ、息をかけながら私は門の近くに立って待った。門からは十メートルくらい離れているので、よっぽど目のいい相手でなければ気が付かないだろう。念のためにしゃがみこんだ。
私が五分、十分と時計を見直した時だった。

生徒玄関あたりの動きがせわしなくなった。中の一人がいきなり手を振り出した。片っぽのかかとで地面を数回擦り、軽く走りながら途中で止まった。
「じゃあな」
サッカーボールをかかえてそいつはふと、私の方に向き直った。まずい、見られたか。息を呑んだ。
見えるか見えないかの境目で、サッカーボールの彼は背を向けた。友人連中らしき奴らは、玄関の奥に姿を消した。
意外と礼儀正しいやつらだ。ちゃんと挨拶しているんだもんな。あの中に浜野とかいう番張っている奴もいるんだろうか。

　もう少し近づこうとして、動きを止めた。私はダッフルコートのフードを大急ぎでかぶりなおした。
　門柱の影に誰かがいた。
　見覚えあるコートに、ふわっとした天然パーマのあどけない笑顔。
　加奈子ちゃんだった。髪の毛を解いていた。一瞬別人に見えた。

　立村くんとの待ち合わせだったはずだが、どうしたのだろう。加奈子ちゃんは耳もとで軽く手を振ると、駆け足でサッカーボールの彼に飛びついていった。
　いきなり彼の胸にしがみつくような格好をとった。遠めから見ると、抱き合っている風にも見えた。
「どうしたんだよ、そんなに待たせたか」
　加奈子ちゃんはほとんど声を出さなかった。時折、くしゅんとくしゃみをする声と、
「うん、うん、あのね」
といった間投詞のみが入るだけ。
「今度、俺が迎えに行った方がいいか」
　返答なし。ほとんど『彼』の一人芝居。加奈子ちゃんはちろちろと目配りをした後、もう一度、頬をすりつけた。
「加奈子が来るとさ、いつもあんな感じでやられてさあ。ん、じゃあ、これからどこに行く？」
　無言を通す加奈子ちゃん。いきなり爪先立ちで、相手の耳になにやらささやいた様子。
「いつもの俺んちでいい？」
　うなずく加奈子ちゃん。身体全体を左右に揺らすようにして、くいっと『彼』を見上げた。表情が確認できないのが残念だ。
「大丈夫、だよな」
　いきなりうつむいた様子だが、嫌がっている雰囲気ではなかった。
　私が息を止めている間に、二人は手をつなぎ、サッカーボールの彼とともに、校門を出て行った。自転車のきしむ音が二重に聞こえ、そのまま私の隠れているグラウンド沿いを走り抜けていった。
　たぶん、しゃがんでいる私の姿を、見られなかっただろうと、信じたい。

　加奈子ちゃん、一体何考えているんだろう？
　『俺んち』って、あやつの部屋にか？
　付き合っている男子の部屋に、行くっていうんだろうか。
　あの加奈子ちゃんが。
　そりゃあ、私だって榎本の部屋に平気でのこのことついていったことはあるし、貴史の部屋はほとんど喫茶店代わりになっている。
　人のことはいえないかもしれないけど。しかし。
　加奈子ちゃんみたいに、相手の男子にすりすりしたり、手をつないだりなんて、したことなか

った。

　二人がいなくなったのを見届けてほっと、一息ついた。
　この前の榎本が話していた、品山小学出身の浜野というのは、たぶんあの『彼』だろう。
　あれくらいいちゃついていたら、榎本も顔を覚えるだろう。相当前から、加奈子ちゃんは本品山中学に彼氏をお迎えに行っていたようすだから、すでに公認状態だったのだろう。
　まあ、好き好きやっているのはいいけどね。うちのクラスで、加奈子ちゃんが彼氏もちだなんて誰も想像していなかっただろうにな。
　でも立村くんはどうして、こなかったのだろう？
　なにか理由でもあったのだろうか。
　菱本先生のお説教が長引いたのだろうか。
　私はゆっくりと立ち上がり、自転車をひいて校門から出た。ここには用がない。
　あれだけ甘えている彼氏がいるのだ。
　たぶん加奈子ちゃんと立村くんは付き合っていないだろう。
　その点が確認できただけでも十分だった。

　フードを脱いで、ペダルを片足踏もうとした時だった。
「清坂氏、どうしてここにいる？」
　聞きなれた声が、背中に響いた。
「立村くん、え、私、あの」
　振り向くとそこには、立村くんが自転車を同じように引いて立ちすくんでいた。
「さっきから、あそこにいただろう」
　声に表情はなかった。淡々とした、手折られそうな響きだった。ただでさえほっそりとした肩が、さらに下がり、わずかに私の方を斜に見つめていあ。
　唇をきっちり結んでいたさまが、はっきりと読み取れた。
　今までにない立村くんの瞳だった。かすかに潤んでいた。

「あのね、私の友達で、ええと、塾に行っていた時の友達で、用事があって迎えにきたのね。でも、もう帰っちゃったみたいだから、ちょっとぶらぶらしていたんだ。あ、そうだよね、立村くん、この辺に住んでいるんだよね。本当よ。本当にそれだけなんだから」
　支離滅裂な言い訳をどこまで立村くんが信じてくれたかわからない。私は身体ががたがた震えてならなかった。せめて貴史が居れば、すぐに話をそらしてくれるのに。フォローしてくれるのに。貴史を頼っていることに気付き、情けなくなった。
　教室で見せる落ち着いた表情はそのままだけど、隠しても隠し切れないのはその瞳だった。泣いた後だったのだろうか。涙らしきものはこぼれていないし、慰めていいのかもわからなかった。
「さっき、杉浦さんがいただろう」

「あ、うん、いたよね」
　びくびくしながらも口だけは軽やかに答えた。とりあえずは見た通りのことを話すしかなかった。
「加奈子ちゃん、彼氏いたんだあ。知らなかったよ。声掛けなくてよかった」
　少しだけ、微笑んでくれた。
「明らかに彼氏はサッカー部よね。がっちりタイプが加奈子ちゃんの好みだったんだね。ちょっとびっくりしちゃった」
　知らなかったふりをして話を続けた。でも息が苦しくなり、言ってはいけない言葉が勝手に飛び出した。
「立村くん、加奈子ちゃんに振られちゃったね」
　冗談っぽく続けたつもりだった。すっと立村くんは横を向いた。私に顔を見られたくないかのように。

　――図星だ。
　――本当に、図星だ。
　――こんなこと私は知りたくなかったよ。
　――でも、言っちゃった。
　――泣きたいなら勝手に泣いてよ。
　――私はどうせお姉ちゃんに怒鳴られながら部屋で泣くしかないんだから。
　――きゃあって叫び出したい気分よ。
　――でも、こうやって今、私は立村くんの側にいるのよね。
　――ひそかに、ほっとしているいやな性格よね。
　――でもここで、「あんたが好きよ」なんて、言えるわけないじゃない。

「あの二人については、俺も前から知っていたよ」
　ほんの少し、黙った後、立村くんはこちらを向きなおした。瞳は自然な輝きに戻っていた。動揺の影が薄くなったようだた。
「そういえば、立村くんって、本品山中学の学区だったよね」
「附中落ちていたら、本品山中学に行くはめになっていたと思う。たぶん」
　その後、ひとりごちた。
「よりによって、相手が浜野だとはな」

　立村くんの様子はその後も変わることがなかった。無口なままで立村くんは自転車を押していった。顔面蒼白、今にも倒れそうだった。小さな咳をしながらも、私を気遣うように時折立ち止まってくれた。
「途中まで送ってくよ。倒れそうだもん」
「そんな、いいよ」

口実をつけて、立村くんと一緒にいたかっただけだった。

私の想像以上に立村くんは加奈子ちゃんのことを想っていたのだろう。だから三ヶ月以上も待っていたのだろう。その思いが真剣なものだったから、加奈子ちゃんも無碍に断れなかったのかもしれない。
立村くんと浜野は、雰囲気顔立ち、性格も正反対だ。加奈子ちゃんが全く立村くんになびかなかったのは、好みが浜野タイプだったからだろう。
はたして加奈子ちゃんが二人のいざこざを知っているかどうかはわからない。加奈子ちゃんは自分に恋人がいることをきちんと示して、あきらめてもらおうとしたのだろう。精一杯の、誠意だったのだろう。
人が振られたところを見たのは、これが初めてかもしれなかった。
私は立村くんの表情を側で見据えたまま、寄り添っていった。
「立村くん、今日のこと、絶対誰にも言わないから。私しか、見ていないんだから」
時を埋めるのもうまくいかなかった。立村くんから答えはなかった。貧血気味なだけなのかもしれない。何も話したくないのかもしれない。ゆっくりと自転車を押していった。
「それにしても加奈子ちゃん、本品山に彼氏いるって言えばよかったのにね。みんな隠しているから、訳わかんなくなっちゃうでしょうにね。やだやだ、ほんとに」
橋を渡り、左に曲がり、遠くまで続くサイクリングロードを歩いていった。ここはなんどか私も通ったことがあった。気持いい車輪からの振動。身体の中に流れこむ風。それが今はすべて消えていた。一歩ずつ確かめながら進んでいくうち、榎本から聞いた話を思い出した。
――もしかして、ここが、決闘の現場だったの？
ぱさぱさと座りごこち悪そうな雑草が、なだれる坂に波打っていた。川は相当深いに違いない。真っ黒な水の流れだった。真下には白っぽいコンクリートがまんべんなんく敷き詰めてあり、川面まで六メートルくらいはあるだろう。川とコンクリートの境には、金網で柵が張り巡らされている。たぶん、このあたりが品山小学校の通学路だったのだろう。川に落ちないような配慮もされていたのだろう。
川には落ちない。でも、あのコンクリートまで自転車ごとたたきつけられたら、へたしたら死ぬかもしれない。でも普通ならば、草のところでひっかかるかなにかして、軽い擦り傷切り傷ですみそうだった。
立ち止まり見下ろした。
相当自転車の運転が得意で、かつスピードを出せる腕の持ち主でないと、突き落とすことは難しいだろう。一緒にこけることも可能性としては高い。
「清坂氏、もう知っているんだろう」
かすかな声が耳もとで聞こえた。
目をそらしたまま私は、立村くんの声を聞いた。
振り向けず、私は聞こえないふりをした。
「杉浦さんからも、全部話は聞いているんだろう」

　首を振りたいけれど、本当のことを知っているからできなかった。
「もう、菱本先生が文集を作ろうが何しようが、どうでもよくなった。放課後呼び出されたんだ。評議委員会がすべての行事を仕切りすぎているから、文集委員関係については口出しするなって言われた」
　評議委員会のことだったら、まだ私も言葉を挟むことが許されそうだった。
「どういうこと？　結局、文集を作るつもりでいるの」
「予想通り、班ノートをまるごと一冊の文集にまとめるらしい。年度ごとに。Ｄ組の分は卒業するまで三冊が出来上がるってわけさ。ただ、俺たちがいろいろと小細工をしてきたことが、どこかで知られてしまったらしい」
「私は言ってないよ」
「信じている。清坂氏は絶対、そんなことしないってわかっているよ。どちらにせよ、『裏・ノート』はやめようと思っているところなんだ。清坂氏には、変なこと頼んで悪かったと思っている。もっと、俺も清坂氏みたいに頭が切れればな。最後の最後であんなことにならなくてもすんだのにな」
「あんなことって？」
「杉浦さんが知っていたとはな、思わなかった」
　それきり、立村くんは口を閉ざした。私も振り向かぬまま、金網越しの水面を見つめていた。

　金網にぶら下がって、小学校一二年生の男子たちがなにやら奇声をあげていた。落ちなければいいけれど。また何人かは柵にけりを入れて、ぶら下がっている友達を恐怖におののかされている。
　そんなに高いところではない。あんなことは私も貴史たちとよくやったものだ。誰も心配はしないだろう。
　私が三年の頃、一人、小学校の階段を走って三段飛び越えられない子がいた。誰だっただろう。覚えていない。ただ、いつもその子だけがとろかった。鬼ごっこをする時も、かけっこをする時も、その子がいつも最後だった。私はその子を仲間に入れて遊んでいた時、いらいらしていたんじゃないだろうか？　いや、むしろそういうタイプとはあんまり付き合わなかっただろう。いつも貴史とか、そのあたりの友達とつるんでいた。
　一年しかクラスが一緒でなかったからすっかり忘れていた。
　唯一覚えていることがある。
　その子は編物が大の得意だったのだ。冬休みの自由研究で、彼女は大人物のフィッシャーマンセーターを編み上げてきた。太い毛糸でざっくり編み込まれた真っ白いセーターは、売り物と全く変わらないできだった。最初は「親に手伝わせたのでは？」という中傷もないわけではなかった。でも教室で休み時間、編物を始める姿を生で見たとたん、彼女のあつかいは数ランク上がった。
　あの子がいじめられずにすんだのは、そういったとりえのおかげだったろう。編物という切り札で、自分のとろさを乗り越えていけたのだろう。

立村くんには、小学校時代、切り札がなかったのだろうか。
私から見れば、六年間しつこくいじめられるような要素はほとんど見受けられなかった。おちついた端正な顔だち、運動能力も人並み以上、別にお高いところもなく、人なじみもいい。人の顔色を見すぎるところは、確かにあるかもしれないけれど、それは私たちに好意を持ってくれているからだということがよくわかっている。
班ノートには『気が弱い』『引っ込み思案』という表現が出てきたけれど、それが目立つほどとは思わなかった。
でも、私の見ている立村くんの姿は、青大附中で見せているものでしかない。
私は小学校時代の立村くんを見ていない。
貴史と修羅場を潜り抜けてきた頃の私を、立村くんは見ていない。
見ていないだけ。そう、あの頃のお互いを見ていないだけ。
立村くんの過去を探ろうとしていたのに、なぜか私の心にひっかかるものの正体は、これだったのかもしれない。
足を引っ張られるような重み、その正体が見えた。
「立村くん、私、加奈子ちゃんから何も聞いていないよ。だから、安心して」
息をのどまで吸い込み、私はしゃがみこんだ。立村くんの顔を見はしなかった。
「もし、もしもよ。立村くんが班ノートに書いてあったことが、みんな本当のことだとしたら、そりゃあ、ショックだと思うの。いじめられて、出刃包丁を持ち出して学校に通って、卒業式の決闘で復讐を遂げるなんて、青大附中の立村くんを見ているだけだったら考えられないもの。でもね、もし、それが本当のことだとしても、それは今の立村くんとは別のものだもの。私が見ているのは、今ここにいる、立村くんだけだもの。英語がものすごくできて、貴史と大の仲良しで、私と評議委員一緒にやってくれている立村くんしか知らないもの。それにたぶん」
なにかが心で解けた。
「そうじゃない立村くんだったとしても、私なら仲良くしていられたよ。きっと」
背中で感じる暖かいけはいがした。ほのかな温もり、ともいえない空気の揺れが、伝わった。
――何かするの？
――手なんか握らないでしょうね。
――あたりまえよ、加奈子ちゃんに振られた後なんだから。
確かにしなかった。
「清坂氏と、小学校一緒だったらよかったと思うことあるよ。ありがとう」
私は振り向かなかった。
立村くんが自転車を漕ぎ出し、走り去るのをずっと待っていた。

その十一　つきつけられた「班ノート」

　立村くんには残酷なことをするようだが、私はひそかに十二月のクリスマス･イブを狙って再接近計画を計ろうと考えていた。
　加奈子ちゃんをどうせあきらめなくてはならないのならば、私に乗り換えてくれたっていいはずだ。
　貴史をこずえとくっつけたら、変な誤解がきれいさっぱりなくなるはず。なんの障害もないはずだ。
　はたして貴史が、立村くんに何を言ったのかわからないけれど、『裏・ノート』の話題はそれっきり、全く出てこなくなった。
　立村くんにも確認しようとは思わなかった。
　ただ、気になるのは、加奈子ちゃんと立村くんとの間だった。あいかわらずにこやかに受け答えしているけれども、なんとなく私の方が避けるような感じだった。
　どう受け答えすればいいのかわからない。
　立村くんも加奈子ちゃんには最低限の言葉しかかけていないようすだった。評議委員会で三学期以降の予定がたくさん組まれていた関係もあり、学級関係のことに手を出す余裕がなかった。
　ちなみに冬休み中、評議委員会はオリジナルビデオ演劇を作成する予定だという。内容はなぜか『忠臣蔵』を演じることになっている。。
　赤穂浪士四十七士、吉良邸打ち入り切腹、松の廊下刃傷沙汰など、いろいろ二年の先輩達がシナリオを作成しているらしいが、一年生の私たちには何がなんだかわからなかった。現在わかっているのは、大石を本条先輩が演じることになっているくらい。立村くんは露骨に嫌がっていた。
「立村くんもなにかやらされるの？」
「絶対いやだ。本条先輩何を考えているんだか、俺に何やれと言ったと思う？　松の廊下の浅野匠之頭やれってさ。あの人の発想は一生ついていけないよ」
　頭を抱え込んで立村くんはつぶやいた。
「衣装とかどこで用意するのかしら」
「演劇部とか、高校とか､大学の衣装室で大抵用意してもらえるから大丈夫なんだってさ。信じられないよな。でも、清坂氏も何か役つけられる可能性あるから気を付けた方がいい」
「どうせ討ち入りの時に吉良か赤穂浪士かどちらかの家来させられるんでしょ。その他大勢って感じで」
　立村くんはふっとため息をついた。いかにも私がわかっていないと言いたげに、国語の副教材本『古典文学ガイド』をめくった。
「『勘平お軽の道行』を､実は本条先輩やりたいらしい。女子にも出てもらいたいそうだ。一応、清坂氏も候補には上がっているらしい」

「どんな話だったっけ。その『勘平お軽の道行』」って」
「悪いけど、口には出せない。自分で調べることを勧める」
　あとで国語の先生に聞いてみよう。立村くんも照れがあるのか、あまり詳しい説明をしたくないみたいだった。きっと、カップルものというか、ちょっといちゃいちゃした感じの話なんだろう。
「『勘平お軽の道行』よね、わかった。あとで聞いてみる」
「絶対、ショック受けるよ。たぶん」

　立村くんとはこんな感じでおしゃべりすることが、あの日から少しずつ増えてきた。
　決して私も、加奈子ちゃんのことを持ち出したりしなかったし、立村くんも次の日から全く変わらない風に私と接してくれた。
　なかったことにしてあるはずだった。
　それでも立村くんの想いらしきものを少しは受けとめることができたのだろう。口には出せない気安い雰囲気が私と立村くんとの間に生まれていた。
　貴史もそれには気付いていたようで、よく会話の合間にちょっかいを出し、しょっちゅう私に反撃を食らっていた。あいつの言葉が私に、今流れている温もりを贈ってくれたことも、まだ言えなかった。
　――別に告白したとか、付き合ってといったとか、そういうことはなかったんだし。
　コート一枚分のぬくもりが私と立村くんの間に流れるようになったのは、どう考えても貴史のおかげだった。
　――いつか、きちんと、ありがとうって言わなくちゃ。

　国語の先生から『仮名手本忠臣蔵』に関するレクチャーを受けた。
　松の廊下刃傷最中に、勘平はお軽という女中といちゃいちゃしていたため、赤穂城に戻り損ねいろいろと不義理をしてしまった。それゆえに後悔してお軽と一緒に心中の旅に出る。あだ討ち資金かなにかを作りに行くのだそうだ。
　いや、確かに本条先輩はそういう色っぽいものが好きだと聞いていた。考えられないことではない。何でよりによって私が相手役の候補にあがらなくっちゃいけないんだろう。絶対いやだ。
　あとで女子評議委員みんなと一緒に談判しようと決めた。
　評議委員会に携わっていると思わぬハプニングに巻き込まれることが多々あるものだ。

　次の時間はロングホームルームだった。いわゆる学級会のひとつで、ひとつのテーマを決め、評議委員が司会を務めながら勧めていくものだった。いわば立村くんが仕切り、私が黒板に書くという、目立つ役だった。
　少し早めに私は教室に戻った。菱本先生のお題にあわせて『球技大会の反省』とか『いじめ問題』などを討論するのが中心の時間だった。菱本先生もすぐに入ってきた。今度は私が号令をかける番だった。

「今日のロングホームルームは、『クラス文集作り』についてだ。立村、話をまずクラスのみんなに説明してくれ。この前話したことだ」
　少し厳しい声で、菱本先生は立村くんを呼びつけ、黒板を軽く叩いた。それが合図で立村くんは立ち上がり、すうっとクラスのみんなを見渡した。
「なあんだ、文集作りのことで呼ばれていたのかよ」
　貴史のつっこみにも答えなかった。私も立とうとしたが、菱本先生に手で制された。なんでだろうか。教壇の隅でパイプ椅子に座り、菱本先生は厳しいまなざしで立村くんを見つめていた。
「ロングホームルームを始めます。本日のテーマは、菱本先生のおっしゃられた『一年Ｄ組学級文集』製作についてです」
　胸ポケットにさしていた生徒手帳を取り出し、立村くんは教壇に立った。メモしてあったのだろう。うつむいてゆっくりと読み上げ始めた。
「菱本先生の提案で、来年の三月に向けて『学級文集』を作ることが決定しました。まず、内容についてですが、クラスのスナップ写真と、それぞれがＢ４の用紙に一枚分、好きなことを書いて、来年の始業式までに提出してもらうことになります。内容は、文章、イラストなんでもかまいません。これは個人の自由でかまいません」
　そこで息を次ぎ、もう一度クラス全員を見わたした。
「文集やるって、やだなあ、めんどくせええよ」
「でも、イラストとかでもいいんだろ！白黒なのか？」
　想像したよりも反応がきつくなかった。
「そうなんだ、文集かあ、ねえ、美里。楽しみだね」
「何がよ何が」
「だって、いろんな奴の文章とか読めるじゃない」
　こずえはのんきに喜んでいる。どうせこずえのことだ、いろいろおちゃめなことを書くんだろう。私は続きを早く聞きたかった。貴史の反応はわからなかった。ただ、黙っていた。
「第二点は、今回している班ノートをすべて、コピーか活版印刷にまとめて一年分すべて載せます。もちろんその作業は印刷所に任せますが、そのレイアウトおよびコメント係として、文集委員を男女各一人ずつ決めることになります」
　とうとう来たか。私は手を机の上で組み合わせた。立村くんの顔色がどう変化するかを、じっと観察した。崩れるかどうか。
「うそだろお、ちょっとお。本当に班ノートを載っけるんですかあ！」
「そんなこと考えて書いてねえよ！」
「恥ずかしいよね！」
　おだやかさが消え、トーン高くびりびりした空気がいっぱい、熱ぼったい。
「冗談じゃないよ！美里、一体何よ、ねえ、菱本先生、なんでそんなことするんですか！」
　黙っていられないこずえが直接、菱本先生に叫んだ。
「ノートなんてなくしてやるわ。もう書かない！」
　私も本当は言い返したかった。でもそれよりも、立村くんがしっかと立っていられるかが不

安だった。
　視線が届いたのか、立村くんはちらりと私たちの班を流すように眺めた。加奈子ちゃん、貴史、私の方で瞬間、止まった。
　悔しさでも、怒りでもない、あきらめたような瞳だった。潤んではいなかった。
　私は加奈子ちゃんの方をちらりと見た。加奈子ちゃんの口元には、かすかな笑みが浮かび、立村くんの方に意味ありげに首をかしげた。合図をしているかのようだった。
　ぞっとする直感が走った。

「加奈子ちゃん、やだよねえ班ノートなんて」
「ううん、面白そう。私、残しておきたいな」
　私の方を見て、加奈子ちゃんはさらににっこりと笑った。
「編集したりするのって、面白そうだもの。特にうちの班ノートは、みなまじめな内容ばかりだから、宝物にしておきたかったの」
「編集って、どういうこと？」
　確か加奈子ちゃんは、こっそり菱本先生から編集委員を承ったと聞いていた。
「私、編集委員、やりたいわ」
　小さな声で、意思のある言葉で、加奈子ちゃんは再び微笑んだ。

「先生、いいですか」
　私は挙手をして立村くんに合図をした。立村くんは戸惑ったように菱本先生の方を見て、どうするかを目で確認していた。うなずいて菱本先生は答えた。
「なんだ、清坂。お前こういうの好きだろ。面白いぞ文集は」
「あのお、文集作りについてなんですが、いくつか質問したいんですけれど」
　拍手喝采だ。私も一応、評議委員の端くれ、聞きたいことだけはきちんと聞いておきたかった。
「やる気まんまんだなあ、さすが評議」
　楽しそうに菱本先生は答えを待っていた。
「いえ、私はどうでもいいんですけど。今回文集を作るということで、クラスのみんなから了解はもらったんですか。今の雰囲気を見ても、賛成と反対が真っ二つに分かれているんじゃないでしょうか」
「これは多数決で決めるものではないんだ。学級活動のひとつとして、絶対にやらなくてはならないことなんだ」
「それはどうしてですか」
　理屈っぽいことはいえないけれど、押し付けで作らされるのはいやだった。
「いいか清坂、青大附中では自分たちの歴史を、確実に残しておくために、文集という方法があるんだ。公立の友達からは、文集なんてたいしたことじゃないと言われているかもしれないが、とんでもない。今、この場を生きている君達が、どういうことを考えていたかを、忘れずに遺し

ておく大切なものなんだよ」
「それだったら、別に班ノートまでひっぱりださなくたっていいんじゃないですか。誰も文集になると思って書いているわけじゃないんですから。残らないと思っているから、安心して本音が書けるんじゃないですか」
「嘘ばっかり連ねたものを、誰も読みたくないだろう？　清坂は正義感が強いからそのことはよくわかると思うが」
「でも、班ノート全部掲載っていうのは、ずるいです。やり方が汚いです。載せたくない人だっているんじゃないですか」
　口が滑った。頭の中に『裏・ノート』の一行一行がものすごい勢いで流れた。止められなかった。
「やるんだったら前もって、班ノートを載せるべきかどうかを話し合うべきだと思います。もちろん載せてもいい人だっているだろうし、かえって書きたい人だってたくさんいるでしょう。でも、いきなり抜き打ちみたくやられると、みんな頭に来るのは当然です」
　拍手が再び。立村くんは静かな目で私を見下ろしていた。手を教机について、身動きひとつしなかった。
「それに、もしかしたら別のことを載せたい人だっているはずです。先輩達から聞いたんですけれど、絵の得意な人に頼んで、ひとりひとりの似顔絵を描いてコピーしてもらうとか、写真集を作るとか。他の先生たちにインタビューするとか。みんなで話し合えば、いろんな案が出るはずなんです。どうして菱本先生は、そういうことを飛び越えて、いきなり班ノート掲載の方に持っていってしまうんですか」
　ひゅうひゅう、共感する口笛を吹く奴あり。
「そうだな、清坂。お前は正しいよ。いろいろなことを相談するのも、いい文集作りの一つだろうな。でもな、清坂」
　なぜ、ここで「でもな、清坂」が出てくるのだろう。むっとして私は菱本先生をにらみつけた。
「今回は文集を作ることが目的ではないんだ。文集に、Ｄ組の一年を残すことの方が、ずっと意義のあることだと思うんだ。入学して、いろいろ戸惑って、悩んだり、泣いたり、笑ったりしただろう。そのことを一番、よくあらわしているのが班ノートなんだ。清坂は他の班のを読んだことあるか？」
「ありません」
「だろう。他の班ノートを見ることによって、『ああ、あの人はこんなことを考えていたんだ、この人はこんなことで悩んでいたんだ』ってことがわかる。そうすると、きっとその人の見る目が変わるだろうし、ぐっと親しみが持てるだろう」
「そうでしょうか。班と先生だけが読むものだからこそ、こっそり綴っている人だっているんじゃないでしょうか」
　完全に失言だった。貴史が後ろから思いっきり椅子を蹴った。わかっているって。でも止まらないんだもの、どうしよう。

　周りは一気にヒートアップして盛り上っていた。その分私は冷えていった。とんでもないことを口走りすぎて、とんでもない結末を迎えようとしているんじゃないだろうか。こずえも側で拍手してくれている。頭の中は完全に熱くなっていた。
「そういうものだからこそ、みんなに考えてもらいたいんだ。でもな、確かに清坂の意見にも一理あるよ。ま、座れ」
　菱本先生は空気が落ち着くのを少し待ち、次に立村くんの名を呼んだ。
「立村、評議としてではなく、お前自身はどう思っているんだ」
「あまり賛成ではありません」
　きっぱり、静かに立村くんは答えた。
「それはどうしてだ」
「清坂さんと同じ意見です。班ノート自体が文集作りを目的で書かれたものではありません。変な言い方かもしれませんが、人の日記を覗き込みするようなことは、やめるべきだと思います」

「そうだそうだ」と、後ろの席でさらに応援の声が飛ぶ。
「そうだろうか。立村、君は自分の心をそのまま、クラスのみんなに知ってもらう必要があるんじゃないのか」
「どういうことですか」
　声にかすかな険が走った。
「小学校時代、君がどんなに傷ついてきたのか、どんなに苦しんできたのか、今どれだけクラスのみんなに救われているか、素直に伝えられるだろう。班ノートを読んだ人だけではなく、クラスの人、および先生たちにも」
　教机についた右手がかすかに爪を立て、引っかくようなしぐさをした。その他は静かな表情のままだった。
　菱本先生の言葉はさらに続いた。
「一度はきちんと、自分の感情をはっきりと、伝えることが必要なんだよ、立村。確かに書いてしまうのは勇気がいったのかもしれないし、かくして起きたい気持もわかる。でもな、いつかは自分の気持ちと向かい合って、勝負しなくてはならない時が、来るんだよ。それが、今なんだよ」
　何も言い返さず、無表情のままうつむき唇をかみ締めていた。いつも沈着冷静に、表情を崩さず、穏やかに話している立村くんでなかった。一年前はこういう表情しか人に見せていなかったのだろうか。見たことの無い表情にくぎ付けになった。
　幸い周りの人は誰も、ぴんとこなかったらしく、がやがやと「班ノート掲載反対！」を叫んでいるだけだった。

　加奈子ちゃんがいきなり、手を挙げた。
「先生、いいでしょうか」
「どうした、杉浦」

「私、班ノートを全部掲載するのは反対ですけど、でも」
　ゆっくりと、笑顔を絶やさずに、加奈子ちゃんは立村くんに向かって言った。
「立村くんが書いたことを、載せるのは賛成です。小学校時代、立村くんが六年間いじめられて苦しんできたってことが、班ノートのおかげでわかったからです。学校にナイフを持っていってしまうくらい苦しい思いをしたって読んで、私、『あの立村くんが』って思いました。きっと立村くんのことをみんな、わかってくれるんじゃないでしょうか」
「杉浦が先生の言いたいことをみな、代弁してくれたようなものだな。立村。そうだよ。いじめられた過去があってこそ今、青大附中にいる自分がいるんだ。丸ごとの自分をあえて見せることが、今の君には必要なんだよ」

　もう立村くんは菱本先生の言葉なんて聞いていない様子だった。下を向いた目が、いきなり加奈子ちゃんに向けられていたのを、私は苦しくなる思いで見ていた。
　きっと加奈子ちゃんは、立村くんのことを思って、発言したんだと。
　たとえ、恋人の浜野と決闘を行った過去が含まれていたとしても。すべてを班ノートで告白した立村くんを認めてあげようとしたかのように聞こえた。
　『裏・ノート』の存在を加奈子ちゃんは知らないはずなのだから。
　本当は『裏・ノート』を使って、『本当はこうじゃないんだよ』と説明するつもりだったのに、私と貴史が手を引いてしまったために、九月十四日の『いじめられた過去』告白は本当のこととして認識されてしまった。
　自分で小細工しすぎたために、自分の首を締めただけ。

「立村、お前いじめられていたの？」
　何気なく飛んだ言葉に、はっと立村くんは身を起こし、なにかを口にしようとした。やめた後、
「わかりました。それでは、編集委員をこれから選びます。希望者はいませんか」
　評議委員の仕事をきちんと果たすことの出来る立村くんに戻っていた。
「はい」
　二人、いきなり手を挙げるのがいた。菱本先生は満足げに立つよう指示した。
「金沢と杉浦、この二人でいいか？」
　金沢くんは絵の得意なおとなしめの男子だった。あまり積極的なタイプではなかった。
　そして、杉浦加奈子ちゃん。
「杉浦はもともと、編集したりするのをやってみたいと言っていたからな。金沢は、さっき清坂が言っていたこと、ほら、クラス全員の似顔絵書きを最優先にやってもらう。あと、写真部の連中にはあとで、いろいろ頼みたいことがあるからな」
　やっと静まり返った。加奈子ちゃんは何度もこっくりとうなずいた。
「まあ、他の奴がやるんならば、いいかあ」
「どうせ立村みたく、読まれてまずいことないもんなあ」

「金沢、俺の顔は男前に書けよ」
　どうしてこんなに早く雰囲気が明るく変わってしまったのだろう。きっと、加奈子ちゃんがはずかしげに、にっこりとクラス全員にうなずいたからだろう。
　加奈子ちゃんの様子に居心地悪いものを感じていたのは、私ひとりだけだったのだろう。
　警報ランプのようなものが、激しく点滅している、そんな気がした。

「それならば、立村、君は席につきなさい。かわりに杉浦、金沢、議事進行を頼む。これからは文集関係について、この二人に権限を与えるからな」
　唇をかみ締めたまま、立村くんは生徒手帳を胸ポケットに納め、自分の席についた。後ろで待っていた貴史に、
「あのやり方は卑怯だよなあ、立村。まあ、俺とかは気にしてねえよ。お前もあまり落ち込むなって」
　と声を掛けられていた。立村くんの答えは、やはりなかった。後ろを振り向かなかったので、それ以上のことはわからなかった。

その十二　あとがきはめくれない（最終章）

その十二　あとがきはめくれない（最終章）

　今年の雪は遅かった。例年ならば十一月の終りにはつららもぶらさがり『オンザロック』ごっこも楽しめたのに、なんと本日になって本当の雪がちらついてきた。雪合戦やりたいけれど、さすがに私の方からは言い出せなかった。こういう時の貴史頼み。盛り上がってくれるのを待つしかなかった。
「スカートじゃあ、雪投げなんて出来ないよ」
　私はマフラーを深く巻いたまま、じっと外を眺めていた。
「何言っているんだよ。どうせ美里のことだ、明日にはなにかやるつもりでいるだろ」
「二月になったら全校雪合戦があるという噂は聞いているんだけどね」
「二月まで待てるのか？」
　近いうちに小学校の友達も誘って大々的にやりたかった。
「待てない。絶対、待てないね」
「じゃあ、方法を考えろよ。美里だったらそんなのお得意だろ」
　貴史は教室の隅で、ヒーターにもたれたままつぶやいた。
「そうだ、立村、お前もやらねえか」
　数学問題集の答えをノートに写している立村くんは、かすかに表情をやわらげ振り返った。
「手袋は、それ専用の防水ものを用意しないとまずいかもしれないな。やるなら早いうちに、話を持っていった方がいい」
　毛糸の手袋では、長時間雪玉を握るのが困難だ。
「期末テストが終わったら、やろうよやろうよ。どうせ冬休みになったら評議委員、みんなビデオ演劇の方で手一杯になっちゃうんだから」
「あんなのやりたくないよな」
『忠臣蔵』で浅野匠之頭をおおせつかっている立村くんはため息をつきながら、再び机に向かった。
　次の授業まで五分前。私は科目が数学であることを確認した後、教室を出た。

　あの学級文集会議から一夜明けた。
　私なりにいろいろ考えたり気を遣ったりしていたこともあって、別段変わったことは起こっていなかった。文集委員の二人が、ちょくちょく職員室に呼び出され、原稿の準備をしている様子は大体窺い知れた。でも、『文集作りは文集委員を中心に』という菱本先生の意向もあって、他の連中に詳しいことはもれてこなかった。
　立村くんも、班ノートのことについてはそれ以上何も言わなかった。はたして貴史は、『裏・ノート』の終了に伴う何かを伝えたのだろうか。そのことすら、聞き出せずにいた。

　クラスの連中も、さほど立村くんの過去に関しては関心を示していない様子だった。すでに立村くんは青大附中でそれなりの立場にあるし、小学校時代にいじめられていた過去があったからといってそう、いきなり態度を変える人がいるとも思えなかったからだ。青大附中での姿を見ているだけだったら、『泣き虫でいつも周囲からなぶられていた』と思う人はいないだろう。さりげなく面倒見がいい性格で、それを押し付けないように気を遣う性格。男女関係なく、人当たりよく接してくれる態度。
　――とっくに立村くんは、青大附中で受け入れられているのにね。
　――隠したい気持ちはわからないことないけれど、でも。
　――貴史の言う通りだよ。いまさら、誰が嫌いになるっていうんだろうね。

職員室に寄った。次の授業のお荷物運びだった。数学だから重たいものはないけれど、チョーク箱と教科書くらいは持たされるだろうと思っていた。。
　昼休みに入ったばかりだった。職員室の前には先輩たちがうようよしていた。知り合いの先輩に軽く会釈して入ろうとすると、なぜか菱本先生の机そばに加奈子ちゃんが立っていた。
　文集委員のことで呼び出されたのだろうか。

「加奈子ちゃん、文集委員の仕事って大変でしょ。しょっちゅう先生に呼び出されるしね」
　加奈子ちゃんは、私の顔を見るとまた微笑んだ。
　――笑顔の影で、この子なに考えているんだろう。
　前の日の文集ホームルーム以来、私は加奈子ちゃんと一度差しで話す機会を虎視眈々と狙っていた。立村くんも、貴史も気付かぬところで、一度はっきりとさせておきたかった。
　計画もよく練った。余りおおっぴらに恋愛話をしない加奈子ちゃんが、浜野のことを白状せざるを得ないよう、話の持っていき方をよく考えた。

「編集委員になっておけば、みんなが削りたいところ、前もって確認できるでしょ。先生にこっそりばれないようにすればいいから」
「もしかして加奈子ちゃん、前から編集委員やることになっていたの？」
「うん、言わなくてごめんなさい。でも、ちゃんとあとで削ってほしいところ、教えてもらえたら、全部削るから安心して」
　笑顔の影にうっすらと浮かんでいる、わけのわからないものが見え始めている。心霊写真のもやに近いようなもの。加奈子ちゃんをえたいのしれない存在として感じる正体がようやくつかめてきた。
「ありがと。それより、ちょっとだけ聞きたいことあるんだけど、いい？」
　曇りない笑顔で、加奈子ちゃんはうなずいた。廊下の窓辺に立ち、気持いい程度の隙間風を感じながら加奈子ちゃんを逆光方向に立たせた。
「私、今、すっごく悩んでいるの」
　切り出して、ためらった後。

「立村くんが加奈子ちゃんのこと好きだったでしょ。でも、加奈子ちゃん振っちゃったでしょ。私、立村くん好きだから、どうして降っちゃったのか知りたかったのよ」
　悩んだ末がこの言葉か。思い切ったことを言ってしまった。
「加奈子ちゃん、彼氏いるってほんと？」
「そんなこと誰から聞いたの？」
　窓際のななかまどに雪が積もり、揺れるたびにはらりと落ちる。
　私は軽い調子で続けた。
「立村くんがそんなこと言ったの？」
「ううん、この前、本品山中学校のところで、加奈子ちゃんとサッカーボールを持った男子が一緒に歩いているところ見ちゃったんだ。言わなくてごめん」
「他の人に、そのこと、言ってない？」
　私は首を振った。貴史も一緒にいたことは伏せておいた。
「よかった。清坂さん、どうもありがとうね。みんなに知れたらまた、仲間はずれになるかもしれないもの」
「どうして？　うちの組の奴、そんなせせこましい根性持っている奴、いないじゃない」
「だって」
　加奈子ちゃんはうつむき、やがてしっかと顔を挙げた。
「清坂さん、立村くんのこと、本当に好きなの？」
　思いつめたまなざし。握り締めた両手。
　私は答えず知らん振りしていた。何言い出すんだろう。加奈子ちゃんは続けた。
「私、あの人好きじゃないの。だから、本当のこと、教えてあげる」
「どういうこと」
「立村くんが書いたこと、覚えている？　昨日、菱本先生が話していたこと」
「ああ、立村くんの過去の話ね」
　知らないふりして私は相槌を打った。
「あれは本当のことなの。本当に立村くんの身の上に起こったことなの」
「告白された時に、そんなこと言われたの？」
「そんなこと、なかったわ」
　うそ、と私はつぶやいた。
　立村くんは『加奈子ちゃんに振られちゃったね』といわれても反論しなかった。
「私は、あの人が許せないだけなの」
　私は黙って、加奈子ちゃんの目を見つめていた。

　加奈子ちゃんと『彼』……おそらく浜野のことだろう……は、小学校六年の秋、塾で知り合ったという。成績優秀な加奈子ちゃんは青大附中を目指し、浜野は親に言われてなんとなくだったから受験意識はほとんどなかったそうだ。
「彼は、やさしいの。見た目は壊そうに見えるけれど、いつも私をかばってくれた。人見知りが

激しい私を、面倒みてくれたっていうのかな。その後、手紙をもらったのが六年の冬。お正月の合格祈願は、彼と一緒に行ったのよ。彼、受験しないのに」
　さらさらと述べる加奈子ちゃん。あどけなく、やわらかだった。
「私は青大附中に合格したけど、まだ彼とのお付き合いは始まったばかりだったから、学校帰りに待ち合わせることにしたの。彼、いつも私が帰ってくるのを待っているのよ。いつも、送ってくれるの。自転車で」
「レディーファーストって奴よね」
　私は加奈子ちゃんののろけ話を、信じられない思いで聞いていた。内容が想像つかなかったわけではない。『彼』と平然と口にし、『彼』のやさしさをためらうことなく話しつづけるなんて、いい度胸している。
「彼、照れないの。お友達にもみな、私を紹介してくれるの。堂々としているの。青大附中にそういう人、いないから」
　加奈子ちゃんは言葉を切って、様子をうかがうようにじっと見つめた。
「加奈子ちゃん、いい彼氏もっていいなあ、うらやましい」
「そうなの。すてきな人なの」
　もしかしたら私が榎本と、付き合ったとしたら、加奈子ちゃんと同じ事をしていたのかもしれない。ふとそんなことを思った。
「でも、どうして立村くんとつながるわけなの」
「学級名簿を彼に見せたら、立村くんのことを知っていたみたいなの。すべて教えてもらったわ。一年生の頃から、考えること、着ている洋服、話し言葉、すべてが品山のものじゃなくて、最初はからかっていた程度みたい。いじめられていたなんて、大げさなものじゃなかったらしいの。彼が言うには、いじめていた意識というのは全くなくて、ただ、仲間に入れてあげようとしただけだって」
「いじめているわけじゃなかったってわけね。彼が言うには」
「そうよ。いじめられたと思い込んでいるのは、立村くんだけよ。ちょっとしたことですぐ泣き出すし、テレビや漫画の話は全く関心を持たないし、なじもうともしないって。私、どう考えても、立村くんに問題があると思ったの」
　加奈子ちゃんの言うことには納得できることもあった。繊細な立村くんにとって、浜野たちの『面倒見いい態度』は耐えがたいものだったのだろう。貴史が前に『立村の部屋には漫画本が一冊もなかった』と話していたのを思い出した。
　私がもし、品山小学校で立村くんがそういう立場に立っているのを見たら、どうしていただろう。ぼんやりと考えた。
「筆箱ってあるでしょう。大抵の人は、カンペンケースのような感じでしょう。それなのに、立村くんはスウェーデンで作られた木製の文房具セットとか、そういう常識から外れたようなものばかり持ってきていたらしいの」
「なんとなく、目立っていたってこと？」
「着ているものも普通の人はジャンバーとか、Ｔシャツとか、そういう軽いものばかりなのに、

立村くんはコートもマント風のだとか、ボタンをはずさない開襟シャツとか、やはり常識からずれていたそうなの。それは私も思ったわ。青大附中で見ていてもそう感じたもの」
　同感、と言おうとして、飲み込んだ。
「相当目立っていたってことよね」
「ちょっとからかったくらいで泣き出すし、いつのまにか立村くんは一人ぼっちでいることが多くなったらしいの。それをいじめととるかどうかは本人しだいだけど、彼は決して、いじめなんてしていなかったはずよ。卒業式前に彼を、突き落としてけがさせるようなこと、する権利なんてないはずよ」
「ちょっと待って。けがさせたことってなに？」
　たぶん決闘のことだろう。詳しく知っているようだった。知らない振りして私は促した。

「お互いの卒業式が終わって、彼と一緒にお出かけする予定だったの。そうしたら、彼が足首ひねって動けないって連絡が来たの。それでお見舞いに行ったら、腰と右足をひどく打っていてしばらく家で寝ていたんですって。彼、サッカー部でしょう。中学のサッカー部からも誘いがきていたので、できるだけ早く練習したかったのに、できなかったの」
　同情はする。私も足首を捻挫して松葉杖ついて通ったことがあったから。
「どうしたのって聞いたら、彼、『男同士の決闘だ』とか言っていたのよ。その時は詳しいことなんて何も聞かなかった。偉いのよ。自分がけがしてしまって、やりたいこと何も出来なくなったのに、がまんしているのよ。本当だったら、その相手にもう一度文句をいいたくなるはずなのに。彼、その相手とは正々堂々と勝負したんだから、けりはついたって言っていたの」
　浜野は潔い奴だ。異論はない。
「その後、Ｄ組の学級名簿を見せたら、『立村がいるのか』と驚いていて。私もびっくりしたわ。私、立村くんってあまり存在感なかったのに、評議委員になってしまっていたから、どうしてなのかな、と不思議に思っていたの。本当だったら、女子はみな羽飛くんだと思っていたもの」
　加奈子ちゃんの表情はささやかな揺れも感じさせなかった。
「彼は偉いの。『俺は今だから言えるけれど、加奈子に合ったときはいきがっていたいやな奴だったんだ。俺はいじめたつもりなんてなかったけど、結局は相手を傷つけていたんだろうなあ。だから加奈子の前では最高の人間でいたかったんだ』って。四年生くらいまでは立村くん、とにかく泣き虫だったそうだから、ちょっとしたことですぐ傷ついて、彼も迷惑したみたいよ」
　立村くんの家庭事情とか、両親の不仲とか、いろいろな要素が含まれていたのだろう。
「それに、彼だけじゃないのよ。立村くんはいじめられていたと思い込んでいただけで、みんなそうだっただけなのにね。そのうちに立村くんが青大附中に、たった一人、合格した時、彼は冗談でこういったんですって。『俺には青大附中の友達がたくさんいるんだからな、覚悟しておけ』って。品山小学校では、『決闘』と言って、一対一でけんかをしたい時は、相手のカンペンケースを目の前で床に落とすのが合図なんですって。昔の時代劇みたい。その後で、場所を決めて、二人っきりで殴り合いとか、いろいろするんですって」
「加奈子ちゃんの彼に勝負を申し込んだってわけかあ」

「そうなの。立村くんは卒業式前に、静かに彼の机の前で、筆箱を落としてそういう意思がることを伝えたの。男子だから受けなくちゃいけないでしょ。仕方なく、彼は卒業式後にすることにしたの。でも、彼、立村くんのことをかわいそうに思っていたのね。普通だったら殴り合いとか、するはずなのに、彼の方から『自転車でのぶつけ合い勝負』にしようって申し出たのよ。立村くんは自転車の運転が得意だったってこと、知っていたみたい」
「彼は強い人なのね。本当にいい人ね」
　心がこもらない言い方で私は相槌を打った。
「立村くんは何もわかっていないの。どういうことをしたのかわからないし、彼は確かに立村くんの車輪に引っ掛けられる形でサイクリングロードから自転車ごと、突き落とされたけれど、もっと別の方法があれば結果は違っていたはずよ。けんかすること自体よくないことよ。でも、彼はあえて、立村くんにハンデをつけてあげたのよ。こんなに優しい彼に気付かないで、よく言えるものだわ。『殺されるよりも、殺してほしかった』って。その場からすぐに立ち去ったくせに。じっと見下ろして、彼が立てないのを確認して、自転車を漕いでいったそうなの」
「そうなんだ、決闘ってかっこいいじゃない。」
「しばらく彼は真剣に悩んだの。あれは立村くんが死ぬ気でかかってきた真剣勝負だった。一対一の真剣勝負に、品山でリーダーだった自分が、あの泣き虫の立村くんに任されたんだ。どうしてだろうって、ずっと春休み中考えていたんですって。いろいろ考え反省して、今ではきちんと『プライド』を持っていこうって決めたんですって」
「確かにすごいね」
「その話の最後に、彼は言ったの」
　加奈子ちゃんはゆっくりと、真っ正面から私を見つめ、口元の笑みはそのままで続けた。
「もし、立村くんに彼のことを話す機会があったら、わびておいてくれって。お互いにいい勝負ができた。いままですまなかった。俺ももう、いじめるなんてせこい手を使いたくないって」
「そのことを知ったのは、いつくらいなの」
「今年の夏休みよ」
　ゆいちゃんが立村くんと加奈子ちゃんを見かけるようになった時期だった。
　動揺したのを隠すため両手に息を吹きかけた。口元を隠した。
「深い意味はなかったのよ。たまたま立村くんに彼の名前を出したら、顔色が真っ青になっていてびっくりしたの」
「まさか、いじめられたことあるの、とか聞いたんじゃ」
「小学校時代、浜野くんと同じクラスだったってほんと？って聞いてみただけなのに。ずっとそれまでは静かに話をしていたのに、なんで私が知っているのかってたずねてきて。びっくりしちゃった。それから、彼の伝言も伝えたけれど、どうなのかな。聞いてなかったみたいよ」
「そりゃそうでしょうよ」
「でも、間違いはすぐに直すべきよ。立村くんは彼からそういうことを伝えられた以上、きちんと謝るべきよ。春休み、彼がけがをした分の償いもするべきよ」
　加奈子ちゃんの語調がだんだん鋭さを帯びてきた。

「もし、いじめられたからといって、復讐を認めるわけにはいかないと思うの。私、そういう人が嫌いだったから、どうしても立村くんに彼のことを覚えていてもらいたかったの。確かに青大附中で立村くんは評議をしていて、見た目絶対につらいことがあったなんて思わないでしょ。私も、それまでは思わなかったもの。でも、それがちっともつらくなくて、自分の勘違いだったとしたら、それは素直に認めるべきよ。私、その後も絶対に認めなかった立村くんがどうしても許せなかったの」

　チャイムが鳴り、私はいったん職員室に駆け込み、教科書とチョークを受け取ってきた。
　そうしないと冷静なままでいられなかった。
　加奈子ちゃんはまだ話したりないようだった。

　立村くんの行動については、すでにほとんど見当ついていることばかりだった。
　怖かったのは加奈子ちゃんそのものだった。
　加奈子ちゃんが『彼』こと浜野のことが大好きだというのはよくわかった。
　浜野がいい奴だということも頷ける。
　立村くんとの間で、浜野が足をひねるようなけがをしたというので大体の事情はつかめた。卒業式後の大喧嘩でけがをさせてしまったとなったら、学校で騒ぎにならないとは思えない。浜野もとことん攻め立てる権利はあったはずだ。それをせずに、ずっと黙っていた。
　いい奴だ。本当に加奈子ちゃんの恋人は、いい奴だ。
　でも、そこまで追い詰められた立村くんの気持を、どうして察してあげないのだろう。
　私には加奈子ちゃんの、一方的な言い分にどうしてもうなずけなかった。

「廊下、歩きながら教えてね」
　私は加奈子ちゃんと並んで、ゆっくりと教室へ向かい歩き始めた。足元が少し泥で汚れているようだった。雪で靴がぬれているせいだろう。
「清坂さんはもっといいタイプの人がいっぱいいると思うの。どうして立村くんのことが好きなの」
「好みがあるのよ。仕方ないわ」
　加奈子ちゃんはすずやかに微笑んだ。
「私、ただ立村くんに、あやまってもらいたかっただけなの。彼に、自分が勝手に傷ついていると思い込んでいたことを、あやまってほしかっただけなの。でも立村くんは私が頼んだことを一切、受け入れなかった。『杉浦さんの言うことは正しいかもしれないけれど、許せないことはある』って開き直っていたのよ」
「許せなかったのよ、きっと」
　私は軽く流した。
「第一、彼に立村くんを謝らせて欲しいって頼まれたわけじゃないんでしょ。それなら仕方ないんじゃない」

「だって、彼は間違っていないんだもの。そして、九月の道徳の授業で、立村くんは自分がいじめられたことを、正当化しようとした文章を、班ノートに書いていたわ。私、口には出せなかった。彼のことを思うと悲しかったの」
　加奈子ちゃんの書いたパートが思い起こされた。そう、加奈子ちゃんも、怒りの文章を綴っていた。

　十一月十七日　班ノート　杉浦加奈子

　私には難しいことわからないので、何も書けません。
　立村くんがどんな過去を持っていても、たぶん他の人は何も言わないと思います。ちょっと気になるのは、古川さんのいうような、迷惑かけて平気って考えです。
　いじめられたら殺してもいいんですか。人を刺してもゆるされるんですか。どっちが悪いかわからないのに。

　ただ言葉尻を掴んで、批判したいただけだと思っていた。加奈子ちゃんがその頃から立村くんを冷たい視線で見据えていたとすると、あの言葉もすんなりと頭に入る。

　――いじめられたら殺してもいいんですか。人を刺してもゆるされるんですか。どっちが悪いかわからないのに。

「だから、この前とうとう立村くんにはっきりと伝えたの。これ以上嘘ばかり書いて私たちをだまそうとするのだったら、私はみんなに本当のことを言うわって」
「この前っていつ？」
「二週間くらい前。彼の学校で直接謝るか、それとも本当のことをすべて他の人に私が話すか、どちらかを選んでって言ったの」
　二週間前。本品山中学で待った、あの日だ。

　北風が頭の中、吹き抜ける勢いで嵐が渦巻いた。押さえられそうになくて、足踏みをした。
「立村くんは、どちらを選んだの」
　加奈子ちゃんに尋ねた。答えはわかっていた。表情だけを確認したかった。
「『話したいなら話せばいい。青大附中で受け入れられなくなる覚悟はしている。でも、彼に謝る気持は全くない。杉浦さんが正しいと思っていることと同じように、俺もあの時にしたことは、後悔していないから』って」
　口角がきゅっと上がり、加奈子ちゃんは首をかしげてうなずいた。
　悪いとも、残酷だとも、思っていない表情だった。

「でも、それは間違っていると思うの。人に間違っていることを指摘されて、素直に謝らないで、さらにみんなをだまそうとするなんて、最低だと思うの。そんな人、清坂さんは許せないでしょ」
「それが本当だとしたらね。でも、そんなことして、加奈子ちゃんに何の得があるっていうの」
　待っていた言葉なのだろう。加奈子ちゃんは言った。
「彼の痛みを、あの人と合っている間、味合わせてやりたかったの。それだけなの」

　私はすべてを聞き終えて、二年D組のドア前に立った。まだ数学の先生は教室にいなかった。加奈子ちゃんごしの窓辺に目を移した。そこにはななかまどのふさを食べている小鳥が留まっていた。
「それで私に、立村くんの過去を話したわけね」
　窓辺に教科書とチョークを置いた。
「このことは、他に誰が知っているの」
「菱本先生。きちんと、こういうことは、大人に話しておかないといけないと思ったから。菱本先生も聞いてくれて、わかったって言ってくれたわ」
「昨日のロングホームルームで、やたらと先生が立村くんを責めていたのはそういうことだったんだ」
　加奈子ちゃんはうなずき、はっと時計を見た。
「大変、もう授業始まっちゃう」
「大丈夫よ。私が教科書もって入らないと、授業そのものが始まらないわよ」
　加奈子ちゃんの方を優しく叩いた。
　もうひとつだけ聞いた。
「じゃあ、どうして嘘を書いた班ノートを、そのまま残すようにしようって、言ったの？」
「立村くんが一番恐れていたのは、彼を傷つけたことじゃなくて、自分がいじめられていることを知られるのがいやだったからって、こと、それがわかったから。いじめられている自分を誰にも知られたくないってことが、大体わかったから」
　加奈子ちゃんはさらりと言い放った。強気でもないやわらかな口調なのに、言うことはきつかった。

　追い詰められていったのだろう。立村くんは日毎に自分の過去が暴露されることにおびえ始めていたのだろう。加奈子ちゃんのしていたことは、いわば恐喝だ。浜野のしていたことを、『いじめ』なのか、それとも『力の弱いものへの気遣い』だったのか、判断はできない。実際見ていないことを、決め付けるのはもういやだ。でも、立村くんとしてはどちらも耐えがたいことだったに違いない。自分が感じて苦しんだことを、『勘違いしたのはお前だ』と言わんばかりのことを言われるのはきっとつらかっただろう。加奈子ちゃんからは『いじめられていないのに勝手にいじめられたと思い込んだ』と責められ、プライドを捨ててまで浜野に謝れと言われる始末。これで神経がどうにかなってしまわない方がおかしい。

私には貴史がいた。家族がいた。相談できる相手がいた。
立村くんには誰もいなかったのだろうか。
どういうきっかけで『裏・ノート』という方法を思いついたのかはわからない。でもその前にどうして貴史や、本条先輩に相談しようと思わなかったのだろう。本当のことを話してくれればもっと、いい方法を探してあげられたのに。私と貴史とだったら、加奈子ちゃんの陰謀をうまく交わす方法を考えてあげられただろう。
言ってしまったら、嫌われると思っていたのだろうか。
クラスからはじかれてしまうと思っていたのだろうか。
そんなにまでして、いじめられていたという過去を知られたくなかったのだろうか。

加奈子ちゃんの脅迫通り、その事実を班ノートに書き込む。次に『裏ノート』でそれが嘘だということを書き込む。菱本先生および、加奈子ちゃんには自分がいじめられていた過去を白状したように見せかける。
立村くんはそうしないと、青大附中に自分の居場所がなくなってしまうと思い込んでいたに違いない。やたらと立村くんが同級生に如才なく振舞うのは、その頃の後遺症なのだろう。
。
菱本先生に立村くんが過剰なまでに反抗している理由も、浜野と重ね合わせれば一目瞭然だった。
『お前のためだから』『どうして本当のことを言わないんだ』と、菱本先生はひたすら、立村くんの中に入ろうとしている。それは浜野をはじめとするリーダー格の連中が、立村くんにしてきたことに違いない。もちろん菱本先生はいろいろ事情のある立村くんを心配しているから、しょっちゅう声をかけてやったりしているだけなのかもしれない。
でも、立村くんにとっては、第二の浜野と同じだったにちがいない。
親切そうな顔をしてずかずかと割り込んでいく、そういった人間たちとひとりで立村くんは戦っていたのだろう。
加奈子ちゃんの話からすると、浜野も悪意を持っていたわけではなさそうだった。彼なりに立村くんを気にしてくれていたのだろう。ただ、あまりにもやり方が乱暴すぎた。
私や貴史のように、腹が立ったらどんどん言い返し、足蹴り加えることのできる人間ならばともかくも。
何もいえず、かといって言い返すこともできない状態で、立村くんは何を思っていたのだろう
。
想像するだけだ。私に立村くんの気持ちを正確に読み取ることはできない。
でも私の心は、しっかりとつかめる。わかる。答えられる。
――いまさら、誰が嫌いになんてなるっていうのよ。
貴史のつぶやいた言葉と同じものが、胸の奥にかたく残っていた。

さて、立村くんが苦労して消そうとした過去を、加奈子ちゃんは文集という形で消えないもの

にしてしまった。
　さらに言うなら、このクラスは三年間、クラス替えがない。
　三年間、立村くんは加奈子ちゃんに浜野のことで傷をねちねちとささやかれることになるだろう。
　表面上は『クラス文集』で過去の記録がきちんと残ってしまう。立村くんは『裏・ノート』でもって、自分なりのあとがきをこしらえようとして、失敗した。この調子だと加奈子ちゃんも、立村くんが浜野に頭を下げるまではとことん責めたてつづけるのだろう。

　あとがきはめくれない。
　めくれないあとがきは存在しない。
　だから、卒業するまで、痛みは癒せない。

　悔い改めた恋人に、最低なことをした人だと、加奈子ちゃんは自分のしていることに全く、疑いを感じていなかった。
　加奈子ちゃんは、浜野がしてきたことを『善意』で解釈し、立村くんを責め立てることで帳消しにしようとしている。
　――いいわ。わかったわ。でもね。
「加奈子ちゃん」
　――立村くんの痛みも、私が味合わせてあげる。

　急いでドアのノブに手をかけた加奈子ちゃんを、私は強引に振り向かせた。
　笑顔で首をかしげる加奈子ちゃんに、私は平手打ちを食らわせた。
　ちょうど後ろに立っていた数学の先生が、あっけにとられて何も言えないでいる。ばかみたい。
　私はすぐに窓辺に置いてあった教科書とチョークを持ち直し、先生と加奈子ちゃんに笑顔を向けた。
「じゃ、お先に、加奈子ちゃん」
　頬を押さえて涙ぐむ加奈子ちゃんをおっぽり出し、私はさっさと教室に入っていった。

――終――

めくれぬあとがき

http://p.booklog.jp/book/63972

著者：舞夜じょんぬ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/63972

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/63972

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ